

俺の第2の人生は戦車道と言う競
技のある世界でした

ふみみん

気づいた時には赤ん坊。

これって転生ってやつかね？

考えても仕方ないし、あの英雄のようにイケてる

お兄さんになれるようにこれから頑張ろう！

数多ある基本原作沿いの転生もの。

オリ主・オリ要素あり。

原作にない方向性での話あり。

それに伴うキャラ改変あり。

原作キャラとの絡み及び恋愛要素あり。

戦闘描写極少・ご都合主義極大・文才なし。

なお筆者はアニメ・OVAアンツィオ戦・劇場版・最終章のみ視聴してます。
リトルアーミーは未読のため、幼少期は完全にオリジナルになると思います。

あ、これダメそうと思われたらブラウザをそっと閉じよう！

このキャラとの絡みは許せんor絡みが見たいという方は、

その情熱と物語を書き起こして投稿、しよう！

不定期かつ亀更新です。

初投稿だから多少はね？

……すみません許してください、何でもしますから！

目次

プロローグ 第2の人生の始まりです！ 1

1・あれから数年です！ 15

2・二人の戦車乙女です！ 25

3・大人のお話です！ 前編 39

4・大人のお話です！ 中編 47

5・大人のお話です！ 後編 67

6・少女達のお話です！ 77

7・戦車とフリフリです！ 89

8・好きなものと難しいお話です！ 105

9・夜ご飯と夜会話です！ 115

10・試合開始前です！ 141

- 11 ・ これが流星です！
- 12 ・ ひとまずのお別れです！
- 13 ・ 問題発生です！
- 14 ・ 黒森峰に突撃です！
- 15 ・ 腹を割って話します！
- 16 ・ 怖さを和らげます！
- 17 ・ 奇襲開始です！
- 18 ・ ビストロ西住開店です！
- 19 ・ ぴすとる西住呐喊です！
- 20 ・ 母と娘、そして春です！
- 21 ・ お友達と予想外の復活です！
- 22 ・ 悩んでいます！
- 23 ・ 戦車道、始めます！

- 24 ・ 戦車、探します！
- 25 ・ 戦車、乗ります！
- 26 ・ 聖グロリアーナです！
- 27 ・ 試合開始です！
- 28 ・ 決着です！
- 29 ・ お茶会です！
- 30 ・ 抽選会場……の外です！
- 31 ・ 前チームメイトです！
- 32 ・ 大事な告白です！

プロローグ～第2の人生の始まりです!～

初投稿です。

はじめまして、ふみさんと申します。

ありふれた転生物です。

数年前劇場版見てずーっと思ってたこと書いてみたくて、

それを書くためだけに初めから書こうと思いました。

願望とか欲望を垂れ流してるようなものになります。

最初から若干キャラが崩壊してるような……。。

俺は数日前からこの世界に生まれた。

初めはその状況にパニックに陥り声を荒げようとした。

声は出ずに大きな泣き声だけが響き渡ったわけだけが。

それから数日経ちある言葉が思い浮かんだ。

――転生

生まれる前……前の人生の記憶を保持したまま第2の生を受けること。

実際、自分になるとは思ってなかった。

そもそもこんなことが本当にあり得るのかって話だ。

俺だってマンガとかアニメなんかの設定でしかないと思ってたし。

ただまあ、時折来る看護師や明らかにサイズが縮んだと思われる自分の体を考えるときとそうなんだろう。

前の人生は……まあ、なんてことない普通の一般人だったと思う。

アニメとゲームが生きがだった男だった。

何で死んだかも覚えてなければ、どうやって死んだかも覚えていない。

俺の大好きなキャラみたいに自らの力で国境作って砕け散るような

漢な死に様だったら嬉しい。

あ、ない？（無慈悲）

というより、死んだって実感がまったくない訳で。

気づいたら目はぼやけて、喋れなくて、体の自由がまったく利かなくて。

……まあ、考えても仕方ない……仕方なくない？

前の人生に戻るわけじゃないしこれから考えた方が有意義だと思う。

種火周回の日々から解放されたと考えると天国かもしれないな(ハッピ)

でもあのゲームがないと言うことは地獄かもしれないな。

ガチャ回せないのか(絶望)

ちよっと首を動かしてみる。

まだ俺の目では見えないけどベットには俺の名前が書かれている。

呼ばれたこともあるし、父親が半紙に書いたものを俺に見せてくれたこともある。

あらやもりや
荒谷 守矢

これより第2の人生始めます！

……とは言ったものの現状俺に出来ることなんてない。
寝て、起きて、母乳吸って……母乳なんだよなあ……。

何がって、この歳で……いや、今は0歳児なんだけど。

もう両親の深夜のプロレスごっこ見たときぐらいの衝撃である。
で、母さんは俺をすごい触ってくる。

ほったを突かれながら時折聞こえてくる声は、

「うん、この子は絶対に嫁を取らせんし婿にもやらん」

「将来、この子の初めては私が貰う」

不穏である、生まれて数日ながら将来がとっても不穏である。

ただこの母親、どうやら人脈はすごいらしい。

色んな人が来ては祝福の言葉をかけて俺の顔を覗いて帰っていく。

違いがわかるのが声とシルエツトくらいだけど。

ただ、2人の女性がしょっちゅう来るんだよねえ。

「もーちゃんは二人の子供じゃないんだよー！」

あ、もーちゃんというのは俺のことだ。

そしてこの二人が同時に現れると必ず喧嘩する。

「しぼりんはすぐ来れる距離だから良いじゃないの!」

「そう言ってこないだオムツ変えたのはそっちだろちよきち!」

今日はどちらが俺を抱っこするかで言い争っている。

ちなみに先日は俺のオムツを変えるかで喧嘩しました。

ぼやけて見えないんだけど明らかにキラキラした目で見てた……と思う。

一人でトイレに行けないって哀しいことなの……。

「親友の子供に会うために態々家のへりで来るなよちよきちい!」

「近くの演習場でめんどくさいからって使った戦車そのままぶっ飛ばしてくるしぼりにだけは

言われたくないかなあ!」

へり? 戦車? 何この人たち自衛隊か何か?

確かに来る人来る人なんか軍服みたいな格好? してたし?

でも自衛官ってそんなに暇だっけ……。

へりならまだしも戦車で来るっておかしい気がするんだけど……。

「しいちゃん、まほちゃんとみほちゃんは？」

「ちゃんと下で常夫さんと一緒に待ってますよ」

「子供が居ない私が言うのもなんだけどそれはないと思うなー」

「ええい、だまらっしゃい！親友が子供を生んだともなれば先輩として

アドバイスするのが当然でしょう！」

散々二人で言い合った後じゃんけんを始めた。

気合が入りすぎて怖え。

「あれが次期家元達なんだよ？戦車道大丈夫なのかしらねー、もーちゃん
ベットから俺を抱っこしてほっぺをむにむにしながら話しかけられる。

次期家元ってなんか偉い人なんかなあ……。

え？そしたらうちの母親も割りとお偉いさんなのか!?

あんなこと子供に言ってるのに!?!残念だよ！残念すぎるよ！

そんなこと思ったら遠目でじゃんけんに勝ったたと思われるしぽりん？さんに抱きかかえられた。

いやすげえ。

どこがとは言わないけどすげえ。

母さんもすげえと思ってたけどしほりんさんともねえ。

「これは……まほとみほに負けない魅力がありますね……」

「しーぽーりーんー! はーやーくー!」

そう言いながらちよきちさん? が俺を強引に奪っていく。

これもやべえ、ちよきちやべえ。

「ああへへこころがびよんぴよんするんじやへへ」

残念だ! 俺の周りの大人は残念な人しかいねえ! ……!

「返せちよきち! ジャンケン負けたろ!」

ああへへ二つの胸部にもみくちやにされるんじやへへ。

やわらかくて張りがあってそれでいて弾力もあって……。

ああへへしほちよは正義なんじやへへ。

しばらくもみくちやにされる状況を楽しんだが思考と違って

体はそうもいかないらしくそろそろ疲れてきた。

天国を手放すのは非常に、非常に惜しいが母さんの方に手を振って助けを求める。

マミーヘールプ！

「ほら、母親の私が一番なんだから！」

いまだにいがみ合う二人から俺を取り上げる。

「ああー、もうちょっと……」

「それに友達とはいえ立場を考えたほうがいいよ？ パパに対応はしてもらってるけど」

二人が来るだけで騒ぎになるんだから！」

確かに二人が来た後は父親がげんなりしてるところをよく見るなあ。

「それは違うわよ、西住流・島田流をそれぞれ破った選手の子供よ？ 話題にもなるわよ」

「昔の話だよ、今はどう足掻いたって勝てないよ」

「ちよきちが面倒見てる選手を破ったと聞きましたか？」

「殲滅戦なら無理かなあ……フラッグ戦なら一撃加えればいいだけだもん」

「簡単に言いますね……さすが流星と言ったところでしょいか」

首を横に振る母さん。

「しいちゃんのとこはトップダウンが強すぎるかなあ？自分で動くって事が少なく感じるよー」

思うところがあるのかしぼりんさんの表情が暗くなる。

「ちいちゃんのところは変幻自在すぎて各車の車長と隊長とが連携できてない場面が多いかなあ」

ちよきちさんも同じく暗くなる

「しいちゃんともちいちゃんとも絶対的に不足してたのは経験かなあ？」

「頭が痛いですね……」

「色々な相手とやってれば嫌でも経験とか対応力は身につくと思うけどねー」
そういうながら俺のほったをつつく。

「しいちゃんのところには柔軟な発想を持てる副隊長クラスが、ちよきちのところには

ちいちゃんちやしいちゃんクラスの隊長と信頼のおける車長がいたら間違いないかな？」

「簡単に言ってくれるわねえ……」

「流派が大きすぎるってのも考えものだねえ、二つがひとつになったらちよいといんじやないかな？」

むむむ……難しい話をしているようだ。

まあ、組織なんて大きくなればなるほど舵取りは難しくなるってそれ一番言われているから。

下っ端社員だった俺にはスケールがでかすぎて関係ない話だね。

「単機、隠密で侵攻してフラッグ車を狙撃で一撃白旗上げさせて勝つ人間には言われたくないですが……」

「私は砲手だよ？、気づかれなかったのは操縦手の腕がよかったからだし、撃つのだって装填手が

私と呼吸合わせてくれるからだよ。通信手が各車の状況を把握してくれなきゃまともに進めないし

そもそも作戦を立てたのは車長と隊長なんだから私がすごいわけじゃないかなって」

「あらゆる場面で必中させてくる流星の子供ですよマスコミも騒ぎ立てますよ……ただ……」

そういいながらしほりんさん多分難しい顔をしながら俺を覗き込む。

「もったいないですね……男の子ですか」

あれ？男の子じゃまずいの？

「男子で戦車道取る人間なんてまず居ないわよ」

「女子の嗜みとまで言われてるからねえ」

「やれて中学生くらいまでかしら？公式の大会にはまず出れないわね」

「んー……でもこの子が戦車やりたいっていうなら私はやらせてあげたいかな！戦車道？なにそれ？そこまで言われるとちょっと興味が湧いてきたな。」

母さんはその関係者っぽいし出来そうなのは色々やりたいからな。

手足を振って意思表示、これが俺にできる精一杯。

「あら、守矢君なんかきちゃっきゃし始めたわね」

「戦車道って言葉に反応してるような感じね」

「いいんじゃないかしら、お堅い西住流と違って私はさせてもいいと思うわよ？」

ああ、また売り言葉を……。

「おうおう、喧嘩売るなら買うぞちよきちい」

「もりやくーんしぽりんがこわいですよー？」

「よし！表に出ろ！」

しかし何故に二人は俺なんかに構うのかねえ。

親友の子供とはいえ戦車道ができない？男だし。

「もしかしたらもーちゃんをまほちゃんやみほちゃんの婿にとか思ってたのかもねえ」

それはそれでとんでもねえな。

実質0歳で会ったこともない相手やぞ……。

しかし、なんか次期家元とは思えん会話だな。

しかもライバル同士だろ？

「まあ、こんなところじゃないと3人で会えないからねえ」

その一言で合点が言った。

3人は本当に仲がいいんだろう。

普段は他の眼があるからここまで素になれないんだろう。

2人はお互いライバル同士の流派だし1人は1選手なんだから。生前の俺にもわからないようなストレスなんかもあるんだろう。

「ちょっとはガス抜きさせてあげないと、ね」

そう俺に向けられた表情はとてもやさしげだった。

出来るだけ早く更新できるといいなあ……。

1・あれから数年です！

2 度目の初投稿です。

一気に時代が飛んだりするし文章になってるかわかんないし……。

1 ミクロンでもいいから他の方の文才が欲しい。

「……ここだな」

俺は息をするようにトリガーを引く。

轟音と共に砲弾が放たれ吸い込まれるように敵戦車に命中する。

「フラッグ車行動不能！ A チームの勝利！」

ふーっと一息つき椅子に背を預ける。

ここは戦車の砲手席で俺はこの戦車の砲手。

第2の人生、砲手として謳歌しております。

自分の強みがわかりやすく現れたのが小学校に入学してからだ。

体育や昼休みに球技なんかや鬼ごっこなんかをやるんだが、

誰がどこにどの程度の速さで移動してるかが少し見ればなんとなくだがわかるのだ。

バスケなんかであればどれくらいの力でどれくらいの角度で放てばいいかもわかってくる。

自分でも驚くほどの空間認識能力の高さだと思う。

これについては恐らく生まれてからの生活と母親の遺伝が多分に含まれているのだろう。

戦車道の選手である母さんにくっついて行っでは

一緒に地図を見ながら実際の演習場を歩いたりした。

「やっぱり実際現場を見ないとね、地図だけじゃわからないこともあるのよ」

とは後輩達に教えていた母さんの言葉だ。

整備担当の父さんにくっついて行っでは整備を眺めたり手伝ったり。

手伝いといっても軽めの工具を持っていったり、

体が少し大きくなってからは簡単な整備も手伝ったりもした。

「お前本当に整備好きだなあ……まあ、男の子だし気持ちはわからんでもない」

ええ、こういう機械とか大好物ですよ。

正直な話、反則だとは思う。

思考は大の大人と変わらないため、自分の意思でその方向を鍛えられる。

それに子供のころの成長期ってのはすごい。

比喩なんかでスポンジが水を吸収するように……

と言う表現があるがまさにそのとおりだと思う。

両親も知ってか知らずかその方向での成長を促してくれるような育て方をしてくれたし。

小学生を明らかに逸脱した能力の高さを知って色々な人から誘いを受けた。

球技がやっぱり多かったかな？

ただ、その誘いを全部断った。

体力も筋力も人並みしかないし、やりたいことがあったから。

それが戦車道。

男の身ではあるが戦車道を始めた。

だって前の人生ではなかったものだもの！

初めは母さんに我侬を言って乗せてもらった。

試しに砲撃をさせてもらったが至近弾にはなつたが当たらなかった。

母さんや他の人は驚いていたが当てられなかったことが悔しかった。

毎日学校が終わっては母さんのところに行つて撃たせてもらった。

次第的に当たるようになって今度は行進間射撃の練習を始めた。

やっぱり最初は当たらなかったが練習すると当たるようになった。

楽しかった、それに褒められると精神年齢はおっさんに近いが嬉しかった。

調子に乗ってドリフト中の砲撃なんかも練習した。

その結果がこれだ。

当然非公式にはなるが、11歳の男子小学生だが砲撃に限定すればトッ・プ・ク・ラス成長して行くのが楽しすぎてやりすぎたな（確信）

俺自身まさかここまでとは思ってなかった。

……母さんの子供じゃなきゃここまでは到達できなかっただろうな。

これについては感謝してもしきれない。

自分の我儘で男なのに戦車道に関わらせてもらってるしな。

聞いたところによるとやっぱり偏見とかすごいらしいし。

「やっぱ守矢君がいると撃破率が違うねえ」

「車両がどんな状況であろうと撃てば必中とかチート過ぎる」

同じ戦車内のおぼ……お姉さま方から肩を叩かれる。

この人達も俺を蔑んだりせずにちゃんと砲手として扱ってくれる貴重な人達だ。

「行進間射撃と言っても今回は相手が棒立ちでしたから……それならいいですよ」

「言い切るねえ……流星は流星の息子にして……」

「はぁ……アーラシュはやめてくださいよ？ 足元にも及びません」

これが俺についた渾名だ。

相手が偉大すぎるにもほどがあるだろ……。

たった一射で国境を作った英雄やぞ？ 周回でお世話になりまくる英雄やぞ？
いや、キャメ○ットでのあれは痺れた、知らずに涙してたもん。

光栄ですよ？ 俺みたいなミジンコがそう言ってもらえるのは。

だがこの大英雄の名前になった経緯が微妙すぎる。

荒谷守矢（あらやもりや）↓荒 守（あら もり）↓荒 守（あら しゅ）

↓あれ？ そんな感じの偉人いなかったっけ？ ↓すげえ！ この人の弓すげえ！

↓パパパツと決めて、終わり！

やめてくれよ……（絶望）

俺がある試合で取った戦法がそう言わせたつてのもあるらしいんだけど。

……うん、我ながらあれはやばかった。

頭にきてたつてのもあるんだけどある意味で流星^ス一^テ……

みんなもアーラシユさんには感謝しようね！

「あ、守矢君。演習終わったらすぐに会いに来てって照^てさんが言ってたよ」

「母さんが？」

照と言うのはうちの母親の事だ。

「宿題はちゃんと終わらせてるし何かしたっけ……」

まったく身に覚えがないが……。

「後はこっちでやっとかから先上がつてていいよ」

「了解です、後はよろしくお願いします」

行ってみたらわかるか。

「ねえ、モリモリつてたまーにすっごい歳いつてる様に見えない?」

「あー、同じ年くらいに感じたことはあるかも」

「やっぱ照さんの躰が厳しかったりするのかなあ?」

「今日も頑張ったねー！あぁもう！ママがハグしたげる！」

はい、絶賛スキンシップを受けてる最中です。

親バカと言うかなんと言うか……母さんからの愛がやばい。

「母さん、何か用事があったんじゃないの？」

一児の母親とは思えないくらい若く見えるのだがそれはそれ。

正直、鬱陶しく感じるときもある。

同じ歳ならしほさんや千代さんの方が断然いいわ。

「もーちゃんが冷たい！」

はぁ……会話が前に進まない。

母親からの愛の抱擁から脱出する。

「母さん、用件言わないなら今日は一人で寝るからな」

「はい！明日熊本へ泊まりに行きます！」

「熊本？しほさんとこにでも行くの？」

「せいかーい、顔見せに来いってさ」

最後に会ったのは……いつだったけ？ なんかの交流戦のときだったけ？

「まあ、それとは別の思惑があるような気もするんだけどね……」

思惑ねえ……母さんを西住流に引き込むとか？

……いや、無理だな。

この母親が西住流の統率された動きに乗つかるとも思えん。

どちらかと言えば島田流に近いけど……これも無理だな。

現状、この母親を制御できる人間がいるとは思えん。

出来るとしたら千代さんのお子さんかねえ。

確か小学2年生くらいで次元の違う車長らしいね。

なんか、母さんが千代さんと電話してるときに何度も聞かされたらしくて

げんなりしてた覚えがある。

「じゃあ、明日は朝早くから熊本に移動するからちゃんと起きること！」

「はいはい、特別持っていくものとかは？」

「んー……ママへの特別濃厚に愛する気持っ」

「シャワー浴びてきまーす」

「もーちゃんが厳しい!!!!」

けどまあ……しほさんに久しぶりに会えるのは嬉しい……かな？

母親の名前はウィリアム・テルから

2・二人の戦車乙女です!

ちゃんと書き上げたので初投稿です。

本編内容確認するために映像を見るんですが、
いつの間にかテレビの前で1日終わってるんですよ。

ガルパンはいいぞ

車の窓から見えるのは一面緑の田園風景。

窓を開けると心地よい風が頬をなでる。

いやあ、働いてたころはこんなに心に余裕なんてなかったなあ……。

家の付近もこんな風景まず広がってないからなあ……。

「この光景……癒されますねえ……」

「たまーに小学生らしからぬこと言うわよねえ」

「見知った人とはいえ女性ばかりですし？それに母さんがこれだとやっぱ俺がしつかりしないとなって」

戦車道のミーティングなんかは俺が同席してなきゃ話にならん。

自分で立てた作戦自分で忘れるってどうよ？

「同級生からは守矢おいちゃんって言われてるんでしょ？」

若くなくてかなりはっちゃけたとはいえ、

根底はやっぱおっさんの思考だし喋り方もたまーに地が出るのよ。

不本意、実に不本意だがしょうがないかとも思う。

「整備の連中もお前のことあんまし子供とは見てない節があるぞ？」

「何かあの人たちにしたっけ……」

「宗一郎んとこの子供はほんとに小学生か？」

アイツにゃ尻の毛まで抜かれてるって……お前何かやってるか？」

宗一郎は俺の父親の名前だ。

荒谷 宗一郎

荒谷 照

荒谷 守矢

これが我が荒谷家だ

。

「……それについては黙秘いたします」

「別に何やったって構わないが人の迷惑なる事と警察に厄介になることだけはやるなよ」

「わかってるよ」

父さんの職場は逆に男ばかりで気兼ねする必要がないから楽。

精神年齢おっさんだから妙に気が合うんだよね。

それにちよつと麻雀で勝負して勝ったら支援してもらってるだけだから（意味深）

ああ、飯とかお菓子とかジュースとかだぞ？

お金賭けたらダメってはっきりわかんだね。

「パパったら、うちのもーちゃんに限ってそんなことないわよ、ねー」

「いや、母さんに同意を求められると自信なくなってくる……」

「ちよつとー！」

「はあ……この減らず口は誰に似たんだか……と、着いたぞ」

でけえ。

なんだこの日本家屋。

まるで武家屋敷じゃねえか。

流石は西住流本家ってところかねえ。

「しいちゃーん！きたよー！」

入り口から大声で叫ぶ我が母親。

小学生かおのれは！

「照、それはないわ」

パパも呆れとったわ！

しばらくして不機嫌そうな顔をした美人さんがやってきた。

あいもかわらず綺麗だねえ、しほさん。

「……一応私の立場を考えてくれると嬉しいのですが？」

そーだそーだ！言ってやれ言ってやれ！

「嬉しいくせにい!このこのお!」

「はあ……」

頭が痛い……なんかこう軽すぎるんだよ母さんは……。

「家の照が^{母さん}本当にすまない……すまない……」

俺と父さんが頭を下げる。

「あれ?何が?私何かしたっけ?」

母さん……。

恐らく父さんも心の中で涙を流しているだろう。

「頭を上げてください……照さんとの付き合いも長いのでわかってます……」

コホンと咳払いをして仕切りなおすしほさん。

「お久しぶりですね、宗一郎さん」

「お久しぶりです、しほさん」

「後で常夫さんに会ってやってください、宗一郎さんが来るのを楽しみにしていた

ので」

「ありがとうございます……久々にあいつとメンテ談義が出来るなあ……」

父さんちょっと嬉しそうだな。

父さんも常夫さんも技術屋としての腕ってとんでもないらしいもんなあ。

同じ戦車を整備しても二人の内一人でも関わった車両ってすぐわかるらしいし。俺は父さんの整備しか知らないからなんとも言えないんだけど……。

「守矢君もお久しぶりね」

ちゃんと自分と目が合うようにしやがんで微笑んでくれる。

ああへへしほさんは母親の鑑なんじゃへへ。

「はい、しほさんもお元氣そうで」

「照さんと違って礼儀正しくていい子ですね」

「しほりん？それどういう意味かなあ!？」

「母さん、わからないならもう喋らない方がいいと思う」

「もーちゃん!？」

「……そう言う所は宗一郎さんに似てますね」

おっ、そうだな。

「もう!」

もうじゃないです、仕方ないんです。

「そうだ、しいちゃん! まほちゃんとみほちゃんは?」

「二人ともいますよ、まほ! みほ!」

しほさんがそう呼ぶと縁側から二人の少女が駆け寄ってきた。

「何でしょう、お母様」

「お母さんなに?」

「以前言っていた今日明日と滞在する私の友人です」

二人が前に出てくる。

「西住まほです」

「西住みほだよ!」

うん、可愛い(本音)

「女の子だよ! しいちゃんのとこの女の子だよパパ! めっちゃ似てるよパパ!」

「わかったから落ち着こうな……僕は宗一郎、こっちが照」

「よろしくね! まほちゃん! みほちゃん! 二人とも抱っこしたことあるんだよ」

! (ツム) !」

「んで、こいつが守矢。みほちゃんと同い年だよ」

父さんに促されるように前に出る。

「守矢です、うちの母さんが残念でごめんね？」

「よろしくね、みほちゃん」

右手を差し出す。

やっぱり挨拶は大事だっではっきりわかんだね。

「よろしくね！守矢君！」

みほちゃんが俺の手を取ってぶんぶん上下に振る。

あ、同年代の中で突き抜けて可愛いわ天使か（確信）

「……」

一方まほちゃんはこちらをじっと見ている。

「まほちゃんもよろしくね？」

笑顔で握手を求める。

「……っ」

顔をぷいっとそむけてしまった。

やっぱ天使か(確定)

しかしフレンドリーすぎたか、反省せねば。

「っと、ごめんね? ちょっと馴れ馴れしすぎたね」

「これは……あれ……?」

うわあ、なんか顔が真っ赤になってる……。

まさか知らないうちに地雷原でタップダンスしちゃった感じ?

やっちゃまったなあ……。

「守矢君、守矢君」

ちよいちよい、とみほちゃんに手招きされる。

「お姉ちゃんね、きょうすごい楽しみにしてたみたい」

みほちゃんが耳元で小さな声で教えてくれた。

「ほんと? 俺にはそう見えないんだけど……」

「逆だよ、お姉ちゃんただ恥ずかしがってるだけだよ」

「ああ、男の子に免疫がないとかそういう……」

「違う違う、それはねお姉ちゃんが守矢君のファ……」

「みほ？」

「きやああ！」

いつの間にか接近してきたまほちゃん。

気づいたみほちゃんは逃げるがまほちゃんに捕まった。

「これか、この口が悪いんだな？」

「おふええふあん！いふあい！いふあい！」

仲のいい姉妹のじゃれあいだな。

「うんうん、仲がいいのはいいことだね」

「もーちゃん、なんでこうなってるか理解できる？」

「えーと……迂闊に女の子に握手を求めたから？」

「もーちゃんはもうちょっと勉強しようねー」

……何を？

ため息をつくしほさん。

あんにゆいなしほさんも綺麗ですよ。

「まほ！みほ！お客様の前ですよ！」

「……………めんなさい」

しょんぼりする二人。

「しいちゃん、子供は元気なくらいがちょうどいいよー」
ほんと真逆だな、母さんとしほさん。

「まほちゃん、みほちゃん」

母さんがみほちゃんとしほちゃんの前にしゃがむ。

「いまからちょーっとしいちゃんとお話があるんだ。

よかったらうちのもーちゃんと遊んでくれないかな？」

「母さん、なんかあんのか？」

「まあ、子供には難しい話かなあ？」

「俺がいなくてそんな話して大丈夫なの？」

「もーちゃん、ママだってやるときはやるんだから！」

「照さん……………あなた……………」

しほさん、可哀想な目で見ないであげて……………。

「もーちゃん、頼んでもいい？」

にかつと笑う母さん。

「私に任せてくだs」

「うん！任せて！守矢君いこっ！」

差し出されたみほちゃんの手を取る。

「いえすまむ、まほちゃんもほらいくどー」

まほちゃんの手を引いていく。

「む、そう引っ張るな」

「気をつけなさいよー！」

ぶんぶんと手を振る母さんと

「暗くならないうちに帰ってきなさい」

少し微笑むしほさん。

しほさん美人すぎ女神か。

みほちゃんに連れられてきた駐車？スペースにはII号戦車が止まっていた。

普通家に戦車?とも思うけど俺の家にもCV33があるから、多少はね?

「よしⅡ号にのりこめえー!」

わあい^^

「みほ、運転は私がする」

まほちゃんに続きⅡ号に乗り込もうとするが、

「守矢君は上でいいよー!」

みほちゃんが先に2号の中に入っていた。

Ⅱ号戦車って3人乗りだったか……。

俺と密室空間に二人ってのはまほちゃんに悪いしお言葉に甘えよう。

「出発するぞ」

重低音を響かせながら動き出すⅡ号戦車。

「しゅっぱーつ!」

荒谷家は福岡にあります（唐突）

プロリーグでしほさんが戦車でぶっ飛ばしてくる書いちゃったから九州にしよう！どこにするかな……もう住んでるし福岡でいいな！
って、感じです。

この適当さ加減はどうにかしないといけないんだろうね！

3・大人のお話です!～前編～

夜中に前書きを打っているので初投稿です。

今は絶賛失業中でこのペースで投稿できていますが、

もうそろそろ本気出して就職活動せなあかんと思ってるので

更新はだんだんと遅くなると思います。

働いてる時は働かないのがこんなにつらいものだとは思わなかったゾ。

私はしいちゃんに自分の書斎へと通された。

「さてさて、しいちゃんが私を呼び出した理由を聞きましょうかね」

子供達を遊びに、パパ達はパパ達で整備場に行かせてある。

「理由ですか？久しぶりに友人に会いたかった……それだけではダメですか？」

お茶をすすりながらしぽりんが話をする。

「いや、流石にそれはありえないかなあ？」

そうだったらいんだけどさ。

「私・が・こ・こ・に・居・る・っ・て・時・点・で・今・ま・で・じ・ゃ・あ・り・得・な・い・も・ん」

あり得ない……そう、あり得ないのだ。

「だって西住流を散々扱き下ろした張本人だよ？」

「……」

話は数十年前……自分達が学生だった時まで遡る。

私としいちゃんはそれぞれの学校で隊長をしていた。

私は個々があまり強くないこともありみんなで協力して勝利を挙げる戦車道を。

しいちゃんはやはり西住流の教えに沿った様な形で戦車を動かしていた。

撃てば必中守りは固く進む姿は乱れ無し鉄の掟鋼の心それが西住流

いかなる犠牲を払ってても勝利を掴む勝利至上主義。

当時から西の西住、東の島田と言えば畏怖の対象であり
どの高校も対戦すれば敗北必至と言われていた。

事が起きたのは戦車道全国高校生大会決勝。

私達は数車両で迂回し側面から砲撃する別働隊として動いていた。

「隊長、本隊発見」

スコープ越しに敵車両を視認する。

「おいおい、プラウダとか聖グロのほうはまだ警戒してたぞこれ」

「これが王者としての戦いつてやつ？」

「少なくとも数年前より弱体化してるのは間違いない、OGが言ってたからね」
どう足掻いても勝てなかったと聞いたことがある。

「昔はとんでもない速度で統制された車両が制圧前進、ファランクスがものすごい
勢いで

小細工を踏み潰しながら突っ込んでくるようなもんだったって」

「でも今見る限りその様子はないよなあ……」

足場が悪いとはいえ隊列は乱れフラッグ車の護衛もおざなりだ。

隊長の力量なのかそも部隊の錬度が低いのか。

これ見る限り後者だろうな。

これまでの試合を見ても隊長車だけは次元が違ってたもの。

ただ、今日以前の部隊と比べれば全然マシだな。

準決勝なんて個々はそこそこ強そうだったけど連携がまるでなかってなかったし。

「隊長車突っついたら面白くなるかなあ？」

隊長車に標準を合わせる。

でも今日のはなんか余裕なさそうだなあ、あの隊長……本当に西住流？

「照、楽に終わるならそれにこしたことはないよ……ん？」

味方部隊との連携の最終確認を終え攻撃を加えようとしていた時だった。

しいちゃんの学校の最後尾の戦車が川に滑り落ちた。

誰のせいでもない、朝から降り続く雨が足場を脆くしてしまっていて

戦車の重量に耐え切れず崩れて滑り落ちてしまった。

川も増水し始めているので戦車の安全性考慮したとしても、

迅速に救助に向かったほうがいいだろう。
何かあってからじゃ遅すぎる。

だが、一度は止まった本隊の戦車は進撃していた。

川に沈んでいる選手を見捨てる形で

「おいおい！何考えてんだあいつら!!」

驚く隊長、それをよそに黒森峰は進軍していった。

「クソッ！完全に置き去りにしやがった！」

沈んだ車両が移動してくるなんてことはない。

完全に水没したためエンジンがかからないのだろう。

雨は降り続き今もお水かさは増している。

この悪天候だ、本部の救助が遅れたら？

もし車両内に水が浸水していたら？

特殊カーボンでコーティングしてあり競技用に改造してある戦車だ、きっと安全なのだろう。

だが、絶対などありはしない。

「隊長！本部に問い合わせても異常は確認されずとの回答が！」
上からの圧力か！

高校戦車道連盟にもかなりの数の西住流が絡んでると聞く。

ここ数年、黒い噂を何度も聞いた。

ふざけるな、何が西住流だ。

何が勝利至上主義だ。

何が王者だ。

人命より重いものなどあるものか。

もし、救助活動をし始めたのであればこちらは手を出すつもりはなかった。

甘いかもしれない。

しかしそれは私達が最大限出来る相手への敬意であったから。

「全員聞け、この状況で取れる行動は二つだ」

隊長が全車両に向けて話し始める。

「一つは啄木鳥を発動し試合を終わらせる、一つは別働隊で救出に向かう」

前者はもしかしたら黒森峰相手に大金星を上げて優勝できるかもしれない。

ただし、黒森峰の進撃によって先ほどの状況がまるで変わってしまったため、陽動のポイント、本隊の位置の調整などかなりの時間がかかる。

後者は簡単だ、即座に救出に向かい最速で選手を助けに行く。

「……ただし、別働隊が居なくなる以上間違いない我々は負ける」

そう、これは別働隊と本体での連携がなければ成立しない戦略。

どちらかが欠けた時点で敗北は確定的になる。

しかしこの状況、この天候と先ほどの報告からして救助が来るのはまだ遅れる。

「……諸君らの意見を聞く」

このままだと完全に原作から乖離するなこれ……。

4・大人のお話です!～中篇～

何故か書き上げられたので初投稿です。

F G O のイベントやらなきや……。

更新遅くなるだろうけど是非もないネ!

「ちょっとすみません」

表彰式も終わり私も自分の学校へ帰ろうとしていた時だった。

「アンタが黒森峰の隊長の西住しほさん？」

決勝戦の相手、その一人が私に話しかけてきた。

また何か言われるのだろうか？

試合の後、そういった連中は結構多い。

私が西住流本家の人間だと知っていて擦り寄ってくる連中。

島田と並び称される名前を利用したいやつらだ。

聖グロやサンダース、プラウダなどの強豪校にはない浅ましい考え。この生徒も西住に取り入って強くなれると勘違いしているのだろう。だが、今の西住流に取り入ったとして強くなれるわけがない。

私は……。

私は今の西住流は好きではない。

以前は西住流の戦いに誇りを持っていた。

統制された陣形、圧倒的な火力を用いて短期決戦。奢らず、貶めず、挑戦するものへの敬意は忘れず。

王者としての威風堂々とした戦い方。

その在り方をもって王者たる西住の名を知らしめる。

そんな西住流が好きだった。

だが、数年前より家元が変わり内部は激変した。

腐ってしまったと言ってもいい。

勝利至上主義は昔と変わらない。

理念・思想も変わらない。

だが大切な何かを置き忘れ、

老人達の為の利益の為に狂った様に勝利を求められる。

近年、本家は武道としての戦車道より西住の名を利用した

戦車道ビジネスの方に熱心だ。

西住流の名を使い金で選手を集め部隊を作る。

逆に金で西住流の名前を買う連中だっている。

正直こんな部隊でまともな指揮が出来るはずがない。

私とあいつら、戦車道に懸ける熱量が違いすぎるのだから。

この黒森峰での指揮は苦痛でしかなかった。

今の西住流の守らんと黒森峰の隊長で指揮する自分。

今の西住流を否定する戦車道の選手としての自分。

私は西住流が嫌いだ。

そして逆らわない自分自身も嫌いだ。

高校生最後の大会……決勝戦のこの部隊編成だけが私の精一杯の反抗。

この子達は本家の上の人間には黙っていた部隊。

お金でも名前でもなく。

ただの西住しほである私を慕って3年間も着いてきてくれた彼女達。

正直、強豪校でしかも決勝で出れるような技量はない。

けれど、私は……あんな連中と優勝するのであれば、いい。

優勝なんていい。

西住の名前もいい。

もうどうだっていい。

私はもう西住流を捨てようと思っっている。

だったら適当に相手してやればいい。

そんな話を持ちかけてきたとして私が何か出来るわけもない。

こいつもその一人だろうから。

「そうですが、何か……ッ!？」

私が全てを言い切る前にすごい力で胸倉を掴まれた。

「アンタ、何考えてんの？何であの状況で全車進撃させたの？」

「あなた何を……」

いきなりのことで困惑する。

「最後尾の車両が、川に落ちたよね？」

……何でこいつはそのことを知っている。

あの場に居たのはこちらの陣営だけのはず。

「何で知ってる？ って顔してるね。あの、瞬間を見てたから」

更に力が強くなる。

あの瞬間を見てた？ どこで？ どうやって？

「私達がどう見て様が関係ないし、そもそもいちゃもんつける気はないから、安心していいよ」

優勝旗なんていらなから、と吐き捨てるように言う生徒。

「そっちが進撃した後、落ちた戦車引っ張り上げたんだけどね」

引っ張り上げた？ わざわざ助けたって言うのか？

「車内、どうなったかと思う？」

落ちた彼女達の状態だけは直接聞いたわけではないが知っている。

落下した時の衝撃で多少の打撲を……。

「破損箇所から浸水してしまってパニックになってたよ」

……え？

「こっちが白旗揚げて助けてなかったら……考えたくないね」

そんなバカな！連盟の人間に確認した時は……！

「違う！私はそんなこと聞いてない！私は……！」

「あ、これだけは伝えとかなきゃ」

私だって……私だって……。

「欲しかった優勝旗を手に入れられてよかったね、西住流さん？」

とどめのその一言で私の中の何かが切れた。

「お前に何がわかる！」

普段の振る舞いも言葉遣いも忘れ叫ぶ。

「本部に救援を求めた時、異常は確認できないと

救援の必要はないと言われた私の気持ちが変わるか!？」

気付いたら相手の胸倉を掴んで顔を間近に近づけていた。

「わかってる！ ああ！ わかってるさ！ 私が一番、自分の取った行動があり得ないことも、例え負けても救助すべきだったのも！」
溢れ出した言葉は止まらない。

「だが私達が負けたら、彼女達はどうなる！」

腐った連中の思い描く西住流の経歴に泥を塗ったとなると何をされるかわからない。

「お前に、即座に進撃し勝利するかわりになにもなくても

ここに救援車両を寄越せと叫んだ私の気持ちがわかるか!?」
溢れ出す涙も止まらない。

「アンタ……」

「試合が終わってすぐに彼女達の所に行こうとした！

連盟の人間に止められた！ お前が知る必要はないと、西住としての責務を果たせと！」

本家の会合で見たことのある顔だった。

私に何が出来ると……一隊長に過ぎない私に……何が……。

「私は無力だ……こんな西住の名前なんて要らない……」

私は

私はただ私と共に居てくれる人達と、私の戦車道がやりたいだけなんだ。

「ふーん……」

掴まれていた手が離される。

「アンタ、いい隊長じゃない」

「え……」

「部下の為に涙を流せるなんて、今の西住に居ないと思ってたけど」
そう言うのと携帯電話を取り出し通話し始めた。

「もしもし隊長? ごめーん、もうちょっとかかりそう。

相手の隊長めっちゃいい人だった」

この人、いったい何を……。

「上がどうしよもないっばいね、島田んとこのそーちゃんが言ッてた通りだったわ。うん、ちよつと西住に喧嘩売ッてこうかなッて」

け、喧嘩!?

「だいじょーぶだいじょーぶ、二度と戦車道が出来るわけじゃないし、大学戦車道は島田の領分でしょ?それに今の西住ならへーきへーき」
不穏な単語が聞こえてくる。

「さッてと!ごめんね!しいちゃん!」

「し、しいちゃん?」

まるで人が変わったようだった。

「いやあ、思ッてた通りの下種野郎だったら、ぶん殴ッて〇〇^ビしようと思ッてたんだけどさ」

そうでなくてよかったよー、と笑う女生徒。

「ああ、落ちた子達については安心していいよー、うちの学校で運んだし」
下種野郎だったら何するかわからないしごめんね?と謝られる。

「本当か!?怪我は!?全員無事なのか!?

「かなり浸水はしてたけどねー。あつ、パニック起こしてたつてのは嘘だから……嘘？」

「西・住・し・ほ・隊・長・で・あ・れ・ば・必・ず・助・け・て・く・れ・る・っ・て・ず・っ・と・信・じ・て・た・よ」

まあ、その前にうちが助けちゃったんだけどねーと笑う。

「打撲程度だしでうちの学校のテントに居るから後で会いにいったらいいよー」

「でも私は……彼女達を……」

私に会う資格なんて……。

「しいちゃんは実にはかだなあ、そんなのまず謝ることから始めればいいんだよ」
そんな簡単に……。

「会って話さなきゃなにも進まないんだよ。許されるにせよ許されないにせよ」
腹割って話さなきゃ、と言う女生徒。

「わたしはちょっと本部に用事があるから一人で

いってもらうことになるけどごめんねー」

そういつてキョロキョロとします。

「本部に用事って……」

「ん？西住流のクソツタレに一言物申そうかと思って」

「はあ!？」

本気で言ってたのか!?何考えてるんだこの人！

「あなた正気!？」

「お、あそこに居るのってそっちの人？」

指を差した先には彼女達の事を聞いた西住の人間が。

「すみませーん！西住流の人ですかー？」

私が何も言っていないのにもかかわらず、ものすごい勢いで走って行ってしまった。

「何だ、君は」

「聞いてもいいですかー？何で西住流はクッソ弱くなったんですかね？」
ド直球!？」

「2大流派の一角って言うてる割にはゴミカスって聞いたんですよ！」

「お前、いい加減にしないか！」

激昂するのは当然だろう、もう無茶苦茶言つてゐる。

「今日あった決勝以外の編成が出てた以前の試合なんて

もうなんていっていいか……控えめに言って……あ、すみません表現浮かびませんでした」

そ、そろそろ止めないと！

「いやあ、島田流から相手にされてないって本当だったんだなって思いました！」

「貴様……そろそろその口を閉じたほうが懸命だぞ……」

「え？ 図星ついちゃいました？ サーセン W W W W W W W」

「貴様が戦車道出来なくするなんて簡単……」

「あ、今年卒業なんです。来年から大学戦車道連盟が管轄になるんでWWW」

「……お前、よく見たら決勝で負けた学校の生徒だな！　なんだ、ただの負けた腹いせか！」

痛いところを突いてくる……これは滑稽だ、と笑う男。

「まあ、負けちゃいましたねえ。ちよつとしたトラブルがありました」

頬をかく女生徒。

「トラブル！トラブルか！白旗上げて勝手に自滅してトラブルときたか！」
本当にこの男は情けない。

もしこの彼女達が本気でかかっていれば今頃……。

「西住流……いや、西住しほさんとリベンジがしたいですねえ……」

「はん！いくらやったところで同じだろうよ！」

「彼女だったら……とびっきりの奥の手……流星を見せて上げられる……」

あの男も、そして遠くに居た私にもはっきり伝わった。

それは絶対の自信と圧倒的な威圧感。

それは恐怖として他者に伝染する。

「っ！失礼する！」

男は氣圧されたのか足早に立ち去ってしまった。

「流星……」

私は……私の心は躍った。

私ならば奥の手見せるといった。

私を強者だと認めてくれた……。

私は彼女と本気で戦ってみたい……。

ならば……ならば私は……！

「なんだよ、耐性ないなあ。ちょっぴり煽っただけじゃないか」

何故かぶんすこ怒りながら女生徒が戻ってきた。

「そう思わない？しほりん」

その言葉に完全に毒気を抜かれた。

「くくっ……はっははは!!」

それがたまらなく可笑しかった。

「西住流に正面切って喧嘩するなんて……くくくっ」

久しぶりに大笑いした気がする。

「一方的に罵倒浴びせて……くくっ」

あー、スッキリした！

「んあー？何か楽しいことでもあった？」

「そうだな、すごい面白いものが見れた」

「そんなのあったかなあ……。あ！私、照って言います！」

差し出される手。

「改めて……私は西住しほ、彼女達のこと本当にありがとう」

差し出された手をしっかりと握る。

「いえいえ、当たり前のことをしただけですよー」

本当にこの人は……。

「しいちゃんは、これからどうするの？」

これから……か。

「あんなところで戦車道するとかきつくない？私達と一緒にやろうよ。きっと楽しいよ！」

魅力的な誘いだ、きつと照達と戦車道をしていくことは幸せなのだろう。

だが私にはやる事が出来た。

彼女を見て私がやるべきことが見えた。

「いや、私は西住に戻る……私はもう逃げない」

鉄の掟、鋼の心。

「私が西住流を変える、王者としての西住を取り戻す」

「へえ、上に反抗するんだ」

「今の西住に私以上の選手など上も含めていない、なら私が舵を取るべきだろう？」

こんな簡単なことにも気付かなかった自分が馬鹿らしいな」

「言うじゃないちゃん、なんか思うことでもあったんだ」

にやにやと笑う照。

「そうだな……西住流として胸を張れるように」

そして。

「照の流星を正面から叩き潰してやるために」

照に拳を向ける。

そうだ、彼女は私であれば流星を見せるといった。

ならば西住として……王者としてそれを真正面から叩き潰す義務がある。

驚いたような顔をした照だがすぐに不敵な笑みを浮かべた。

「自信ありげだねえ」

出した拳に照も拳をぶつけてくる。

「私の流星はただの西住流如きじゃ止められないよ？」

ただの西住流……ね。

正直今の私が崩せるものではないと思う。

まだ焦るな、一歩一歩だ。

「まずは彼女達に謝って、私の思いを聞いてもらおう」

ここから新しい私の戦車道を始めよう。

「あ、じゃあ案内するよー！」

ニコニコと歩き出す照。

今に見ている流星。

そしていずれ味わってもらう。

西・住・し・ほ・の・西・住・流・を

「ところで、しいちゃんってのは止めてくれませんか?」

「ええ? なんで? 可愛いじゃないちゃんって」

「いや、私は出来れば名前d」

「しいちゃん、はよいくどー」

「……はあ」

文章として成立してればいいなあ……。。

5・大人のお話です!〜後編〜

自由気ままに初投稿です。

「懐かしいね〜……あの後、マジで西住流師範になってびっくりしたよー」

あの出来事から数年後、しほりんは本当に西住流を変えていった。

ちよくちよく連絡は取っていたのだがそのことに関してはほんとにサプライズだった。

「ええ、あなたを真正面から叩き潰すために頑張りましたよ」

「結局、私の流星止められたんだっけ?」

「……もういいでしょう? その話は」

私としいちゃんは結局相對した。

結果はこちらの勝利。

私の流星は止められないのだ！

……まあ、ほんとに僅差だったけど。

どちらが勝利してもおかしくなかった。

勝利の女神がたまたま私に微笑んだだけだ。

西住しほの西住流は恐ろしいほどの強さだった。

「で、とうとう家元だもんね」

「まだ、ですけどね」

「いやいや、あの状況を完全にひっくり返したんだから大したもんだよ」

現に、ここ数年の西住流は驚異的な強さを誇っていた。

島田流が脅威に思うのも無理はないだろう。

どんな状況でも動じず、統制された部隊での圧倒的火力による蹂躪。

いいね……ちょっと戦ってみたかも……。

「やっと老害連中を追いやれたので……、

それに照さんに少しお願いがありました」

「ん？ お願いとな？」

お願い……お願いねえ……。

「あっ！もーちゃんはやらんぞ！しいちゃんでもそれは無理！」

「違います！」

違う？何だろう……。

「まほちゃんとみほちゃんにもまだもーちゃんはやれん！」

「何で発想がそうなんですか！」

「いや、まほちゃんかもーちゃんを見る目って明らかに何かあるんですがそれは」

「……否定できません」

「やっぱり！何があったのかなあ？まほちゃんに」

もーちゃんは素敵だからしょうがないけどネ！

「いや、私も知らない間に守矢君が出ていた試合の配信みてみたいで……」

ほおほお……。

「先日来るって伝えた時は、なんか無言でガッツポーズしてたわ……」

「ラブなのかライクなのか……楽しくなってきたねえ」

「私は楽しくありませんよ……そうじゃなくて！」

あ、やっぱ違う？

「照さんと守矢君でこちらの選手と試合をして頂きたいのです」

「試合？なんでまた、西住流のお膝元なんだから強い選手はいくらでもいるでしょ

？」

「ええ、ですからその子達に教えて欲しいのは技術なんかじゃありません」

技術じゃないの？私に出来ることないんですがそれは。

「男で戦車道なんかやってると思ってる連中を叩き伏せて欲しいのです」

「……あゝ、やっぱ居るんだ？」

戦車道は乙女の嗜みと言われている。

男であれば戦車に乗ってはいけない、と言うことはないが

実際に戦車に乗り競技を行うものは少数だ。

整備班には男性が多いが戦車乗りとなるとそうはいかない。

ここ数年で男性での戦車乗りも理解され始めてはいるが、

男の癖に戦車に乗っている

と言う考えも未だに根深く残っている。

もーちゃんが乗り始めたときもやはりいた。

幼く、私の息子であったた為理解してくれる人もいたが

やはり少なくはなかった。

もーちゃんの場合、日々の練習とその成果を見てくれた人が居て、

それでも言うてくる連中には自らの腕で叩き伏せたこともあったかな？

「ふーん……試合の件は別にいいよ」

しいちゃんのお願いだし。

ちよっと頭にくるし。

「ただ、私達のやり方って西住流を真っ向から否定してるってことはわかるよね？

」

「ええ、構いません。照さんの好きなようにどうぞ」

表向き西住流以外は邪道って言ってるからねえしいちゃん。

「照さんのチームの交通費も全額負担するので、チームごと呼んで貰えると助かり

ます」

「わお！しいちゃん太っ腹！チームも明日は練習日だから召集できると言うよ！」

試合したがってたし交通費出るし喜んで来るでしょ！

「それと……出来れば流星を使用してくれると助かります」

え、奥の手見せるの？

「しいちゃんのお願いとはいえ安売りはしたくないんだけどな」

「見せたところで出来る人間もかわせる人間も居ないと思います？」

個で劣る私達が戦力差を埋めるために編み出したもの。

煙幕を利用し敵を攪乱させ同士討ちを誘発させる至近距離での乱戦と、最高速度で敵に突っ込んでの零距离射撃からなる戦術。

「まあ、一朝一夕じゃあれは出来ないし防げないよ」

しいちゃんにはぎりぎり防がれそうになっただけ。

多分、しいちゃんちいちゃん辺りなら二度目は通用しないかなあ？

しっかし流星もかあ……そうだねえ……。

「私……の……だ……つ……たら……別……に……いい……かなあ……」

「私の？他に誰か使える方が居るのですか？」

「ん？もーちゃんに決まってるじゃん」

「守矢君が?」

「私の愛する息子だよ? 叩き込んでるに決まってるじゃん」

まあ、教えた結果とんでもない方向に進化したんだけど。

「守矢君のが使えない理由があるんですか?」

「いや、使えないわけじゃないんだよ?」

砲撃だけなら私超えてるかもしれないし。

「まさか照さん自身と比べてる訳じゃありませんよね?」

それはいくらなんでも可哀想ですよ?」

いや、そうじゃないんだよねえ……。

「あのね、しいちゃん。厳密には私ともーちゃんの使う流星って違うんだよ」

まあ、しいちゃんだし言ってもいいっか。

「正直に言えばもーちゃんの流星は私のとは次元が違うんだよねえ」

「次元が……違う……?」

「本人は流星^{ステラ}一条^{イチジョウ}って言ってたけど、あんなの狂気の沙汰だと思ったよー」

「それって一体……」

「んー……明日、試合が終わって誰にも見せない、口外しないのであれば見せたい」

まあ、見せたところでやる人間なんて居ないだろうけど念の為、ね。

「あ、まほちゃんみほちゃんくらいならいいよ」

「えっと……私が言うのもおかしいと思いますが……本当にいいんですか？」

みほはともかくまほは間違いないこの西住流を継ぎますよ？」

「へーきへーき！」

「余裕ですね……」

「将来、もーちゃんが王道を真正面からぶち抜いた方が認められそうじゃん？」

「私達、西住流を踏み台にする……と？」

「そこまでは言っていないよー、でも強い相手が居なきゃ評価なんて出来ないじゃん？」

相手が、弱すぎてももーちゃんのためにならないしねえ。

「あ、試合に関してはちゃんと私ももーちゃんも出るし流星も使ってあげる！」

わたしはしいちゃんにVサイン。

「ただ、それが原因で相手が戦車道止めても責任は取らないよ？」

「構いません、そうなってしまったのならそれまでだっただけの事」

「しいちゃん本気だねえ……」

しょうがない、親友の為に一肌脱ぎますか！

それにくだらないう言う子達にはお灸をすえなきやダメだからねえ。

多少文章がおかしくてもノリと勢いで見てくれると助かります！

ドゥーチエ！ドゥーチエ！ドゥーチエ！ドゥーチエ！

6・少女達のお話です!

このお話では一番初めに書いたとおり、

リトルアーミー等はなかったことになっておりますゆえ。

ご理解ご協力を~~ぎやうぎやう~~ください

!

この話と辻褄を合わせるため「2・二人の戦車乙女です!」

の内容を一部変更しております。

変えたのはまほちゃんの部分のみになりますが。

言い回しや口調を変えてるだけで大筋は変わってないので

見なくても大丈夫かと思えます。

申し訳ナス!

あ、久しぶりにラウンド中ドゥーチェが出て保留内連してたので初投稿です。

「ふんふんふーん、ふーんふんふーん♪」

私の動かすⅡ号戦車の天井上から鼻歌が聞こえてくる。

今日、うちに来た荒谷守矢君だ。

流星、荒谷照の一人息子にして砲撃の天才。

妹のみほと同じ年と聞いて映像を見た時は驚いた。

同年代でこれほどの実力を持つ選手が居るのかと。

大人に混じって遜色なく戦う彼は私の心を震えさせた。

それと同時に一つの疑問を抱かせた。

彼はどうやって他者に認められたのだろう。

彼は男だ。

戦車道は乙女の武芸。

例え、母親がその道の一流だったとしても彼自身が、

認められるには色々な事があったはずだ。

誰かに蔑まれたことだっただけであるはずだ。

でも、彼は今も戦車に乗っている。

私は彼の試合の映像を片っ端から集めた。

試合が始まる前も、試合の最中も、試合が終わった後も。

そして勝敗に関係なく彼は笑っていた。

なんでこんなに楽しそうに笑えるんだろう。

彼の笑顔はそんな疑問と憧れとほんの少しの憧れではない何かを生んだ。

お母様から守矢君が来ると聞かされたとき思わず喜んでしまった。

彼には聞きたい事がたくさんあった。

けど、彼を前にして頭が真っ白になってしまった。

私が緊張……？なぜ？こんな事今までなかったのに。

上手く考えがまとまらなくて、上手く喋れなくて。

恥ずかしくて顔が熱くなって……。

「お・ね・え・ちゃ〜ん」

「ん？どうした？・みほ」

先ほどまで装填手席に座っていたみほの気配。

「さっきはどうしたのかな〜って」

振り向いて見なくてもわかる、声が笑ってる。

「さっきとはなんのことだろう？」

「守矢君とのことだよー」

「ああ、そのことか……我ながら初対面で緊張するとは情けない」

みほが守矢君に耳打ちしてた時なんであそこまで怒ったのかもわからない。

「まさかあのお姉ちゃんがあんな感じになるなんてびっくりだよ」

「……私自身も驚いた。なんであんなことしたんだろう」

「最近、熱心に何か見てると思ったらそういうことだったんだね」

何故かみほは納得したかのような言い方だ。

「みほはどうしてこうなってるのかわかるのか？」

ため息をつくみほ、何故だ。

「んーとね……お姉ちゃん、守矢君ってそんなにすごいのか？」

「すごいなんてもんじゃない、私が見てきた中でも射撃の精度に関しては群を抜いている。」

停止射撃はもちろん、行進間射撃においてもほぼ必中と言っていいほどの命中率だ。

そのクラスなら上位の選手であれば出来る選手も居るが、戦車が傾いていようが、ドリフト中であろうがほぼ命中率が変わらないのは彼だけだろう。

それに、あらゆる条件変化に対しての対応力がすばらしい。

天候や地形はもちろん、相手の回避行動を見据えての砲撃。

あれはすごいぞみほ、相手に吸い込まれるように当たるんだ。

訳のわからないうちに撃破されたと思う人間も大勢いると思う。

後はそうだな、守矢君はいつも楽しそうに戦車に乗っている。

車長としてはああいう人間が居てフォローしてくれると

取り乱した時もすぐに冷静になれると思う、あれも才能だろう。

私もあれくらいコミュニケーション能力が部隊運用も違うんだろうが、

私はこんな性分だからな、無いものをねだってもしょうがないg……」

「お姉ちゃん」

「ん？」

振り返りみほの顔を見る。

すごくいい表情のみほがそこにはいた。

「どうした？そんな顔して」

「いつも人の前じゃ仏頂面してるあのお姉ちゃんが……」

「仏頂面とは失礼だな」

私だって嬉しい事があったら笑うし、悲しければ泣くぞ。

「みんなちょっと心配してるくらいなんだよ?」

でもよかったよ、と続けるみほ。

「お姉ちゃんも女の子なんだなーって」

「どういう意味だ?」

「好きな子の居る友達みたいなんだもん」

「……は?」

みほは何を言ってるんだ?

「何がどうなったらその結論に至るんだ?」

「何がどうって……どっからどうみてもそうなんだけど……」

「そうなのか?」

「そうだよ! きっとお姉ちゃんは守矢君のことが好きなんだよ!」

「そうか、これが好意というものなのか」

ふむ、嫉妬とも憧れとも違うこの気持ちがそうなのか。

「お、お姉ちゃん……」

苦笑いをするみほ。

同年代の子は何故か私を避けているみたいだからな。
みほが教えてくれて助かった。

「ん？なんか呼んだ？」

キューポラから頭だけを出して守矢君が覗き込んでくる。

「あ、えっと……もうすぐ駄菓子屋があるから
そこでお菓子買おうかなーって！」

先ほどの会話の内容と全然違うじゃないか。

「いやな、みほが私が君の事をむぐっ……」

みほが両手で私の口をふさぐ。

「も、守矢君はどうする!？」

「お、駄菓子！いいねいいね！買いに行こう！」

「じゃあ、もうちょっと待っててね！」

「いえすまむ！」

そう言って守矢君は顔を引っ込めた。

「何をするみほ、いきなり口をふさぐなんて」

「お姉ちゃんはおちよつとは場所とかムードとか考えようよ!」

「そんなものなのか?」

「そんなものです!」

「ふむ……恋なんてしたことがないからな」

今まで戦車道一筋だったからな。

「とりあえず、この二日間でちよつとずつ仲良くなって

連絡先を交換するくらいが目標じゃないかな?」

「回りにくいな」

あなた好きなので連絡先教えてください、で済むだろう

「それが普通なの!じゃあ、お姉ちゃんは見ず知らずの男の人にいきなり

好きです!連絡先教えてください!って言われて連絡先渡す?」

「渡すわけがないだろう?」

「だよね？それと一緒に！」

「でもそれは見ず知らずだからだろう？私もこう言っては何だが西住家の長女として

顔は知られてるし、守矢君も流星の一人息子として知られている」

「違う、お姉ちゃんそういうことじゃない」

「???」

「何でそこで首を傾げるかなあ!？」

みほはすごい。

私の知らない事を何でも知ってる。

「はあ……こんなので大丈夫かなあ」

「みほ、駄菓子屋だ。降りるぞ」

「はあ……」

また溜息をつかれた、何故だ。

やっぱりまほちゃんはくーるでほんこつが一番!

7・戦車とフリフリです！

Enter Enter MISSION！余裕をもって外して諭吉が飛んでいったので初投稿です。

「よし！釣るよー！」

目的地である川に到着し戦車に固定してあった釣竿を持ち出すみほちゃん。

「これが守矢君の分だ」

まほちゃんから釣竿を受け取る。

「あれ？まほちゃんのは？」

「ああ、私はみほと一緒に使うから大丈夫だ」

うーん、嫌われてる感じは……ないっぽい？

餌をつけて釣糸を垂らす。

うん、この何とも言えない独特の時間は嫌いじゃない。

天気もいいし絶好の釣り日和ですなあ……。

その後も、何度か釣糸を垂らしてみたのだが、

「釣れないねー」

「釣れないな」

「釣れませんなあ」

いやあ、ピクリとも動かねえ。

付ける餌間違えたかなあ？

俺は、ぼーっとしてる時間も好きなんだけどね。

「駄菓子でも食いながらちよこっと休憩するかなあ」

時間はまだあるし、気分転換でも……。

「あなた達！」

声の方向に目を向けるとウサギのぬいぐるみを抱いて、えらくフリフリな服を着た女の子が居た。

「えーと、どちら様でしょう?」

「子供だけで戦車に乗ったらダメなんだから!」

ぷんすこぷんすこ怒る女の子。

「どうした(の)?」

まほちゃんとみほちゃんもこちらにやってきた。

「子供だけで戦車に乗るのは危ないって、先生言ってたんだから!」

「あー、そうね。俺だけならまずいよな」

でも、西住姉妹 with 俺だからなあ。

二人なら下手な人間より安全じゃないか?

「私が居るから問題ない」

「私が居るからって……どこかで見た事ある顔ね」

「私は西住まほ、西住しほの娘と言えぱわかりやすいか」

「妹の西住みほだよ」

「に、西住流!? ファンです! サインください!」

この子の手首グルグル過ぎるわ。

「わ、私！逸見エリカって言います！11歳です！」

「あ、俺は荒谷もr」

「聞いてないから」

ものすごい冷めた目で見られた。

会話できなきやコミュニケーションの取り様がないじゃないか！

「と、とりあえず上がってきなよ」

手を差し出す、あの服にぬいぐるみを抱いては上りづらいだろうし。

「男の手は借りないから！」

「お、おう」

悪戦苦闘しながらも上ってくる女の子。

おーおー、うさちゃん汚さないように必死だな。

「わ、私も戦車道やって！この間の試合見ました！」

ほお、まほちゃん達もう実践に出てるのか。

当然と言えば当然か。

「あの試合は反省すべき点が多かったな」

「そうだね、もっと柔軟に行くべきだったかもね」

「エリカはどう思う?」

「私ですか!?! 私は……」

3人であーだこーだと話にあった試合の感想戦について話し始めた。
うーん、この蚊帳の外感。

車長じゃないからなあ、俺。

俺に出来ることって言えば狙い撃つくらいだし。

戦術戦法に関してはさっぱりだ。

「そういえば守矢君も戦車道やってるんだよ!」

「はあ? こいつが?」

みほちゃんの言葉に棘のある返答。

「あなた、男の癖に戦車道やってんの?」

——ダメだ、絶対に表情には出すな。

「母さんがやって面白そうだったからさ」

「あなた変わってるわね、男が戦車乗るなんて」

「よく言われるよ」

「エリカ、守矢君は……」

「まほちゃん、大丈夫」

一言でまほちゃんを制す。

そう思ってるのであればそれで構わない。

無駄な諍いは不要だ。

「まあ、あなたが戦車に乗っていいようにまいが私には……あれ？あんたの竿引いてない？」

エリカちゃんがみほちゃんの竿を指差す。

何かがかかったのか竿がかなりしなっている。

「引いてる！お姉ちゃん引いてるよ！」

一生懸命竿を引っ張るみほちゃん。

「みほ！大丈夫か！」

「ちょ、ちょっと！大丈夫なの!？」

一緒に引っ張るまほちゃんに、後ろで若干心配そうなエリカちゃん。

この構図……まずくね？

「ん~~~~！」

おいおい、そんな力いっぱい引っ張って針外されたら……。

「うわっ！」

みほちゃんが後ろに倒れこんだ

「むっ」

「きゃっ！」

二人を巻き込んだどんがらがっしやーんだな。

それと同時に先ほどエリカちゃんが抱いていたウサギが宙に舞う。

「あっ、私の！」

下はぬかるんで泥になってんなあ。

今、俺が飛び込めばウサちゃんはギリギリ無事だなあ。

なら女の子が泣くよりも、俺が泥だらけになるほうがマシか。

「残念そこは小坂ゾーンだ」

躊躇なく戦車からダイビング。

ウサちゃんをキャッチして泥がつかないように胸に抱く。

くるっと体を反転させて背中から落ちるように。

「いってえ！」

落ちた先が泥だったので多少のクッションにはなったがそれでも痛いものは痛い。

「ちょっと！大丈夫なの!？」

「任せろ、うさちゃんは無事だ」

汚さないように立ち上がりエリカちゃんにぬいぐるみを渡す。

「小坂は鉄壁、仕事に仕損じはない」

「いや、そうじゃなくて……」

「守矢君、ドロドロだよ」

「これは一旦帰って着替えたほうがいいな」

せやな、ドロッドロですわ。

しかしそれより気になる事がある。

「あれだけ引いてたんだ、さぞ大きいのが釣れたんじゃないか？」

「う、うーん……」

なんか煮え切らないなあ。

「これ……」

差し出したのはびしょびしょになった本。

「マンガか何かだろうか？」

指でつまみくっ付いたページをはがすようにめくるまほちゃん。

「なんだこれは？男女が抱き合ってる？みたいだg」

「はいストリップ!!これはポイしまししょう!!!」

エロ本じゃねーか!!!

誰だよ!こんなところに捨てたやつ!

「守矢君はこれが何かわかるのか？」

「逆にまほちゃんはわかんないんですかねえ!？」

見ろよ、まほちゃんとエリカちゃんをよお!!

顔真っ赤じゃねえか!!!

「そこまで言われる理由がわからないが守矢君が言うのであれば」
「ごそごそと、駄菓子のごみを入れている袋の中に本を入れる。」

「すまんな、エリカちゃん。俺らは帰るわ」

「今度はうちに遊びに来てよ!守矢君はいないけど、

私とおねえちゃんは大歓迎だよ!」

「いくぞみほ、このままじゃ守矢君が風邪をひきかねん」

「はい！」

Ⅱ号戦車に乗り込む西住姉妹。

さて、俺も……。

「ま、まって！」

突然エリカちゃんに止められた。

「えっと……その……」

「ん？まだなんかあるか？」

考えられるとすれば……。

「あ、もしかしてぬいぐるみに泥はねてたか？」

やっべえ、あんなこと言ったら汚れてるとか洒落になんねえ。

だがエリカちゃんは首を横に振った。

「……さっきは悪かったわね、あんなこと言って」

あんなこと……？

「ああ、別に気にしてないしなれてっから大丈夫！」

エリカちゃんに笑ってみせる。

「でも……」

「ほらほら落ち込まない、可愛い顔が台無しですよ？スマイルスマイル！」

「な、なによ！人がせっかく謝ってあげたのに！」

ふんっ、と鼻を鳴らして顔を逸らしてしまった。

「……私が、立派な戦車乗りになったらギタギタにしてやるんだから」

「お、宣戦布告とはたまげたなあ……エリカちゃんの一歩の壁として立ちほだかつてやるよ」

それを受けてにやりと笑ってⅡ号に飛び乗る。

「じゃあ、またなー！」

「またね、エリカちゃん！」

みほちゃんと一緒に大きく手を振る。

「……」

すっごい小さくだけど手を振ってくれた！

「もーちゃん、一体どうしたの!？」

まほちゃんの家に帰り着いてから母さんに開口一発言われた。

「Ⅱ号から足滑らせてどんがらがっしゃーん」

「大丈夫!?!怪我はない!？」

「濡れて肌寒いくらい?」

「しいちゃーん!お風呂貸してー!!!!!!」

奥に向かって叫ぶ母さん、人の家だぞ……やめてくれよ……。

「何事ですか一体……………泥だらけですね…………」

キッ、とまほちゃんとみほちゃんを睨むしほさん。

これはいかな、勘違いしてる。

「あー、しほさん。これは俺が勝手にこけちゃったんですよ。二人は関係ないです」

「……そうでしたか」

うーん、この不器用さ。

俺らは客だし、家の名前もある手前こういう対応になるんだろうけど……。西住流師範ってのが表に出すぎだな。

もうちょっとフランクでもいいのよ？

別に俺らの家ってそんなことでなんか言ったりしないし？

「菊代さん、守矢君にお風呂の案内を」

「かしこまりました、守矢様こちらへ」

「じゃあお風呂お借りしますね」

「なんでまほちゃんがついてくるのかな？」

「私も入るからだか？」

「いや、当然だろう？ みたいな顔してるのさ！」

「駄目か？」

「あのね、まほちゃんみたいな可愛い子がそんなことしちゃいけません」

「可愛い？私が？冗談だろう？」

「いや、普通に美少女でしょうに」

「ふむ……」

まほちゃんは何か考え込んでしまった。

「守矢君、今のうちに行ってきたら？」

みほちゃんの言う通りだな。

うん、付いてこられても困るしそうしよう！

構成は思いつくけど文章に出来る力がないってほんとに歯痒い。

これ子供時代で一体何話使わないといけないんだ……？

一気に飛んだほうがええんかなあ……？

8・好きなものと難しいお話です！

セガサターン版のお嬢様特急のデータが吹っ飛んだので初投稿です。

「……いや、家じゃこれ着てるけどさ」

お風呂から上がって脱衣所においてあったのは

いつも愛用してる着ぐるみパジャマ。

「人の家に持っていくならもうちょっとなんかあったろ……」

夏は涼しく冬は暖かいとかいう不思議パジャマなんだよねえ。

「うむ……やはりボコはいいな……」

俺はボコがお気に入りで。

あのやられてもやられても立ち上がるあの姿。

いつかやってくれると信じてテレビの前でいつも応援してしまふ。

疲れた大人への希望の道標だな。

俺、今は大人じゃねえけど。

そしてボコ自体そこまで人気じゃねえけど。

「とりあえず、居間に行けば誰か居るかな？」

……居間ってどこよ？

菊代さんに案内されるままお風呂に來たのはいいものの
帰り道がわからん、広すぎるだろ西住家。

「……やる……って……ボコに……」

微かに聞こえるマイフェイバリットソング。

「これは……おいらボコだぜ！」

聞こえているのはこの先の一室。

俺以外にもボコメイトがいるとは……是非お近づきになりたい！
なんとなく誰が見てるかは想像つくけど。

「すみませーん」

ドアをノックする。

いきなりドアを開けるのはマナー違反だっではっきりわかんかね。

「えっと、守矢君? どうしたん……」

やはり部屋にいたのはみほちゃんだったか。

ただ、何故俺の姿を見て固まってしまった。

あ、俺今ボコだわ。

「ボコだあああああ!!!!」

部屋に引っ張り込まれて抱きしめられ頬ずりされる。

「わああ、すごいよおお、リアルボコだよおお!!」

「あ、ちよ、やめて、く、苦しい」

「わわ、ごめん!」

解放されるボコ、ちょっと惜しいと思った俺は悪くねえ。

「も、守矢君もボコが好きなの？」

「毎週録画して戦車道の練習がない日は寝るまでエンドレスで見れるくらいには」

「じゃ、じゃあ第96話でボコがやられた必殺技は？」

「特別出演の黒のカリスマベアーがボコに強烈なビンタ、

受けて倒れたボコに対して散々スタンピングした後立ち上がろうとした

ボコの片膝を踏み台にしてのシャイニングベアーキック」

あれを受けて立ち上がるボコはやっぱすげえよ……。

「す、すごいよ！今まで誰も答えられなかったんだよ！」

「あの芸術とも言える様な完璧なボコの飛び方に何度も繰り返し再生したものだ……」

「私は第45話の特殊エンディングが好き！」

「わかり、み、ラスト殴りかかった瞬間の止めて、引くあの構図。

最初勝ったのか!?!と思わせておいてからの曲終わってのやっぱり負けたあの実

家の様な安心感」

ああへへたまらねえぜへへ。

その後、めちゃくちやみほちゃんとボコ談義した。

「いやあ、まさかみほちゃんがボコファンだったとは」

「私もびっくりしたよ！」

かなりマイノリティだからなあ、ボコのファンって。

「私ね、ボコの絶対に諦めないところが好きなの」

「わかるわかる、俺も何度も勇気付けられたわ」

何度やられようと諦めないあの心は見習うべき姿勢だ。

「守矢君も落ち込む事ってあるの？」

「もちろんあるよ、なんなら戦車道やってる分、人より多いと思うよ」

しがらみがすごいもんなあ……。

「私も、戦車道のことが多いかなあ」

ふむ……名家故の悩みか。

「私、お姉ちゃんと違ってすごくないから失敗が多いんだよね」

ボスッ、とボコのぬいぐるみにパンチ。

「狙われてる車両助けようと援護射撃命じたら怒られるし、
なんでだろ？ 助けたいってそんなに悪いことかなあ？」

連打連打、ボコにパンチの嵐。

「あー、そこら辺は難しいかもなあ」

だって西住流ですし？ 助ける暇があったら1両でも多く破壊しろって感じですか？

「こればかりはなー、流派の色が関係してくるからなあ」

「だったら、今の戦車道は嫌いかも！」

「ぶっちゃけるねえ」

「だって、みんな協力して戦って勝ったほうが楽しくない？」

「今のしほさんに聞かせたら卒倒しそうだな」

ボコに対する連打の手が止まる。

「あ！今のなし！お母さんには黙ってて！」

「もちろん、こんな言えるわけねーよ」

「お姉ちゃんは何となくお母さんと同じような戦い方かなあ？」

「西住本家の長女として頑張ってるのかもね」

「私とお姉ちゃん、どっちの方が合ってるのかなあ？」

「んー……まあ、西住流としてであればまほちゃんかなあ？」

強い西住流としての戦い方な訳だし。

「えー、守矢君お姉ちゃんの味方するのー？」

味方って……。

「でもさ、正しいとか正しくないとかでやるもんかな？」

それで言う俺は排斥されるわけで。

「ボコと一緒にだよ、自分の信念を貫き通す事が大事だと思う」

「お母さんやお姉ちゃんと喧嘩しても？」

「どこかで話し合う事は大事だと思う、思っても伝わらないからな」

「そっかー……、難しいね」

ぽーんとボコを放り投げる。

「まあ、それで喧嘩して家出しようもんなら面倒くらい見てやるよ、

んで、一緒にしほさんまほちゃんと話し合いだ」

この人達に限ってはそれはないと思うけど。

いや、しほさんが不器用発揮したら或いは……？

言っというてなんだがそれだけはやめてくれよ……？

「とりあえず、俺はそのままのみほちゃんでもいいと思う。

この先、まほちゃんやしほさんのような戦い方になるのか、

今のみほちゃんのような戦い方を突き詰めるかはわかんないけど」

大丈夫、とみほちゃんの頭に手を置いてくしゃくしゃと撫でてやる。

「お前は、間違っちゃいない」

それがみほちゃんの戦車道であれば俺はそれを支持しよう。

もちろん、しほさんやまほちゃんを否定するわけではないがね。

「……」

ぽーっとしているみほちゃん。

「ん？どうした？」

「なんか守矢君、お父さんみたい」

「まだそんな歳じゃないぞ、俺は」

小学生ですし。

精神年齢はおっさんですけど。

「お嬢様、いらっしゃいますか？」

コンコン、とノックの音と同時に菊代さんの声が。

「はーい、どうしたのー？」

ドアを開けて現れる菊代さん。

「晩御飯の準備が出来ました……あら、守矢様もこちらにいらしたのですか」

「すみません、みほちゃんと一緒にボコ見てました」

「それはそれは、仲がよろしいのは言い事でございますね」

「守矢君もすごいボコメイトなんだから！」

「あらあら、これはまほお嬢様も油断できなくなりましたかね？」

……どういう意味だ？

「さあさあ、皆様お待ちですので」

「はーい！」

まあ、いいや。

とりあえずご飯だご飯ー！

頑張って書くよー！

9・夜ご飯と夜会話です!

来年の6、15が楽しみすぎるので初投稿です

「あ、もーちゃん。明日戦車道の試合するからね」

「は?なんで?」

今現在、父親を除き西住家と荒谷家で食卓を囲っている。

「すみません、私が頼んだんですよ」

「しほさんが?なんでまた……そもそも俺が出ていい類なんですか?」

「むしろ積極的に動いてもらって構いません。理由は……大人の事情というやつです」

……あっ(察し)

これは穿り返さないほうがいいと見た。

「詳しい事は聞きませんが、とりあえず勝てばいいんですね?」

俺に話が回ってくるって事はそういうことだろう。

凹ませろって事だろ、多分。

「照さんと違って守矢君は察しがよくて助かります」

「つーことは、父さんはメンテ？」

「そういうこと、なんか二人して張り切っちゃって」

わかるなあ、多分二人して張り合ってたんだろうなあ。

「もーちゃん、明日は流星使うからねえ」

「マジ？」

「守矢君、流星と照さんの通り名ではないのか？」

あー、ここら辺相對した人間とか当時母さん相手取った人しか知らないのか。

「流星って母さんが昔から使ってる作戦で、それがそのまま通り名になったんだよ」

「なんかカッコいい名前だね！」

「みほちゃんにはわかってるね！照さんからお肉を進呈しよう！」

「母さん、本気で使うの？俺が言うのもなんだけどここであれば不味くない？」

「しいちゃんのリクエストだから大丈夫！」

おいおいマジか、あれを西住本家で使うのか。

「ほんとにいいんですか?」

「無論です」

「ただし、流星しか駄目だよ!」

「流星^{スデ}一条は?」

「絶対にNO!」

まあ、当然か。

「そっちは試合が終わった後にしいちゃん達に見せてあげて」

「はあ!?奥の手明かせて言うのか!?!」

「一度、他の人に見てもらって意見を聞くべきだよあれは」

「ぐぬぬ……まだ公式戦で一度も使った事がないというのに……」

「使う前に一度見てもらったほうがいいって」

しかし、あれは初見だからより効果があるもんなんだけど……。

「見せるのはしいちゃんとまほちゃんみほちゃんだけだから」

「それなら……まあ……当然口外させないでしょ?」

「あれは出来ないと思うなあ……特にしいちゃんとかじゃご法度に近い気がするし」
あー……それは納得できるな。

「まほ、みほにもそれは徹底させます」

「何が何だかわからないが守矢君の不利になるようなことは言わないぞ」

「ボコメイトは裏切らない！」

いやまあ、信じてないわけじゃないんだけどね。

「まあ、俺がみほちゃんやまほちゃんとやりあう事なんて多分ないからいいけどさ」
口にがめ煮を放り込む。

しかし美味しいなあ、西住家の晩御飯。

「これ誰が作ってるんですか？」

「家事の一切は菊代さんに任せてあります」

マジか、やるな菊代さん。

「後でこのがめ煮のコツとか教えてくれませんか？」

家で自分で作れるようになりたいっす」

「守矢君、料理できるんですか？」

これにはしほさんもびっくり。

「うちの晩御飯作ってるのほぼもーちゃんだよ、

私より料理上手いんだもん、ちょっと落ち込むよねえ？」

前世含む自炊暦はかなり長かったからなあ……。

バイトなんかも飲食が多かったし好きだったからな、料理。

飯くらい美味しくて自分の好きなもの食わせろ！って思ってたし。

「では、後でキッチンに来てくださいますか？」

「教えてくれるんすか！なら皿洗いとかは任せてくださいよ！」

いやあーテンション上がるなあ。これでまたうちの晩御飯が

美味しくなっちゃうぞ。

「なあ、守矢君は料理が出来る子の方がいいのか？」

じつとこちらを見るまほちゃん。

「そりゃ、出来ないより出来るに越した事はないと思うけど……

苦手な人もいるしそれは人それぞれかなあ？

得意なら一緒に作ったら楽しいだろうし、苦手なら教えてもいいし」

懂れたなあ、女の子と二人でキッチンに立って一緒に料理作ること……。

「料理かあ……」

なんだ西住姉妹、二人揃って微妙な表情で。

「二人とも全然料理しないの？」

「うむ、菊代さんにまかせつきりだな……」

「ボ、ボコねるねるねなら……」

「それ駄菓子じゃねえか！」

「おやおや、二人ともしいちゃんと一緒だ！」

「ちよ、照さん!？」

「しいちゃんも全然だもんねえ、私は未だにあの黒い塊が

オムライスだとは認めてないからね？」

しほさんメシマズなのか……ま、まあ作る機会ないだろうし多少はね？（震え声）

「うちのもーちゃんは優良物件だよお？家事全般出来るし戦車道にも理解あるよお？。」

ドヤ顔すんなよ恥ずかしい。

「もーちゃんもいずれお嫁を貰うと思うと……」

ガタガタッ!

「な、何二人して立ち上がって?」

「な、なんでもないよ!ね!お姉ちゃん!」

「うむ、ちよつとな」

びっくりするなあ……。

「なにになに?二人とも、もーちゃんが欲しいの?」

は?何言ってるんだこの人。

「残念!あげません!私のでーす!」

「何が私のでーすだ」

俺は母さんの子供だが母さんのものになった覚えはねえよ。

「ご馳走様でした。菊代さん、キッチンに案内してもらってもいいですか?」

この味の秘訣を学ばなければ!

——数十分後。

「ふむ、出汁を取るための比率が俺と全然違ったな……」

色々試したいけど流石に家じゃ出来ないからなあ……。

いずれ一人暮らしを始めた時には色々とやってみたいものだ。

「つと、俺が寝る部屋はここか……明日試合だしなあ、早めに寝ないとつらいかな」障子を開けるとすでに布団が敷かれていた。

もぞもぞとその布団の中にもぐりこむ。

「ふかふかだ……これならすぐに眠れそう……だ……」

俺はあっさりと意識を手放した。

数時間後。

「ぐぬぬ……寝れん……」

明日が楽しみすぎて数時間おきに眼を覚ますとか小学生か俺は。

あ、小学生だったわ（納得）

こういう時は一旦布団からでるに限る。

夜風にでも当たろうか。

障子を開けて縁側に腰掛ける。

「車の音はしねえしなにより星がすげえな」

演習場の関係で都会からちよつと離れてる西住本家。

聞こえるのは虫と風の音くらいか。

静かすぎてちよつと落ち着かないんだよな。

「明日は久しぶりに知らない人と戦えるなあ」

基本、俺はチーム内の紅白戦くらいでしか戦えない。

公式戦での男性の参加を認めていないところがまだ多いからな。

「こんな夜中にどうした？」

不意に背後から声がした。

「……まほちゃんこそ」

月明かりに照らされて見えたのはまほちゃんだった。

「なに、ちょっと寝付けなくてな」

「俺もなんだよ、明日が楽しみでテンション上がっちゃってさ」

「そうか……隣、座っても？」

「もちろん」

まほちゃんが俺の横に座る。

「守矢君には聞きたい事があったんだ」

「聞きたい事？ 答えられる事だったらいんだけど」

戦術とか言われても俺はちんぷんかんぷんだぞ。

「君はどうして戦車道を続けられるんだ？」

「えっと……どうして、とは？」

「今日、エリカに戦車道のことを言われた時、顔色が変わったろう？」

気付かれてたか……。

「元々女性が主体だし、色々言われるくらいなら

無理して続ける必要はないだろう?」

「無理なんかしてないんだけどね」

「それに、他者から認められたから今こうやって戦車道をやっているのだろうか?」

なんか難しい話になってきてるな……。

「よかったらでいい、教えてくれないか?」

単純な事なんだけどな。

「認められると認められないとかは別として俺は戦車道が楽しいから続けてるんだよ」

「楽しいから?」

本当にシンプルな理由だ。

「そう、楽しいから」

「でも、その事が原因で色々心無い事を言われるのは辛いだろう？」

「男だってちゃんと戦車道はしていいって認められてるんだから悪いことしてるわけでもないし、

誰かに何か言われて辞めるなんてごめんだからね」

俺が戦車道を辞めるのは俺自身が戦車道を辞めたいと思ったときだけだ。

「そもそも、俺は他人から認められるように試合はした事ないよ？」

母さんがどう考えてどう試合をさせているかは知らないがね。

「認められたって結果は後からついてきただけなんだ、俺は好きなように楽しく戦車道をやっているだけだよ」

だから勝っても負けても楽しいんだ。

世間がどう思っようが知ったこっちゃない。

嫌なら、俺を負かして戦車道辞めさせてみる。

辞めてあげないけどな！！！！

「……守矢君は強いんだな」

「俺が?俺なんて母さんがいなかったら何も出来なかったよ。

戦車道が出来たのはただ単純に運がよかっただけなんだから」

「でも、辞めないのだろう?」

「こんなに楽しい事ないし、意地があるんだよ」

男の子には、ね。

しばらく虫の音と風の音だけが響いていた。

「……私は」

「ん?」

「私は、どうしたらいいんだろうか」

「どうしたら、とは?」

おろ、まほちゃんはまほちゃんで悩みがあるらしい。

「いや、人に話すような事でもないから気にする事は……」

「話してみたら意外とスッキリするかもよ?」

溜め込むだけだといつか限界来ちゃうし」

「そう……なのか……？」

「特に、まほちゃんは立ち位置が立ち位置だからね。

しほさんにも、ましてや妹のみほちゃんにも相談できない事はあるでしょ」

「ない……といえば嘘になるか」

「言うだけ言ってみたら？」

俺が言えることなんてないだろうけど一緒には考えられるよ？」

愚痴言ってスッキリする事もあるしな。

「そうだな……聞いてくれるか？」

まほちゃんはぽつぽつと語りだした。

「私は、西住流で戦っている。

それは西住に生まれた女としてではなく、西住流の戦いを見てそれに憧れ、

一人の戦車道の選手として西住流として戦えるのが誇りに思い、

いずれお母様のような西住流を扱えるようになるのが目標だからだ」

強要されたわけでも、西住に生まれたから仕方なくという訳でもない。

「ふむふむ、それがまほちゃんの戦車道だね」

だったら、みほちゃんとは……。

「だが、みほはそれを必ずしも正しい事だとは思っていない節がある」

まほちゃん、みほちゃんの事ちゃんと見てるんだなあ……。

「まほちゃんはどうしたいの？」

それを聞かないとどう答えていいかわからん。

「私は、みほには自由にやって欲しいと思う。」

あの子は私にはない閃きと柔軟性がある」

「でも、しほさんは認めないんじゃないかなあ？」

西住流の次期家元の娘が西住流以外を使うなんて」

「そうだな、きつとお母様はいい顔はしないだろう。」

でもそもそも、なぜみほはそう思ってるのだろう」

この人は本当に妹の事が心配なんだな。

まあ、ちょっとずつ解きほぐせばわかってくるかな？

「まほちゃんはもちろん西住流の戦い方を実践してるんだよね？」

「そうだな、指揮を執りやすいのものもあるが、私の目標だからな」

「西住流ってどんなに犠牲を払ってても勝利することだよね？」

「勝利の為に仕方のないことだろう」

「じゃあ、みほちゃんはどんな子かな？」

「みほか？みほは優しいな……。西住流を扱う者としては、

優しすぎるくらいあるな。追い込まれた車両を助けたり撤退の援護をしたり」

「隊長がみほちゃんの時とまほちゃん時、それぞれの戦い方を思い浮かべて比べてみて」

「む……みほと私か……」

何かに気付いたようなまほちゃん。

「……そうか、みほは結果もだが過程も大事なのか」

晩御飯前にみほちゃんと話した感じでは俺もそう思った。

「まほちゃんは何でそう思ったの？」

「さきほど、守矢君に比べてみるよう言われた時に、

以前、私とみほに別れて試合をした時を思い浮かべたんだが、

みほは西住流とはまったく違う戦い方をしてることに気がついたんだ。

お母様は苦い顔をしてたみたいだが」

相對したまほちゃんがそう感じたならばそうなのだろう。

特にしほさんの西住流を色濃く受け継いでるだろうからな。

しかし、しほさんが表情に出すくらいなんだ。

みほちゃんの指揮は西住流とはかけ離れてるんだろうな。

どっちかっていうなら、うちの母さんに近いのかな？

「俺はね、誰もが自分だけの戦車道を持つてると思ってたんだ」

「自分だけの戦車道？」

「流派とかじゃなくて、譲れないものって感じかな？」

みほちゃんにも話したんだけどね。

「俺は流派とか風潮なんかよりこっちの方が大事だと思う」

だから俺は戦う、戦える。

俺は俺の戦車道のために戦い続ける。

「私であれば、私が憧れたお母様のような西住流で勝ち

西住流の強さを証明する、と言う事だな」

完全に西住流の後継者やねえ。

「もし、みほちゃんの譲れない部分と相反するなら、

いつかしほさんやまほちゃんと対峙する時も来るかもしれないね」

折れないからこそ譲らない、譲れない。

「みほと……」

「でもそれはきつと悪い事じゃないと思うんだ」

「それは何故だ？」

「だって、その点で対峙するってことは相手に知ってもらいたい、

相手の事を知りたいからでしょ？」

どうでもいいならそもそも相手なんかしないさ。

「何も言わない、何も聞かないのが一番駄目だと思う。

どんな事でも相手に伝える事が大事だよ」

「相手に伝える事……」

「すれ違いつて怖いからね、勝手に物事進んでいっちゃうから」

気付いた時には手遅れとか洒落にならない。

「そうか……勉強になったよ」

「それは何よりだよ、役に立つかはわからないけど」

「まさか、私がこんなことを人に話すとはな」

悩んでばかりじゃ先に進まない時もあるしな。

これが今後まほちゃんのプラスになれば幸いだ。

「相談しやすいお兄さんみたいな雰囲気あるからな、守矢君は」

「まだ小学生だしやれる事、言える事なんてたかが知れてるんですけどね」

まほちゃんの頭をぽんぽんと叩く。

「それでも、これだけ聞いたんだし投げっぱなしにはしないさ。

まほちゃんに何かあったら何とかしてちゃんと助けてやっから」

まほちゃんがぼかーんとする。

あ、こういうところは姉妹だな、そっくりだわ。

「……私の方が年上だがやはりまるで兄のようだな」

まほちゃんは目を伏せた。

やべ、気分は完全に子供お悩み相談室だった。

「ご、ごめん！」

これは完全にやらかしですねぇ……。

「む、別にやめなくてもよかったのだが」

「へ？」

「みほと違って上手く感情を出せないだけだ」

感情を表現するのが苦手なわけだ。

「みほ相手だと全然問題ないんだが……。

口調もちょっときつすぎると、みほからも呆れられている」

あー、同年代からするとまほちゃんの言い方って、

少しきつく感じるかもしれないなあ……。

「同年代の女子からも男子からもちよつと距離を置かれている気がしてな……」

それは、予想でしかないけど理由がわからないでもない気がする。

「守矢君もこんな無愛想だとちよつと引いてしまうだろう?」

勘違いだと思うんだよなあ、これに関しては。

「いやいや、それ多分引いてるとかじゃないと思う。

俺も最初ちよつとだけ思ってたんだけどね、今は違うけど」

一日一緒にいて結構見えてきたものがある。

「まほちゃん可愛いじゃん? んで、感情そんなに露にしないじゃん?

高嶺の花って思われてるのが一番大きいと思うんだけど……」

そうなんだよ。

俺も最初そう感じたんだよ。

さすが西住家の後継者候補だなと。

みほちゃんがとっつきやすい感じだし、

家が有名な戦車道の流派でその長女ってんだから

なおさらそう思うんだよな。

「高嶺の花？私がか？」

「他に誰がいんのさ」

「みほほど可愛くないぞ？」

「いや、比べられないでしょ。みほちゃんにはみほちゃんの、まほちゃんにはまほちゃんの可愛い部分があるわけだし？」

「あるわけないだろう？」

「俺的には凜としてるまほちゃんとかすっごい魅力的だけど？」

それに笑った時のギャップとか多分すごいと思うし」

普段あんまし笑わない人が笑った時って、

それだけでぐっときたりするんだよなあ……。

「ふむ……」

「自信持っていいと思うよ？少なくとも俺はそういうの好きだし」

「本当か？」

ぐいっと顔を近づけてくるまほちゃん。

……ん?微妙に顔が赤いような?

月明かりしかなくてわかりづらいし気のせいかな。

「そうか」

少し表情の緩むまほちゃん。

「さて、そろそろ寝ないと明日に差し障るだろう?」

立ち上がるまほちゃん。

「そうだね、お互いそろそろ寝ないとね」

布団に入ればもう寝られるよな……。

「そうだ、私が年上である事を見せなければな」

「ん?見せるって、何を……」

立ち上がって振り向いた瞬間視界が真っ暗になった。

まほちゃんが俺の頭を包み込むように抱きしめながら頭を撫でていた。

「」

「みほにもよくやっている。」

こうすると不安がなくなるのだそうだ」

いや、ちょっと待って!?

それは、妹だからでしょうに!?

あ、いい匂いがする……。

いかんいかん!これは不味いダルルォ!?!?!

「よし、これでいいだろう」

しばらくされるがままに撫でられていた。

「じゃあ、私は」

「あ、ああ……おやすみ」

いかん、俺が面食らってる。

「ああ、最後にひとつだけ」

まだ何かあるのか!?

「明日は頑張れ、守矢」

そう言って微笑んだ。

「じゃあ、お休み」

俺は黙ってその背中を見ている事しか出来なかった。

「やられた……」

即実践とは恐れ入る。

大した破壊力じゃねえかまぼちゃん。

頬が熱くなるのがわかる。

……眠れるかなあ。

今回はちょっと長いっすね！

最終章 2 話まで長いっすねえ！
(血涙)

10・試合開始前です！

いつ原作に追いつくかわからないので初投稿です。

投稿遅くなってすんまへえん、許してくださいなんでもしますから！

「——きろ」

ん……もう朝か……。

アラームは5時にセットしたはずだけど……。

まだ鳴って……ないよな……。

「起き——矢」

アラームも携帯のアラーム音でセットしてあるはず。

こんな目覚ましボイスじゃないぞ……。

……じゃあ俺を起こしてるのは誰？

「そうか、今度する時は事前に通告する事にしよう」

そうしてくれ……役得だけど心臓に悪い。

「先に顔を洗うのか? それとも朝ごはんを食べるのか?」

「目を覚ましたいから前者で、案内してくれると助かる」

「わかった、ついてこい」

まほちゃんの後についていき洗面所へ向かった。

「お姉ちゃん、守矢君、おはよう」

起き抜けでちよつと間の抜けた声をさせるのはみほちゃんだ。

「おはよう、みほちゃん」

「みほ、おはよう」

みほちゃんを挟むようにして立ち歯を磨く。

「今日の試合頑張ってね、守矢君」

「ん、なるだけ勝てるように頑張るよ」

「絶対、とは言わないのだな」

「勝負は時の運もあるしね」

俺がいくら頑張ったところで覆せない部分は多々あるし。

逆に俺が出来る事は全力でやらせてもらうけど。

「まあ、なんだかんだ僕はいつも通り自分の役割を果たすだけだよ」

砲手としての仕事はきっちりこなすさ。

（少年少女歯磨き中）

「ところでお姉ちゃん、今日来るのが遅かったけどどうしたの？」

「ん？ 守矢を起こしていた、洗面台にも案内しないといけないからな」

「お姉ちゃんずるい！」

「一応みほの部屋にいったぞ？ 起きなかったのはみほだから私は悪くない」

「むー！」

何故そんなに怒るのかぜんぜんわからん！

「さって、顔も洗ったし飯食って準備しますかね」

「私達は高台で観戦してる」

「ファイト!」

期待には応えたいなー、俺もなー。

「おはよう、守矢」

朝飯食って演習所へ行く途中、父さんに会った。

「おはよう父さん、昨日まったく見かけなかったけどずっと戦車弄ってたの?」

「照としほさんから急に明日試合だって言われたからな。」

一旦、福岡に戻って戦車引っ張ってきたさ」

うわぁ……。

「いやぁ、久々の突貫メンテだったなあ!

もうほんと勘弁してほしいよネ!」

にしてはこの親父、えらくノリノリである。

「いやあ、常夫もいる手前張り切っちゃって、

いつもより余計にバラしていつもより入念にメンテしたさ！」

あれか、メンテでミックスアップが起こったのか？

「それでもいつもより早く終わったし、今日早朝からやる予定の車両も

昨日の夜終わっちゃってさ、二人で朝飯食いに行くかって」

二人？

「ん、何してんだ宗一郎……と守矢君じゃないか」

後から来たのは西住常夫さん。

しほさんの旦那さんでまほちゃんとみほちゃんのお父さんだ。

「おはようございます常夫さん」

「おはよう守矢君、メンテはぼっちりだから今日はしっかり頑張ってくれよ」

「えっと……？」

「ああ、メンテには常夫の手も借りたんだよ」

まあ、別にうちのチームに隠すところなんてないし、

メンテナンスをちゃんとしてくれるのであれば誰が弄ってもいいんだけどさ。

「いやあ、しかし相変わらず君のお父さんはいい腕してるよ、

友人としても同じ戦車道の技術屋としても鼻が高いよ」

「何言ってるんだ常夫、いまだに僕はお前の背中追っかけてる立場なんだぞ」

うむうむ、こういう交流は非常に気持ちがいい。

「でもごめんな、うちの問題に首突っ込ませてさ」

「いやいや、西住流とガチンコで出来るなんて滅多にないですしい経験ですよ」

「そう言ってくれると助かる、じゃあまた試合後に会おう」

「頑張れよ守矢、やるからには勝てよ」

なにを言うんだ父さん、当然じゃん？

演習場の自分のチームの待機場所に向かうと既に全員が集まっていた。

「お、守矢君おはよう」

「今日はやけにゆっくりだねえ」

「おはようございます、ちょっと親父と常夫さんと話してまして」

「余裕だねえ、相手西住流だよ？」

「関係ないですよ、相手が誰だろうと……」

「私たちがやる事はたった一つだけ」

パンツァージャケットを着た母さんが戦車から降りてくる。

いつもの母さんと雰囲気が変わってくるよな。

「チーム全員で勝利を目指す」

いつも圧倒的不利だからなあ……うちのチーム。

戦車の数も質も社会人のチームでも最低だし。

「本日は流星を使うからね、事前の準備と試合中の報告を怠らないように！」
完全に試合モードですなあ、母さん。

「もーちゃん、挨拶に行くよー」

「今行くー」

さて、お相手はどんな方々なんでしょうかね？

「すみません、遅れました」

審判団と相手の方は既に集まっていた。

「いえ、時間ぴったりなので問題ありませんよ」

ふむ……審判団は西住流の人間がやるわけね……。

「ん、あなたが守矢君ね！師範から聞いてるわよ、いい選手だとか」

「えーっと……あなたは？」

「あ、私は蝶野亜美！あなたの所とは一度戦いたかったんだけどね」

「機会があれば是非、母さんはそういうの大歓迎なんで」

わざわざ弱小チームとやってくれる人なんていないからねえ。

こういうところできっかけを作るのは大事だよな。

「本当に男が乗ってるんですね」

敵さんから声をかけられたが視線が冷たい。

軽蔑とまではいかないまでも見下してんなこれ。

「そうだよー、もーちゃんはうちのエースなんだから！」

「やめて、母さん。空気はちよつとは読もう？」

明らかに挑発されてんだよ？

「そうですね、空気を読んでももらえないかしら？

男が戦車に乗るなんて……」

oh……敵視されてますよこれは。

「いやまあ、戦車乗るのが好きなんで。楽しくないですか？戦車道」

これぞ、THE大人の対応。

いや、俺子供だけど。

「弱小チームで隊長の息子だからお情けで乗せてもらってるんでしょ？

昔はどうか知らないけどそちらの隊長の実力も知れるわね」

へえ……そこまで言い切る……。

母さんも黙ってるしやる気満々ですなあ。

「やるときは本気でやるって決めてるんで……せいぜい足掻かせてもらいますよ」

「ほらほら、喧嘩しないの! 両チーム、礼!」

「よろしくお願いします!」

礼が終わったらさっさと言っちゃったなあ、西住流の人達。

「もーちゃん、行くよー」

「ういうい。じゃあ、蝶野さん審判よろしくお願いしますね」

「どちらかに肩入れするなんてことしないから安心して戦いなさい!」
うん、この人はいい人だな。間違いない。

「しかし本当に男の子が乗ってるんですねえ」

「あら? あなたも男が戦車に乗るのはよくないと思ってるの?」

「私は誰が乗ろうと問題は勝敗だけだと考えてますので。ただ、あの態度はよくないですねえ」

ああ、この子は何も知らされていないのか。

なら話はちゃんとあわせておく必要があるわね。

「実力も計れない上に、相手を見下すなんて西住流の名が泣くわよ、本当」

「蝶野さんわかるんですか？」

「もちろん！あの子からはすごい迫力が感じられたわよ！」

特に、母親の事を言われた時はすごかったわねえ……。

私ちよつと鳥肌立っちゃったもの。

あれが、流星の後継者にして西住・島田を倒しうる男の子かあ。

「あと、もうちよつと生まれるのが早ければなあ……」

「蝶野さん、目が怖いですよ？……また合コン駄目だったんですk いたいたいたいたい！！！」

「何か言ったかしら？」

「気のせい！気のせいですかr いたたたたたたたたた！！！！！」

ま、実力はこの目で見てから判断しなきゃね!

「お、隊長戻って……」

母さんは黙ってその横を通り過ぎてしまう。

「あー、今母さんに話しかけないほうがいいかも」

「もしかして向こうさんとなんかあった?」

俺はあの場で起こったことを簡単に話した。

「あちゃー……こりゃ今日の戦場は荒れそうだわ……」

「まあ、母さんの事言われて俺も力チッと来てますしね」

「照さんは……まあいいや、私たちは照さんの言う通りやる事をきっちりとなすだけ」

そうでしょ?と促される。

「今日は守矢君はIV号の砲手、乗りなれてるから問題ないでしょ?」

近くにあるIV号戦車を親指で示す。

「乗りなれてるっていうか、習熟度が一番高いのがこれなんです。がそれは」

「作戦に支障きたさないのだからなんでも一緒。さ、準備準備」

みんなそれぞれの車両で準備を始める。

自分の乗るIV号戦車でも他の搭乗員が試合のための準備を進めていた。

「お、守矢君、挨拶は終わったのかな？」

「終わりましたよ、今日の指示は荒れそうです」

「西住流はお堅いなあ……男が戦車乗っても問題ないだろうに」

なんとなく察してくれるチームメイト。

「さて、守矢君に手伝ってもらうような準備はないからいつも通り

砲手席で集中でも高めてなさいな」

「了解っす」

トントンとIV号を上っていき上部ハッチから中へと入る。

「ここが俺の特等席ー」

お気に入りのクッションを設置した砲手席へ。

「スコープかくにーん」

うむ、視界良好。

咽喉・マイクを身につけて背もたれに体を預けて目を閉じる。

余計な事は考えない、意識を割くのは自分の弾頭をどう相手に当てるか、母さんの弾頭をどう相手に当てさせるかだ。

「守矢君？準備はいいかい？」

しばらくするとそんな声をかけてきながらIV号に残りのメンバーが乗ってきた。ゆっくりと目を開けて一回二回と瞬きをする。

「さあて、全員しまっていこうか！エンジンスタート！」

エンジンがかかり一気に周囲が騒がしくなる。

「うちの部隊コードはライオン、他の部隊にはドロシー、ブリキマン、スケアクロウ」

「ならさしずめ作戦コードは『WIZARD of OZ』ってところですか？」

「相変わず照さんは変なところにこだわるなあ」

「後、隊長からは容赦なく殲滅しろってオーダーが来てます」

「まあ、さっき見た時すごいドス黒い何かを放ってましたけど……」

「ちなみに隊長はやるき満々です」

「やるきの部分が不穏だあ……」

挨拶に一緒に行った俺は、なんら不思議じゃないなあと半ば他人事だ。

やる事は変わらないし。

「さあ、西の悪い魔女を退治しに行こうか！ パンツァーフォー！」

車長が檄と指示を飛ばし指定の位置へと戦車を向かわせる。

動き出し更に騒がしくなる周囲と相對するように自分が拾う周囲の音は最小限に。

聞くべきなのは仲間の声のみ。

確かめるようにレバーを握る。

「IV号、お前に魂を吹き込んでやる」

「お母さん、守矢君勝てるかな？」

みほの疑問はもつともだろう。

相手は曲がりなりにも西住流。

「車両の戦力的に考えれば無理でしょう」

確かにこちらの戦車と比較すると性能差にかなりの開きがある。

「確か社会人のリーグの中でも車両の数や性能で言えば最も低いとか」

「負けてる試合もかなりあるし順位的にも最下位よ」

照さん達は西住流とは違い楽しみ成長を促しながら試合をするチームであり試合の勝敗より、

試合の過程や自分達がどれだけ戦えたかを重視する。

それに、照さん達の人格や格上の車両相手にも物怖じしない戦いはそれだけで人を惹きつけるのだろう、人気や知名度はかなり高い。

「じゃあ守矢君達じゃ勝てないのかな……」

みほが暗い顔をする。

「車両の性能……そこだけを考えればね」

「選手の技量で圧倒してると？」

「個々で劣るのは車両だけ。選手の技量であれば、間違いなく照さんたちが上でしょうね」

お母様がそういう言い方をするのであればおそらく桁違いという事だろう。

「ですが、いくら技量が高くても車両性能が悪ければ……」

「……まほ、照さん達がリーグで最下位にも関わらず人気がある理由はわかる？」

「試合の動画を見る限りですが、どの試合に関しても

惨敗という試合はまったくなく良い試合をしているから……でしょうか」

正直に言えば最下位のチーム相手に上位のチームが圧倒的な試合をしようが順当である。

それだけ戦車の性能や数は戦力に直結する。

時の運で上位チームに勝つ事だってある。

相手の行動をきっちりと読めたり、こちらの作戦が上手く運んだり。

だがその偶然は何度も続かない、必ずどこかで破綻する。

もしそれが破綻しないのであれば、

「そう、彼女達は技量と連携だけで車両数や性能の差を埋める」

それは必然と言える。

「どの車両の選手もどこかのエースをしていても不思議じゃないくらいの錬度。

車長に関してはうちで隊長を任せてもおかしくない実力。

例えばその段階で指揮している人間が落とされようが一切の混乱なく連携して攻めてくるのよ」

通常、部隊指揮している人間が落とされれば指揮系統に多少なりとも混乱が生じ

る。

その混乱に乗じれば戦況の優位にも立てるのだが……。

「上手い事1台落としたと思ったら、何の淀みなく次のプランに移っていくのよ。こちらは誰が指揮しているか、誰を基点とした策かわからない上に、

下手すると全員が独立して行動してる可能性も捨てきれない……島田流よりも性質が悪いわね」

「すごい……ですネ……」

正直そんな言葉しか浮かばなかった。

自分が車長だとしてもそこまで柔軟な対応は出来ない。

「ただ、今日はそこまでいい試合は見られないわね」

「どういうことでしょう？」

「今日は流星の使用を頼んだ上に公式戦には出てこない守矢君ジョーカーもいますからね」

「一人砲手が代わり、作戦が変わるだけでそこまで変わるものでしょうか……」

「結果はすぐにわかるわ……始まるわよ」

試合開始を告げる空砲が響く。

「まほ、みほ、しっかりと見ておきなさい」

全車両が敵を撃滅せんと駆けて行く。

「あれが西住・島田を超える日本戦車道最強の部隊よ」

どうしたら再就職できますか（迫真）

11・これが流星です!

戦闘描写なんて書けないから……(落胆)
もうなんかそこら辺は流し見て、どうぞ。

あ、初投稿です。

《こちらライオン、敵車両射程内》

《スケアクロウ、同じく》

《ブリキマン、いけるよー》

《まずは数を減らす……砲撃開始!》

全車両が一斉に砲撃を開始する。

スケアクロウ、ブリキマンの2車両の砲撃は命中するが撃破判定とまではならなかった。

しかし、ドロシー、ライオンと呼ばれた戦車から放たれた砲弾は的確にウィークポイントを打ち抜き白旗を上げさせていた。

《うわっ！ やらかした！》

《撃破失敗だよー》

《スケアクロウとブリキマンは撃破出来なくてもいいから敵車両への必中を心がけて》

《スケアクロウ I c o p y》

《ブリキマン あいこぴー》

《ライオンは私と一緒にペースを上げる Y o u c o p y ？》

《I c o p y》

ファーストヒット貰ったのは上々だな。

「車長、砲手は砲手で敵を殲滅させます。優先的な車両があれば言うてください」
こちらは、ドロシーの砲手……つまり母さんとの無線での連絡を報告する。

「ああ、いくら動いても僕の精度に影響はしないので思いっきり振り回してもらって構いません」

「言うねえ、A S E^{エース}のドライバーにスカウトされてんだよ？アタシは」

「なら、その腕発揮して影響がまったくないような運転してくださいよー」

「いいねえ、痺れるねえ！了解した！そのオーダーに応えよう！」

《こちらライオン。ドロシー、敵車両殲滅を開始するY o u c o p y？》

《I c o p y。それじゃあ天使とダンスよ！》

なんだこれは、守矢君達はファーストヒットで2台も車両を落としていた。

「すっごいねお姉ちゃん！」

「この距離で……さすが照さんと守矢君だ」

あの距離、行進間射撃、更には対象も動いている状態で

的確にウィークポイントを叩き行動不能にさせる。

娘二人は、純粹に感心している様子ではあるが。

「まさに化け物ね……」

他2両のように当てるだけでもかなりの技量だと言えるが、
当たり前のようにその上に行く。

「む、一発外れたな」

「でもその後の砲撃で倒したよ！」

「フォローが的確だな、すぐさま2発目の砲撃とは」

今のを外れたと思うのであればこの子達にはまだ経験が足りてないと見える。
あれはあの位置に外したのだろう。

外して逃がした先で必殺の一撃を叩き込む。

射角が足りない時に照さんがよくやる方法だ。

照さんに守矢君……日常的にこういった射撃も訓練しているのだろう。

とは言っても、一朝一夕であればできまい。

さも当たり前のようにこなす二人が恐ろしい。

後の2両もたいした腕だ。

行動不能とまではいかないが確実に車両に当ててくる。

こちらの砲撃が当たらない様にあれだけ車両を振り回しておきながら無駄打ちはほとんど見られない。

「……お母様、こちらの部隊の動きが何かおかしいです」

ほんの少し部隊の息が揃っていないのをまほは感じ取ったようだ。

「みほはわかるかしら？」

「ほんの少しだけど足並みが揃ってないような気がする……ほんの少しだけど」

「では何故そうなったのかしら？」

「あそこにいるわけじゃないから何とも言えないけど……焦ってる？感じがする」

「後は、各車両の車長がパニックを起こしかけているな」

半人前二人が揃えば一人前……ということかしら？

「まだ遠距離ともいえるこの距離でこちらの部隊は相手にどれだけの損害を与えているかしら？」

「ほぼ、ゼロです。当たった弾の数を数えたほうが早いかと」

「それに引き換え相手は？」

「着実にこちらの戦力を削いでます」

「それに戦意はそれ以上に削いでるみたい」

戦力はある程度減らされてもこちらの優位は揺るがない。

問題はみほの指摘した戦意の方だ。

「仕様上勝っている戦車で相手と同じように砲撃しているにも関わらず、相手の放った砲弾だけが確実に標的に着弾している。

何故相手は当てられるのか疑問を抱く、疑問を解決する間も相手は着実に迫る。考えども考えども疑問が解決しないから疑問は焦りに変わる。

焦りが判断を鈍らせ深みに落ち、更に焦りを生む」

「くっ！何だってんのよあの部隊は！！！！」

こちらの戦車のほうが数も質も上だっていうのに!!

《た、隊長！こちらの砲撃当たりません！》

《エレファント行動不能！パンターもやられました！》

何も出来ない！何もさせてくれない！

圧倒的に技量は向こうが上！話が違いますよ！西住師範!!

《このままじゃ当たる！散開して敵をかき……きやあああ!!》

無線機の前からは轟音と悲鳴。

「広がりうとして大きく車両の方向を変えたら相手に弱点曝け出すようなものよ！」

《了、了解！》

15両あった車両がもう半分近く……！

「全車隊列を乱さないように通達！近づけばこっちのほうが有利よ！」

もう敵との距離もそう離れていない、近づきさえすればあの程度の台数なんて……。

すれ違いざまに撃破してやる！

《隊長！敵2車両ずつ左右に離れて……》

ここにきて分散？流石にこの陣形のど真ん中を突破しようとは思わないk……。

《敵2車両が先行して煙幕を展開！残り2車両が発見できません！》

「なんですって！！؟؟」

《こちらステアクロウ散布完了》

《ブリキマンおなじくー》

《ライオン、準備できてるよ》

《あの隊長車……部隊番号が削られてる……まあいいや！綺羅星見せるよお！》
ドロシー……母さんの乗っている車両が敵を迂回するように大きく動く。

「照さんたちが動いたね、こっちも動くよ！守矢君！一発たりとも外すなよ！」

「あらほらさっさー！」

「ロックンロールだ!!!!!!」

「お母様……これは……」

「始まったわね……」

戦場はいまや広範囲に煙幕が張られていて状況がよくわからなくなっている。わかるのは戦車が2台がその周りを高速で旋回していることぐらいだ。

「あの2台が守矢君と照さんかなあ?」

ここからどうやって残りの車両を撃破する気だ……?

そう思っているとIV号戦車が煙幕の中に砲撃を行い始めた。

「煙幕の中に? 一体何を……」

砲撃が放たれるとすぐに砲弾が何かに当たる音がした。

「当てたのか!? あの煙幕の中の車両に!?!」

続きざまに別の1台も砲撃、命中させていく。

「いつもと違ってあの中に味方車両がないのだから

あの二人にとっては造作もないことでしょう。

照さん……自分のチームの車両が少ないから本気を出せてないわね」

「出せてない？お母さん、いつもと違うの？」

「本来ならもっと車両数が多いわ、煙幕の中に牽制と進路妨害用として

味方車両も突っ込ませてるの……それでももうこちらの車両はほとんど残ってな

いですけど」

「しかし煙幕の中の車両をこうも易々と……」

それも本来であれば味方の車両もいるのだ。

「照さんは一瞬でも見えれば判別して敵なら墜とせるって

豪語してますが、恐らく守矢君も……」

敵と味方の判断もその一瞬で出来るのか……化け物じゃないか。

「私には砲弾が一瞬だけ光を反射して見えるくらいだよ」

「一瞬見える一本の閃光、それが相手には流星のように見えるの」

なるほど……それが流星か。

「でもお姉ちゃん、なんであの範囲から逃げようとしなのかな？」

「多分、指示が通らないんだ。今あの人たちが感じてるのは

先ほどの焦りが生んだ恐怖だ。その恐怖が思考を止めている」

だが、このままでは何も出来ずにただやられるだけだ。

「あ、動き出したよ！」

「煙幕の効果が薄くなって視界の開けた場所から一気に抜け出すつもりだな」

しかし、何故誰も追従しない？ 指示を出していない訳ではなからう？

「何故誰もついていかないか不思議？」

お母様が心を読んだかのように声をかけてきた。

「あの子の車両だけが自分で考えて自分で行動してるからでしょう。

それに今から指示を出したとして他の車両はついていけないわよ。

完全にパニックを起こしてるでしょうから」

不意にお母様がさした方向はその車両の脱出先。

そしてその場所にすごい勢いで突っ込んでいく車両が一台。

「それに……相手がそうなるように心理的に追い込んでるのだから」

《こちらスケアクロウ狐が巣穴から飛び出すぞ》

《ドロシーはバックアップに入る、ライオン派手に喰らい付け》

《I c o p y》

「車長！ 派手に行っていっすよ！」

「聞いたね！ ド派手に行こうじゃないか！」

出てくる場所がわかっていいるかのような軌道で戦車を駆る。

本来ならあの中にもうちの戦車を突っ込ませてさらに退路を限定するんだが……。

「この程度の相手なら外から追い立てるだけで余裕か」

そう呟いたのと同時に敵戦車……おそらく隊長格の女性が乗る車両が煙幕を突き

抜けてくる。

こちららが出てきた瞬間を狙い側面に突撃する。

大きな衝撃と衝突音。

俺の照準と砲身^{目鼻}の先には敵車両。

「IV号、お前に魂があるのなら……応えろ……ッ！」

遠慮も慈悲もない牙^{砲弾}が敵に浴びせられる。

そこからはもう簡単だった。

指示を送れる人間が潰れてしまった敵部隊がこちらに対抗できるわけもなく……。

「西住側全車行動不能! 荒谷側チームの勝利!!!」

その無線を聞いて方の力を抜く。

勝てたか……この勝敗で認めてくれるか逆恨みされるかは……神のみぞ知るってか。

「守矢君、顔が厳しいぞ」

「まあ、こっからどう転ぶかなあと思うとそれなりに考えますよ」

「それは追々ついてくるもんだ、今は勝利を喜んどきな」

「……それもそうっすね！」

俺がいくら考えたところでどうしよもないしな！

「それにこの後、あっちのボスと娘さんに流星一条みせるんでしょ？」

「あー、忘れてた……あんまし見せるもんでもない気がするんだけどなあ」

戦術とも戦略ともいえない一か八かのギャンブルだし。

「とりあえず照さんと挨拶行ってきな」

「うーっす」

俺は咽喉マイクを外し戦車から降り母さんのところへ向かった。

かなり時間がかかりましたねえ……。
それにしても内容が薄いですねえ……。

12・ひとまずのお別れです!

さあて、そろそろ本気の就活みせてやりますかあ……。

貯金もそこそこ減ってきてるしなあ……。

でもいつも通りの駄文です。

あ、11話ちょっとだけ文が変わってます。

それと、けもフレ2最終話で心壊れ、

ケムリクサ最終話で浄化されたので初投稿です。

「……」

「……」

こんにちは、荒谷守矢ですがこの場の雰囲気が最悪です。

最後の挨拶も向こうの隊長さんしか来ないし……。

母さんは母さんでなんかじーっと向こうの隊長さん見てるし……。

「一同、礼！……って雰囲気じゃないわねえ」

ちよ、蝶野さん！諦めないでくださいよ！

「うーん……どうしたものかしら？」

知りませんよ！

「先輩、周りには誰も居ませんか？」

向こうの隊長さんが蝶野さんに不思議な事を聞く。

連れてきてないのはあなたの判断なのでは？

「あー、さっき貴方の車両の搭乗員以外は西住師範が全員連れて行ってたわよ」

蝶野さんが苦笑い。

どういう意味だ？隊長車は含まれてないのか？

隊長さんだけが除外されて……ってのはわかるんだが。

そう聞くと相手の隊長さんは俺に近づいてきて……。

「ごめんなさい！本当にうちのバカ共がごめんなさい！」

……は？

西住流

「うちのごたごたで守矢君に不快な思いをさせて本当に申し訳ない！」

「……はあ、君の戦車見てから何か引っかけかかると思ってたけど」

母さんが溜息をつく。

「どういうことよ？」

「あの子の乗ってる戦車、しいちゃんカスタムのティーガーIなんだよねえ」

「あ、やっぱりわかります？」

「側面の部隊番号の一部が削れたようになってるでしょ？あそこに砲弾ぶち込んでしいちゃん行動不能にしたのは私だからね」

今だにきちんと塗りなおしてないところを見ると、

しほさん相当悔しいんだな……。

「んで、それとこれがどう関係してくんのよ」

「しいちゃんは今ーちゃん認めてるんだよ？男だからって戦車に乗ってるのを馬鹿にする人間を自分の乗ってた車両乗せると思う？」

思い入れのある車両なら乗せないかなあ……。

「でも、それならなんで初めの挨拶の時はあんな態度を……」

「あー、表向きああでも言わないとあの子達命令絶対聞かないだろうから」

「表向きはってことは……」

「良い戦車乗りに男も女も関係ないと思ってますよ？」

現に守矢君にうちの部隊ボコボコにされてますしね」

「でもそれなら、貴方がする隊長をする必要は……」

「ぶっちゃけ、あの子達だけじゃ部隊として機能しないのよね」

「どういうことです？」

「西住流って名前がほしーだけの人達、荒谷隊長なら聞いてますよね？負の遺産ですよ、あれ」

母さんは、あっ（察し）という顔をする。

「まったくとは言いませんが……部隊指揮は無理ですかねえ……」

名前だけ欲しいってんなら必ずしも優秀な選手である必要はないってことね……。

「そちらの事情は把握しました、僕に実害がないのであれば

何も気にしないので」

「もーちゃんがいいなら、私が言う事はないかな。

歯応えなさ過ぎて不完全燃焼だけど仕方ない」

「ははは……そこまで駄目でしたか……」

「今日審判してた蝶野さんが居てやっと一矢報いれるかな？」

「私をご存知なんですか？」

母さん前から知ってたのか。

「名前とどんな戦いをするかってくらいだよ、前にしいちゃんに連れられて

自衛隊に視察に行った時にちょっとね」

「へえ………んで、どうだったの？」

「感覚と直感で行く遊撃タイプ……昔の西住流には合わない子かな？」

「私、一応西住流の門下生なんですが……」

がっくしと肩を落とす蝶野さん

「ただまあ……しいちゃんの西住流には……目指す先には必要な人材かな？」
母さんの眩きは風に乗ってどこかへ消えた。

「さあ、次は西住親子にお披露目の時間だよ。もーちゃんは準備しといてねー」
「はあ……マジでアレを見せるのか……母さんもやらないようにってたじらんか」
「もーちゃんのステップアップの為に必要な事なんだから！」
「母さんがいいならいいけどさ」
んなら、ちゃっちゃんと準備しますかあ。

〈少年流星一条披露中〉

「ええー！ 守矢君もう帰るの!？」

流星一条をお披露目した後、荷物をまとめ西住家の玄関で帰り支度をしていた。母さんはしほさんとなにやら話し込んでいる。

中学戦車道選手強化がどうのこうのと話してるみたいだが詳しくはわからん。

……ん？ 流星一条の詳細？ 語られるべき時にきつと語られるでしょう。

誰に言ってるのかは自分でもわからんがそう思う。

「みほちゃんもまほちゃんも明日は学校でしょ？ 俺も当然学校がある」

「ぶーぶー」

「守矢君、次はいつこれるんだ？」

「次って気が早すぎない……？」

「そうでもない」

「んー……一人じゃ流石にこれないしなあ……」

いつって言われてもなあ……。

「全然わからん、確実にいつこれるって約束も出来ないかな？」

「そうか……まるで千里眼のようなあの射撃技術、是非とも身につけたいのだ」
表面上、無表情だけどなんとなくがっくりとしたような気がする。

「もうちょっとちゃんと遊びたかったなー」

ぶーぶーと文句を言うみほちゃん。

「身につけたいも何もただの反復練習の成果なんだがな……」

しかし千里眼か……まさかな。

「でもまあ、本当にピンチの時は駆けつけてやるよ」

ちよっと格好付けてみる。

「そうか。……流石は私の惚れた男だ」

お、ちよっと持ち直した。後半は何言ってたか聞き取れなかった。

「私がピンチの時も来てくれる？」

とみほちゃん。

「もちろん」

「まあーっと笑顔になるみほちゃん。

「俺の手が届くんであれば絶対に助けてやるさ」
にっ、と笑う。

「……」

「なんで二人とも顔を赤くするんだ？」

「照、守矢。そろそろ出るぞー」

「父さんから声がかかる。」

「あいあい！じゃあしいちゃん！さっきの事はみんなと相談するねー！」

手を振りながら車に乗り込む母さん。

「じゃあしほさん、お元気で。まほちゃんみほちゃん、またね」

小さく手を振り車に乗り込む。

振り返ると試合も楽しかったなあ。

今度はいつ出来るかなあ。

「……」

何か思いついたように車に駆け寄ってきたまほちゃんが窓をコンコンとノックする。

「ん？どうした？」

窓から手を離すようジェスチャーしてから窓を開ける。

「お姉ちゃんがまた会える様におまじないをしておこうと思ってな」

「お姉ちゃんって……なんかあるの？」

「そうだな、西住流がどういうものか守矢君は知っているか？」

「えっと、撃てば必中守りは固く進む姿は乱れ無し鉄の掟鋼の心……だっけ？」

「そうだ、そして私は西住流の娘として逃げると言う道はない。

まあ、逃げる気等さらさらないのだが」

「……ん？んん??つまり……どういうこと？」

「何、自分の惚れた男は確実に仕留める……と言う事さ」
言うや否やまほちゃんは自分の唇を俺の唇に重ねる。

目を見開く俺。

キラキラした眼差しを辞めない母さん。

若いなあと何故か頷く父さん。

すごい顔でこちらを見るみほちゃん。

開いた口のふさがらないしほさん。

あらあらまあまあと菊代さん。

「断っておくが、私は一途でしつこいぞ？」
と唇に指を当てるまほちゃん。

……へ？

「いやあ！すごいねえ！まほちゃん！」

「……」

「子供子供と思ってたけど特大の爆弾放り込んできたねえ！」

「……」

「どうよもーちゃん！よかった？どんな気持ち？どんな気持ち？」

「ええいうるさい！」

俺だって不意打ち過ぎて混乱してんだよ！

なんだ？なぜだ？何があった？

前世の事を引きずる気はないがこちとら年齢Ⅱ彼女いない暦だぞ？
わからん……全然わからん……何がどうなったらこうなるんだ……。

「まあ、もーちゃん戦車道関係者からすれば超優良物件だからねえ。

かと言って譲る気は早々ないけどナ!」

「ああもう!」

全然考えがまとまんねえ!

「あ、そうだ(唐突)」

「今度は何だよ!」

「もーちゃんは今の小学校は好き?」

急にまじめな顔をする母さん。

「なんだよ藪から棒に……まあ、友達居るから嫌いじゃないよ」

「帰り際、私がいいちゃんと話してたことは知ってるよね」

「まあ、横目で見てたよ」

「あれね、中学・高校戦車道ついでの話だね」

「んだよ、俺関係ないじゃんよ」

俺まだ小学生だし……男子は履修できると限らないし。

「今後出来るであろうプロリーグや世界大会に向けて、

若年層からの選手強化が必要だっていいちゃんが言ってるね」

「まあ、いろんなスポーツでそういうのはあるね」

「全国色々な学校で選手を育成してくれないかって……」

「はあ!？」

「他にも色々な選手が強化目的で学校を巡ってるんだけど

私にもその一員になってくれないかって」

「いや、いきなり言われても……」

「小学校も今居るところから多分転校しなきゃいけないし、
中学校も入学から卒業まで居るってことは出来ないと思う」

「……それは」

ちよつと辛いな……。

「ただ、メリットもあるんだ」

「メリット？」

「行くのは間違いない戦車道のある学校で私は強化指導員と言う立場になるの」

「そういうお仕事だからね」

「つまり、その場その時においては私が誰を補助に付けようが文句は言わせない」

「暴論に近い気がするけど……まあわからんでもない」

「つまりもーちゃんを戦車に載せても誰にも文句は言わせん」

「よっしゃ、その生活乗った」

「つまり他の学校にある色々な戦車に乗れるんだろ？ただの天国じゃん！」

ファイアフライとかIS-2とか……運転できるかわかんないけどCV33運転で
きるかもじゃん！

やっべえなあ！ワクワクするなあ！

「この子ただの戦車バカだよお……」

「乗った事ない戦車で命中率どれくらい叩き出せるんだろ……、

いつものメンバーじゃない人と組んでどれだけ仕事できるんだろ……」

「……でも、もーちゃん。もしそういう事をしたとして、

私のあずかり知らぬ所で何されるかわからないんだよ？

みんながみんなチームメイトやしいちゃん達みたいない人じゃないんだよ？」
それは俺が戦車に乗る以上避けられない問題だ。

……けどさ、

「悪意よりも善意を俺は信じたい、認めてくれる人はきつというさ」

まあ、例え認めてくれない人が居たとしても関係ないし。

「俺は俺が楽しいから戦車に乗ってるんだから」

「そっか……ならしいちゃんには受けるって連絡しておくよ」

楽しみだなあ……。

どんな戦車に会えるかなあ……。

「で、まほちゃんのキスはどんな味だった?」

「イイハナシダナーで終わらせておこうよ!!!!!!」

甘くならないしお話無茶苦茶だし、文才が欲しいのナ!
多分次からグッと原作に近づくと思うんだナ!

13・問題発生です!

今は緑色のケムリクサを吸いながら頑張って生きてます。皆様も季節の変わり目、体調にはお気をつけください。

りつ姉さんから送るバブみの力を貰ったので初投稿です。

小学6年生・及び中学校生活はあっという間だった。

依頼のあった学校へ数ヶ月転入しました次の学校へと転校する。

これを何度も繰り返し返した。

幸い、転入した学校では男だからと言う理由で戦車道をする自分に、偏見や差別を持って迎えてくる事はなかった。

むしろ歓迎されて少し戸惑った部分もある。

後から聞いた話では、しほさんと千代さんが裏から手を回していたらしい。

名門と言われるサンダース・プラウダ・聖グロ・黒森峰なんかにもお世話になった。

アンツィオからの依頼でちょっとした期間、俺らと一緒に学校を回って母さんの指導を受けてた人も居たかな？

多分、母さんの授業を受けた人たちはみんな軒並みレベルは上がったと思う。俺もその手伝いは砲撃に関してなら出来たんじゃないかなあ、とも。

その一方、俺はまほが言ってたことが気になっていた。

別れ際に言われた千里眼。

俺のこの当て勘というか、射撃の技術に関しての急成長は、てっきり母さんから受け継いだものとはばかり思っていた。

だが、まほから言われてひとつの考えが浮かんだ。

ゲ・ーム・に・お・け・る・ア・ー・ラ・シ・ュ・の・ス・キ・ル・。

頑強・千里眼・弓矢作成

千里眼は例え視線が通っておらずとも敵の位置を精確に把握でき、その動向をも認識・把握できる。極めつけは短時間の未来視すら可能というチート。

これに関しては覚えがある。

対象の位置の把握に関しては言わずもがな、

本当に集中してる時は狙う戦車がどう動くか見えるときがある。

これはもしかして、と思い今度は体を鍛え始めた。

確かに小さい頃から病氣なんかはしなかったが……。

自分でも怖いくらい結果が出ました。

体脂肪率一桁の引き締まった浅黒いまるで彫刻のような肉体。

あのゲームで見たアーラシュ像そのまんまでした。

神代の肉体そのままとはいかなかったが、

常人とはかけ離れてしまった気がする。

戦車の砲弾を数十メートルブン投げれる時点で多分おかしいと思う。

しかし弓矢作成のスキルは再現されなかった。

あったとしても使いどころはないよなあ。

で、この俺。

今何をやってるかと言うと……。

「夏休みのところ悪いねえ、共学になったばかりで男手が少なくなっさあ」

「これくらいなことないさ、やることもなくて暇だったしな」

山盛りになるくらい廃棄物を搭載したリアカーを引いていた。

父さん、母さんが戦車道の国際大会に出場する為、一人暮らしを余儀なくされ母さんの母校でもある大洗に転校していた。

母さんの時代は女子高だったらしいが、近年は生徒数減少により共学化している。戦車道がないことには少し残念に思ったが、ないのであれば仕方ない。

まあ、男子だからと色々言われるよりはない方がマシだとも言える。

ちなみに、中学時代お世話になったサンダース・プラウダ・聖グロ・黒森峰・アンツィオからは

是非!と熱いラブコールを貰ったが考えてみる、女子高に単独でなんかいけるか。

中学の時は母さんって言う後ろ盾があったからこそだ。

今思うとすげえことしてるなあとは思うが。

んで、今は大洗の生徒としてつつがない学生生活を送っている。

「よくもまあこんなに溜めたもんだ」

壊れたパイプ椅子やらなんかの部品やら。

「前の会長が色々な処理をそのままにしちゃってたみたいなんだよね、負の遺産？
ってやつ？」

隣には干し芋を齧りながら帯同している女子生徒。

2年にして生徒会頂点の座についている角谷会長だ。

「しかし、角谷の姐さんも2年で生徒会長でやることいっぱい大変じゃないか」

「いやいや、荒谷ちゃんも毎日毎日生徒のために駆けずり回ってるんでしょ？」

「いや、あれはなんというか、何故か俺に回ってきてるだけなんだが」

「それだけ頼りにされてるってことじゃーん」

「悪い気はしねえし、なんとかしてやりたいって気持ちはあるが」

「艦底部の子達も荒谷ちゃんには迷惑かけないんでしょ？」

「ちよっとやんちゃなだけじゃねえか」

何故かあそこらは大洗のヨハネスブルグとか言われてるらしい。

ハバネロクラブあそこにはしかねえし行くのはちーつとめんどくさいが。

意外と話しのわかるやつも多いんだぜ?

「それで済ませる辺り荒谷ちゃんは大物だねえー……つとここでいいよー」

リアカーを止めホイホイと廃材置き場に投げ込んでいく。

「荒谷ちゃん、本気で生徒会はいんない? 今なら色々おまけ付けるよー?」

「ははっ、ただの力持ちが上に立つなンて有り得ねえって」

よし、これで終わりつと。

「まあ、何か手伝える事なら手伝ってやるさ」

ポケットからスマホ取り出してネットを見る。

「んー? 何見てんのー?」

「戦車道全国高校生大会の決勝の結果、そろそろ出てねえかなあってな」

「珍しいねー、男子で戦車道に興味あるんだ?」

「親が関係者だからな、見てると色々楽しいもンだぜ」

戦車道全国高校生大会の公式ページに飛ぶとそこには意外な事が書いてあった。

「おいおい、ちびっこ隊長がみほとまほさんを倒したか」

ちびっこ隊長にはメールでもしとかなきゃノンナの姐さんから砲弾が飛んでくる

な。

みほとまほにももちろん送っとかないとな。

確か黒森峰ってこれ勝てば10連覇だっけか。

……嫌な予感がする。

外れて欲しいが千里眼が絡む俺の勘って外れないんだよな……。

「角谷の姐さん、次の寄港日っていつだっけか？」

「んー？明日だけど？」

「用意しといて杞憂なら御の字、最悪を見越して動かなきゃな」

「何々？誰か愛しの人にでも会いに行くとかー？」

ニヤニヤすんなよ会長。

「まあ、大切な友人ってところだ」

決勝戦の試合を動画で確認する。

「こりゃ、ちびっこ隊長が見事だな。」

みほ・まほ姉妹を完全に分断するのはいい手だ」

「3人とも知ってるんだー?」

「高校生の戦車道の選手としてはかなり有名人だ」

「へー」

干し芋を齧る会長。

そんな会長を尻目に動画はどんどん進む。

「ありゃ、戦車が川に落っこちた。これって大丈夫なもんなの?」

「直ちに影響はない……と言いたい豪雨にこの流れなら

一刻も早く救助すべきだな」

動画では一人の選手がフラッグ車のハッチから飛び出して崖を降り始めた。

「間違いない、みほだ」

そのまま崖を降り、川に飛び込み救助活動をし始めた。

その間にプラウダがフラッグ車を撃ち抜き勝敗が決した。

「こりゃ、しほさん怒るぞ……」

流石にこれはなあ……。

「私には助けたほうが立派だと思うけどねー」

「まあ、大きな流派を背負うってのはそういうことだしな。

ただ、俺の予想でしかないがポイントはそこじゃない」

夢中だったとはいえ大事なところが欠落してんな。

……電話しとくか。

アドレス帳から西住みほの電話番号にコールする。

「……電源切ってるな」

1コールもなることなくアナウンスのボイスに変わる。

だったら、まほだ。

「……もしもし」

「お、まほはでたな」

角谷の姐さんにスマンとジェスチャーしてから少し距離をとる。

生徒会の事考えといてねーと一言残すと干し芋を齧りながら

角谷の姐さんは立ち去っていった。

「なんでかけてきたかはわかるだろ？」

「……みほのことだろう」

「ビンゴ、電話かけても電源切ってるのか出なくてな」

「……みほの立場はまずい事になってる」

まほも精神的に参ってるか……。

黒森峰隊長としての感情と家族としての感情の板ばさみか。

「試合見る限りは敗退原因はちびっこ隊長……プラウダの指揮官の策がドンピシャだっただけで、

誰のせいとも言い難いけどな。あそこも黒森峰クラスで強豪だしな」

やりたい事やれたプラウダが勝った、それだけだ。

「だが、部隊の人間全員がそうは思っちゃいないって事か」

「……ああ、あの敗退は隊長である私の責任だと、そう言っても聞く耳を持たない」

まほは軽く神格化されてるからな……。

まほを叩かずみほを叩くやつらしいんだろう。

「今や味方はエリカだけだ」

前言撤回、エリカが居るのであればまだ救われてるか。

恐らく、あの行動の何が悪かったかもエリカは把握してるだろ。

「ちなみにしほさんは何か言ってるのか？」

「いや、お母様からは何も……」

嫌な予感はこのだな。

下手すればすれ違ったまま、みほが失踪しかねん。

明日が大洗、明後日黒森峰に寄港日ってのも運命ってやつか。

「……なあ、守矢」

すぎるような声。

いつものまほとは雲泥の差だ。

「……みほを助けてくれないか？」

いとも簡単に壊れてしまいそうなまほの一言。
それに対する返答はたった一つだ。

「任せな」

こんなんでいいのかなあ？

ちゃんと読める文章になってます？

14・黒森峰に突撃です!

お祈りメールを食らったので初投稿です。

「よお、ちびっこ隊長!優勝おめでとさん」

連絡船と電車、飛行機を使い熊本に到着して一番に連絡をしたのはちびっこ隊長だ。

……昨日、家に帰ってすぐ熊本行きの準備をした為連絡するのを忘れていた。朝起きたらノンナの姐さんからの怒涛の着信とメールの嵐。

流石に始発近い時間から動き出していたので流石に電話できず、熊本に到着して丁度お昼くらいになったのでこのタイミングで電話を。

「モリーシャ!遅いじゃないの!このカチューシャが優勝したのよ!」

「それに関してはスマン、俺もちよいとヤボ用があつてな」

ノンナの姐さんのことは伏せておくか……。

「試合見たが、連携の要の西住姉妹を完全に分断してからの試合運びは見事だな」

「ふふん！当然だわ！」

元々、才能はプラウダじゃ群を抜いてたからな。

今の黒森峰程度なら楽勝だろ。

「それなのにカチューシャの実力じゃないって言うのよ！」

「そりゃまた……何言われたんだ？」

「あそこでフラッグ車から副隊長が降りなければわからなかったあの状況下でフラッグ車を撃つのは非道だのもうめっちゃくちゃよ！」

「まあ、試合だし攻撃するのは当然なんだが……、

ただ黙って攻撃しただけじゃないんだろ？」

「当たり前じゃない！拡声器で降伏を呼びかけたわよ！

戦車道をしてるのよ？戦争じゃないんだから」

まあ、根は優しいやつだしなあ……カチューシャ。

しかしよく積んでたな、拡声器。

大音量で自分の存在を大きく見せるとかだろう。その姿を想像するとちょっと微笑ましくあるな。

「そうだ、ノンナの姐さんはいるかい？」

「ノンナがどうしたのよ」

「ちよいと電話を代わってくれないか？」

「しょうがないわね……ノンナ！」

一応あちらさんにもフォローはしておかないとな。

「代わりました」

「お、ノンナの姐さん優勝おめでとさん」

「カチューシャがいるのですから当たり前です」

相変わらずカチューシャを崇めすぎだろ。

「それよりも、なぜカチューシャへの連絡がここまで遅いのですか」

「まあ、そう怒りなさんな。ちょっと旅支度到手間取ってな。」

深夜に連絡するのも悪いと思ってカチューシャの昼寝の前の今かけたって訳だ」

「貴方の旅支度などよりカチューシャを優先させなさい」

「この時間帯にかけなかったらノンナの姐さんにも

個別に連絡しないといけないし二度手間だろ？」

「なんで私にする必要が？」

「頑張ったやつを褒めるのは当たり前だろ？」

実際、ノンナの姐さんの砲撃はかなりのレベルだ。

俺もうかうかしてられないな！

……戦車乗れないんだけどさ。

「……そうですか」

「ん？どうした？」

「なんでもありません、カチューシャに代わります」

「お、おう」

変な間があったな……なんだ？何か言ったか？

「それでモリーシャは私達を放置して大洗で何をしてるのかしら？」

「ん？ ああ、大洗じゃなくてヤボ用で熊本にいるんだよ」

「熊本って……黒森峰に行くつもり!？」

おっと、受話器越しでもわかるこのプンプン感。

「……あの姉妹に会いに行く気ね」

「色々ごたごたしてるみたいだからなあ」

「敗戦の責任の押し付け合いでしょ？」

「わかってるじゃないか」

「なら、さっさと行って早くプラウダに来なさい！」

来ないと今度会った時にシベリア送りにしてやるんだから！」

「わかったわかった、そんなときは美味しいメシ期待してるぜ。んじやな」

何か言われる前に通話を切る。

ちびっこは電話が長いんだよ。

「さってと、まずは港の近くに宿を取って明日連絡船に乗らなきゃな」

なるべく早くみほと話したいし明日は朝一の連絡船で学園艦に行きますか。

朝早くホテルをチェックアウトし港の連絡船を使い沖合いに停泊する

学園艦に乗り込み黒森峰女学園へと向かった。

大洗の学園艦よりはるかにでかい。

お土産はビールとかソーセージなどがある。

角谷の姐さんには限定の干し芋でも買ってくか。

あるかは知らん。

「さあて、演習場はこっちっていったよな……」

デカイ、さすが名門校、目的地にたどり着くのも一苦労だ。

最初は校舎のほうに行ってみたが、どうも練習中らしく
演習場の場所を教えてもらった。

「しかし……あっさり入れたな……俺」

これはかなり意外だった。

確認だが一応ここ女子高だよな……。

入り口で来た理由やら身分証やらの提示やは勿論だが、
男がこんな簡単に入れているもんかね……。

「なんか守衛さんがノリノリだったしなあ……」

中等部の戦車道絡みで母さんに引付けいてここに来たって前例はあったが。
それだけで男子学生がここまであっさり入れるもんかね……。

「……あっ、まほ辺りが気を利かせてくれたか？」

考えられるな、意外とそこら辺はきっちりしてるし。

それならありがたくその恩恵にあずかろう。

しばらく歩きながら周りをキョロキョロしていると

複数の戦車と戦車道の受講者と思わしき人たちを見つけた。

「誰か知ってる人がいれば……お、あそこに居るのは……」

俺は見知った後姿を確認すると大きな声で彼女を呼んだ。

「おーい！ エリカー！ 久しぶりだなー！」

演習の一区切りで他の選手と反省会をしている最中、

ひどく聞き覚えがあり、ここで聞くはずのない声を聞いた。

「え? あ? はあ!？」

暢気に手を振り笑う男。

「逸見……知り合いか……?」

先輩の顔が引きつっている。

「誰?」

「なんでここに男がいんの?」

辺りは当然ざわつく。

「えっと……知り合いと言うか……」

なんと説明したら……! そもそもなんでこいつが……!

大洗に居るはずの知り合い荒谷守矢。

会うのは黒森峰戦車道の強化と言う名目で中等部に

母親である照さんと一緒に来た時以来だ。

隊長やみほは頻繁にメールだの電話だのしてるらしいけど、

私は……まあ、隊長たちについて少しメールするくらいかしら……。

でも今は、そんな事はどうでもいいの。重要なことじゃないわ。

何故守矢が黒森峰に來たのか、それが重要よ！

「おいおい、無視はひどくねえか？ハンバーグを食べ損ねたのか？」

「理解が追いついてないのよ！ハンバーグは関係ないわよ！」

「相変わらず元気だなあ、ちょっと安心したぜ」

カラカラと笑う守矢。

「ちょ、こっちに來なさい！」

私は腕を引つ張りみんなと距離をとる。

「っと、両手で引つ張ったら危ないぞ？」

重たっ!?

なにこいつ……ちょっと見ない間に

ものすごく体つきが変わったわね……。

声聞かなかつたらわからなかつたわよ……じゃなくて！

「守矢！なんでアンタここにいるのよ！」

「用事があったからに決まってるだろ？」

何言ってるんだ？と言わんばかりの顔。

腹立つわね……!!

「それはわかってるわよ! わざわざ熊本まで何のために来たのよ……!!」

「みほの為に決まってんだろ?」

「っ……!!」

私は送るのを、教えるのを躊躇ったが恐らく隊長が話したのだろう。

今の黒森峰……いや、西住みほの現状を。

「アンタに、どうにか出来るって言うの……?」

「さあ? まほから聞いた感じじゃかなり塞ぎこんでるみたいだな」

「さあ? って! なんとも思わないの!?!」

「まほからみほを助けてくれと頼まれたから快諾はした。

それにみほとまほと小さい頃に約束したからな。だがどうにかできるかどうかは

別だろ?」

だが、と守矢は言葉が続ける。

「こ・う・い・っ・た・状・況・に・は・覚・え・が・あ・る・か・ら・な」

そうか……相手と理由は違えどコイツも色々な人から

色々言われてきた過去がある。

「……みほを頼むわ……責任の追及かなんかと勘違いして私の話聞いてくれないから」

扉の鍵だけでなく良かったのだがU字ロックまでかけられてしまって、部屋に入れなくなってしまった。

昨日から何度も部屋のドアの前で声をかけているが反応はない。

当然、戦車道の練習にも来ない……今あの子は一人ぼっちなんだ。

「勘違いってことは、エリカも勝敗じゃない部分に文句があるんだな？」

「も、ってことはアンタも？」

私があの子に言いたいのは責任の所在なんかじゃない。

たった一点の大事な事だ。

「勝敗よりもまず大事な事があるからな」

「あの子、たまに周りが見えなくなることがあるから」

こればかりはちゃんと言って上げないといけないしね……。

「で、結局そちらの男性は？」

エリカとの話に夢中になりすぎたな。

「つと……すまんすまん、俺の名前は荒谷守矢。」

一応、高1年だ。黒森峰にちょっとした用事があったな」

「え……これで私の1個下……」

まじまじと体を見られる。

まあ、いつも大学生くらいには見られるなあ……。

そんなに老けてるか、俺？

「男なのに、ここに用事なんて……聞いた事のある名前だし……怪しいわね」

「珍しい男の戦車道受講者だからじゃないか？ほれ免許証」
財布から肌身離さず携帯している免許証を相手に見せる。

「戦車に乗ってるの？珍しいわね、あんまり聞かないわよ？」

「だろなあ、俺も免許取りに行った時は視線がすごくてなあ」

「でしようね、居るとは言ってもかなり少ないもの」

へえ、この人は別に俺が戦車乗ってるからって態度を変えないのか。
いい人だな、うん。

「で、その荒谷君の用事は？」

「ああ、ちょっとまほに会いに来たんだよ」

周りの空気が固まった。

先輩が引きつった表情で逸見を見る。

「……逸見、この人あんたと同学年よね？」

「……はい……同い年のはずです……」

「そうだな、エリカと同じで早生まれの同学年だな」

「……逸見の知り合いでも何でもいいから、

黒森峰で戦車道取ってる人間でまほって名前の子……居る？」

「……一人だけ居ます」

「奇遇ね、私も一人だけしか知らないわ」

なんだ？まほって名前って何人か居るのか？

「ああ、俺が会いたいの黒森峰隊長西住まほだぜ」

「はいアウト！なんであんた隊長の事呼び捨てにしてんのよ！」

途端に周りがざわつき始める。

「いや、これには訳があつてな……エリカにも微妙に関係してるんだが……」

「はあ!?私が何の関係があんのよ!？」

「俺とみほとエリカ同学年だろ？だから呼び捨てにしてるだろ？」

「そこまではまあわかるわ……名前で呼ばれるのは不本意だけど」

「みほを名前で呼んでたら私もそうしろっていったn……」

「そんなことはどうでもいいのよ！」

「お、おう……」

思いつきり遮られたな。

「聞きたいのはなんでアンタが隊長を呼び捨てしてるかってこと！」

「みほとエリカを呼び捨てにしてたら、まほのやつが私もそう呼べってな」

「そんな事あるわけじゃないじゃない！」

「まほさんと呼ぶと反応はするものの言葉を返してくれないし、

西住さんなんて言ってみろ、ガン無視だぞ？ガン無視」

「バツカじゃないの？妄想も大概にしときなさいよ？」

「なら賭けるか？もしまほのこと苗字で呼んでも

何にも反応しなかったらハンバーグ奢れよ？」

「なんでもハンバーグと絡めんじやないわよ！」

「そうだなあ……もし反応したら俺が何でも言う事聞いてやるよ」

「お、おい……逸見……」

先ほどの先輩と思わしき人が遠慮がちに声をかけてくる。

「その賭け乗ってやろうじゃない! アンタが負けたら

この前見つけたお店で隊長と一緒に奢ってもらおうじゃない!」

「逸見……それ以上は……」

ちらちらと遠くを見る先輩(仮)。

そちらをみると、女生徒が一人こちらへ歩いてきていた。

「エリカ、何をやっている」

「た、隊長!」

やって来たのは目的その1の西住まほだった。

「よう、西住さん。お邪魔してるぞ」

まほに元気よく声をかけてみる。

「……」

傍目に見れば何も変わらない様に見えるが俺にはわかる。

めっちゃ不機嫌になったぞ、まほのやつ。

「……隊長？」

エリカが不安げになる。

「まほさん探してエリカにちよいと話をな、なあエリカ？」

「そ、そうなんですよ！いきなり現れて隊長に会いにきたって……」

エリカのやつ動揺してんなあ……。

そしてまほもどんどん機嫌が悪くなるなあ……。

「昨日話した事もあるが、純粹にまほに会いたくもあつてな。

だから先に黒森峰こっぺに来たんだよ。

多分、守衛さんにはまほが話してたんだろ？ありがとな」

「私が呼んだんだからそれくらい当然だろう」

はい反応した。

そしてわかりやすく機嫌が良くなったな。

「た、隊長……」

「どうしたエリカ？」

「……いえ、何でもありません」

そしてわかりやすく落ち込んだな、エリカ。

「……隊長、こちらの荒谷さんは一体どういった方なのですか？」

困惑した表情で疑問を口にする先輩（仮）。

「私の……いや、西住家にとって大事な人だ」

「西住家って……どういう意味ですか？」

いや、俺も気になる。

俺なんかしたか？

……母さんがやらかした可能性も考えられるが。

「将来、西住の姓を名乗ってくれるんだろう？」

またもや空気が固まった。

「聞いてないぞ？俺は」

当然俺からそんな話をしたこともない。

「何だ守矢、私のことは嫌いか？」

「そんなことはないけどよ……」

「なら問題ない」

「いや、大いにあるだろう……。どうして0か1なんだ？」

「私の気持ちは幼い頃から知っているだろう？」

あれだけメールでも電話でも言われれば流石になあ……。

鈍感系主人公も勘違いしようのないレベルの内容だぞ。

「私のことが嫌いなのであれば言ってくれれば私も引き下がるさ」

「嫌いというより、会ったのは小学生の頃と中学生の時の2回だろ？」

「十分だろう?」

「こういうことは普通積み重ねの結果だろ?」

「そういうものなのか?」

誰かこの子に恋愛の仕方とか教えてやれよ……。

「た、隊長! 正気ですか!? 守矢ですよ!」

「ん? なにかおかしいか?」

「~~~~!!」

言いたい事はたくさんあるのに言えないって感じだな。

「守矢! 守矢はどうなのよ!」

「俺か? そりゃ、まほみたいな可愛い子から

好きだって言ってもらえるのは嬉しいがな、

俺とじゃつりあわねえよ」

これは正直な気持ちだ。

「まほは視野を狭くしすぎだ、もっといいやつは居るだろうさ」

「そういう謙虚なところも好きだぞ、守矢」

「聞いちゃいねえ……」

周りのざわつきも半端じゃなくなってきたし目的を果たしに行こうか。

「まほ、今は別に大事な事があるだろう？」

「……ああ、とりあえず案内する。エリカは先に行っててくれ」

「わかりました」

「エリカ、俺が来てるってことは直前まで伏せててくれ、頼む」

「……先に行ってるわ」

エリカが早足に寮へと向かう。

「た、隊長？ 逸見とどちらにいかれるのですか？」

「みほのところだ」

「に、西住の所ですか？」

周りの人間の顔色が色々な表情へと変わる。

困惑するやつ、納得した表情をしているやつ。

明らかに嫌悪感を隠そうとしないやつ。

「やる気がないのならそのままでもいいじゃないですか」

多分、みほと同学年であろう生徒が声を上げる。

「それはどういう意」そいつはどうしてだい？」

まほの言葉を遮る様にその生徒に声をかける。

「練習に出てこないのはやる気がないからでしょう？」

それに彼女は10連覇を出来なかった原因ですよ？」

「ほお、あの敗戦はみほが原因なんだな？」

ここでもやはり色々な反応があるな。

疑問視するやつ、この場の空気に戸惑うやつ、それに頷いてるやつか。

「あの子があ場で戦車を降りなければ……」

「勝っていたと思ってるならもうちょっと考えた方がいいぞ」

正直な意見をそのままストレートに言っただけだ。

「……！」

キッとこちらを睨む女生徒。

「そもそも、黒森峰の戦法であの状況に追い込まれる事自体がもう詰みだろ」

黒森峰は西住流の教えを色濃く受け継いでるんだ。

それが強みであり弱みでもある。

「統制された陣形での電撃戦・短期決戦を用いる黒森峰が

暴走して突っ込んできた戦車に面食らって陣形ぐちゃぐちゃだったじゃねえか」
半ば焦ったプラウダ車両の暴走がとんでもない方向に作用した結果だ。

粛清待ったなしからレーニン勲章物の突撃に変貌だからなあ。

世の中何が起こるかわからない。

プラウダじゃなく知波単生徒なんじゃねえか？と疑ったほどだ。

「まあ、それは仕方ないとしてだ、その後、お前らは何を考えた？」

「一体何を……」

「フラッグ車を逃がす方法か？この状況から相手を追い込む方法か？」

「それは……」

「そうだなあ……自分の車両の現状をどうにかして隊長に指示を仰ごうって思った

ろ?」

びくつと反応する生徒多数。

当たりっばいぞ。

「決して間違いないんだがな……

それが通用するのはある程度のレベルまでだ。

まほとみほが試合中いつも何してるか考えてみた方がいいぞ」

西住流が悪いと言う訳ではない、黒森峰が弱い訳ではない。

だが、あらゆる戦術・戦略に絶対はない。

俺と母さんなんて西住流と対極に位置するような戦い方だ。

それにだって良い面悪い面がある訳で。

「守矢、あとは私の仕事だ。それくらいにしておけ」

「ん……世にも珍しい男子戦車道選手の戯言とでも思っと思ってくれや」

車長はただ指示を聞くための存在ではない。

その他の選手だって自分の仕事だけすればいいって訳ではない。

難しいなあ、戦車道ってのは。

「守矢、みほのところに案内するからついてこい」

「おうよ」

俺はまほの後についていく。

「まあ、ぼちぼち考えますかね」

天岩戸に引き籠もるお嬢様を引っ張り出す方法をな。

「なんなのよ、あの荒谷って男!」

「男で戦車道!? 意味わかんない!」

数人の女子が口々に先ほどの男性に対しての暴言を吐く。

「なんか、わかってるような口ぶりで生意気」

「所詮男の戦車乗りなんて……」

私はそうは思わない。

言ってる事は非常に的を射ていた。

……みほさんは常に色々な事態を想定して動いていた。

副隊長という立場上やっていただけかもしれないが、

それでもあらゆる可能性と行動を想定していた。

「赤星、大丈夫?」

「うん……私は大丈夫だよ」

私よりも心配なのはみほさんだ。

私はみほさんに比べれば事故にあった被害者という立場のせいで

他の子から何かを言われると言う事は少なかった。

けれどみほさんは違う。

立場がそうさせない。

試合終了後の他の生徒からの罵詈雑言。

隊長の言葉で一度沈静化したと思った。

けれど、エリカさんや隊長がいない時に、

何人か部屋の中に居るみほさんに聞こえるように、

彼女を蔑むような事を言っているのもみた。

本当にくだらない。

みほさんを否定して何か変わるのか。

何もしなかった他の人間がみほさんを否定出来るのか。

先ほど、隊長とエリカさんと男性の方がみほさんに

会いに行かれたけど……どうにかなるのだろうか。

「でも……あの男の人……見たことある気がする……」

何年前前に……遠目から見たと思う。

誰だっけ……みほさん達と関係があつて……、

戦車道の関係者で……。

「あ……」

思い出した……かも。

「もしかして……」

「もしかしてって?」

「あの入、荒谷選手の子供かも……」

「荒谷選手って、日本代表のエースアタッカーの?」

「そう、大会撃破率トップの流星・荒谷照」

「赤星の考えすぎじゃない? ただの同姓同名なだけじゃないの?」
いや、と首を横に振る。

「……何年か前に中等部に戦車道履修生強化の目的で黒森峰に
荒谷選手がコーチとして来たの覚えてる?」

「あつたわね……1車両に完敗したの覚えてるわよ……」

「あの時の砲手って……」

「……男の子だったわね」

「それに確か隊長と副隊長、エリカさんとも楽しくお話してたし……」

「それならすごい有名人ねー」

「本当にその荒谷守矢さんだったら、だけどね」

もしそうであれば。

「そうだったら、あの人ならどうにかできるかもしれない」

だってみほさんが好きだって言ってた人だもの。

ううむ、お話を書くのは難しい。

遅くなってすみません。

お話が上手じゃなくてすみません。

15・腹を割って話します!

まだまだ、就活中なので初投稿です。

かなりのおふざけとどうでしょう成分が含まれております。

間接照明のみが部屋を照らす薄暗い部屋。

クシャクシャになったシート。

生気を失ったような瞳。

何か棒のようなものを咥える影。

じゅるじゅるっと何かを吸う音。

「ねじねじゼリーは吸うだけじゃ中にちよつと残るなあ」

「みふお、ふおのうまいんふあふおうも食ふえていいふあ？」

「お前もう食べてんじゃねえか」

私にお構いなしにお菓子を頬張る守矢君とお姉ちゃん。

「み、みほ……大丈夫……？」

唯一私を心配してくれるエリカさん。

「えっと……私は一体……」

「赤星さんだっけか、こっち座ってお菓子でも食べるといい」

「え、ええ……」

いきなり呼ばれ困惑する赤星さん。

そんな状況を見て、私は今心の内にあるものを吐き出した。

「黒森峰学園艦の皆さん、じゃあ聞いてください。

今日今ここで何が起こったのかを、です。

私は一昨日はアレなんです、皆さんご存知の戦車道全国高校生大会の決勝戦を敗北してしまった訳です。皆さんもうご覧になったのではないのでしょうか？

私はあの悪天候の中氾濫した河川に落ちた戦車に搭乗している選手を助けようとして

フラッグ車を放棄、敗北の責任を一挙に受けた副隊長の西住みほです。

副隊長の西住みほなんです」

「お姉ちゃんが副隊長に推薦したんだ」

「え“……隊長そんなことしてたんですか……”」

「エリカを除けばその位置が順当だろ？」

身内鼯鼠と言われるかも知れんがみほ以上のやつは少なくとも居ない」

「そうですね……隊長とアイコンタクトだけでついていけるのってみほさんくらいですし……」

「あの後に、みんなから色々な事を言われて

私は逃げるように部屋に帰ったんだ……。

そしたらもう全然眠れなくて、何も考えられなくて、

昨日の練習にも行けなくなって、どうしたらいいかわかんなくて、

もう戦車道をしたいって思えなくなって……」

「やっぱり一度お姉ちゃんが肅清した方がいいと思う」

「た、隊長！抑えてください！エリカさんも手伝ってくださいよ！」

「いや、そんなやつら消えたって誰も何も思わないわよ」

「まほ、ここはプラウダじゃねえんだから座っとけや。」

エリカは物騒なこと言うのは辞めとけ」

「どうしようって思った時に、お母さんから呼び出しがあったの。

何を言われるのか怖くなって、逃げ出したくて、

頭がごちゃごちゃになって……すると現れたのがこの3人なんですよ」

「しほさん最悪のタイミングじゃねえか」

「西住師範も何かと忙しいのよ……きつと」

「菊代さんから聞いたところだと朝から月刊戦車道の出版社に行ったと言ってたな」

「そういえばあの雑誌、みほさんの事叩いてたような……」

「なるほど、しほさんも娘には存外甘いなあ」

「嘘!? 冗談でしょ!? 何で今の会話でそれが出るのよ!?!」

「あの人の内面知ってりゃ容易に想像はつくぞ。」

内容は流石に見せられんがしほさんからのメールのほとんどが

みほとまほについてだからな。しかもかなり頻繁に送ってくるんだから。

しかし、言いたい事は直接言ってやれって言ったがここで実践しちゃうかあ……」

「何でここに居るのか知らないけど、いきなり守矢君の声が聞こえて、

驚いて扉の鍵とロックを解除して扉を開けると、小さい頃に見た

ボコより遥かに大きい着ぐるみを装着した守矢君が居て

私は突然のことで頭が真っ白になってるのに、腹を割って話そうと

守矢君は部屋に乱入してきたわけです」

「アンタ、いきなり部屋に入って見られたくないものが

あったらどうするつもりだったのよ！」

「その時は全身全霊でそれこそ流星^{スデ}一条^ラ撃つぐらいの気持ちで謝るだけだろ」

「流星^{スデ}一条^ラは辞めてくれ、私とみほに効く」

「流星^{スデ}一条^ラって何でしょう……エリカさん知ってます?」

「いや、私も知らないわよ……」

「私自身は別に守矢君に何も話すことなんてないですよ、

仲は良いですよ? 尊敬もしてる砲撃手です。

でも別に彼と腹を割って話すことなんて何もないですよ。

こっちは結構な頻度で電話とメールで相談してるんですから。

ところが守矢君は私に「腹を割って話そう!」と言って、

何を話したいのか知りませんが、お姉ちゃん達と私の部屋に居座って、

どうか時計見てください。お昼過ぎ12時52分です。もうかれこれ守矢君達は

1時間お菓子を食べながら私の部屋を離れようとしませんですよ」

「お、もうそんな時間なのか」

「お昼食べ損なったじゃない!」

「晩飯奢ってやるから許してくれや」

「む、エリカだけずるくないか？なぁ、赤星」

「え?!そ、そうですかね……?」

「ちゃんとまほと赤星さんとみほにもごちそうするさ」

「さすが未来の伴侶だ」

「違うって言うてるだろ？」

「それで、私はそれで学園艦の皆さんまだ聞いてください、

私は再三「帰って」って言うてるんです。

もう大好きな人たちですよ、3人共。その人達にさっきから私は、

「関係ないんだから帰って！私なんか放っておいてよ！」と

再三罵声を浴びせかけているにも拘らず、帰ってくれないんです。

そして私は、苦肉の策で、これもまた関係ない人なんだけど、

寮監に、電話をしようとしたわけです。

「3人が帰らないから連れて帰ってくれ」と言おうとしたら、

守矢君に電話を取られて、エリカさんにどこかに連絡するよう伝えて、皆さん何て言ったと思います？

「ああそうかわかったわかったじゃあ当事者も呼ぼう!」と言って、それで赤星さんまで私の部屋に来てるんですよ!

どうですか!! 学園艦の皆さん、おかしくないですか!? この人達!! 私は、放っておいてくれって言ってるんですよ!」

「ほら、水でも飲んで落ち着けて」

ぜえぜえと息も絶え絶えなみほに水を渡す。

「……………ふは、そもそもなんで守矢君がここに居るの！」

おおー、ペットボトル一気飲みとは。

相当喉渴いてたんだな。

「携帯の電源切ってるから、まほ経由でちょっとな」

「…………お姉ちゃん」

「今のみほを見ていられなくてな…………」

「でも、守矢君を呼ぶことはないと思うんだ!？」

「それにエリカだって心配してんだぞ？」

「うん…………ずっと声は聞こえてたよ…………ごめんね…………」

「べ、別に、私が自分の部屋に入りたかったただけだし？」

あー、ここエリカの部屋でもあったつけ。

食い散らかして悪いことしたなあ…………。

「赤星さん、あの後大丈夫だった…………？」

「ごめんなさいみほさん！私達のチームが迷惑かけちゃったから…………」

「違うよ、あれはただの事故で赤星さん達のせいじゃないよ」

「でもそのせいでみほさんが……」

「ああ、そこら辺は俺も納得してないな。」

「ちよいと釘刺したし問題ねえだろ」

「何したの!?! 守矢君! みんなに何したの!?!」

特に何もしてないがなあ。

お前達も考えろって言ったただけだぜ?

「特別なことは何もしてないさ。」

中学の時、母さんと来た時みたいに思った事を言ったただけだが」

「赤星さん、みんなの表情どうだった……?」

「えっと……何人かは思い当たった節があるのか下向いてましたけど、

大体の人は荒谷さんを睨んでましたね」

「何で守矢君は敵を作るのかなあ!?!」

「プラウダにも聖グロにもサンダースにも同じように

言ってるんだがなあ……まあ、校風ってこともあるだろうが」

聖グロもだがこんなこと言々と大体反発される。

共通点としては何かしら大きな力が働いてる高校だな。

黒森峰なら西住流。

こっちに関しては直接的ではないな。

自分達で校風と流派に縛られにいつてるようなもんだからな。

そこらへんをまほ、みほ、エリカ辺りがどうにかしてくれると思ったが。

戦闘中の意識の違いがここまでのはっきり出るとはなあ。

潤沢な選択肢があるにも関わらず選ばないしもったいねえよなあ。

聖グロならOG会だろう。

あれは手が付けられん。

完全に何か勘違いした連中の集まりだ。

ダージリンが頭抱えるのも無理ねえわな。

運営や戦略、戦車の種類にまで口出してきやがって。

流石の横暴に母さんもキレたからな……。

最近は大ジリンからクロムウェルが入ったって電話はあったな。

母さんの方にもえらくテンションの上がった電話があったって言ってたな。

……当時一番の驚きは電話一本でOGを沈静化させた母さんだが。

プラウダは思いのほか反発は少なかった。

ちびっこ隊長のカリスマ性は中学の時も健在で、

アイツにあれこれ言ってたから誰も何もいえなかった、

と言うのが真実かもしれんが。

だが、外から見るとちびっこ独裁政権に見えるが、

その実、部下のことはちゃんと把握し有用な意見に関しては

積極的に採用している。

サンダースも同じくだ。

ケイの隊長としての方向性はカチューシャとまったく違うが、

選手や車両の運用方法や部下の士気管理に関しては目を見張るものがある。

各車両の車長の自由度はかなりあり、

試合中でも、隊長のケイに対する反論は許されている。

勿論その反論の理由は言わなければいけないが。

何でも言える隊長って言うのは一歩間違えば舐められてしまうが、

上手くいけば自分に不足してるものをどんどん補ってくれる利点もある。

当然部下からの信頼も厚くなる。

俺本人としてもケイの指揮下で戦った時はやりやすい思った。

ただ「指示は出さないわ！ どんどん撃破しちゃって！」

と指示と言えないオーダーが来た時は車長が頭を抱えたが。

遊撃隊の適正のある人間ばかりのチームだったので適当って訳でもないのだ。

それに車長が自分の適性も含めて気づいてなかっただけで。

「それに、みほの事言われてカチツときてな。

わからうとしねえ人間が何言ってるんだ？ ってな」

キリッとした顔で決める。

「守矢、すごく決まったような顔してるが大部分がボコだぞ」

「ん？　そうか？　輝いてねえか？　ボコ」

シュツシュツとシャドーボクシングをする。

「廊下で取り出したときは頭がおかしくなったのかと思ったわよ」

「みほが喜ぶかと思ってな、持ってきたんだよ」

トイレとかないからな、廊下で着替えるしかなかったんだ。

で、着替えてみほの部屋のドアをノックして、

「西住ー戦車道しようぜー！」

の一言で一発よ。

「タイミングが悪すぎるよ……ボコで喜ぶ気分になれないよ……」

「これ肌触りもすごいんだぞ？　泣いてる赤ちゃんも爆睡させる勢いだ」

実際高かった、俺のお年玉数年分と小遣いがつき込まれている。

「う……ちょっと気になるかも……」

「そうだろそうだろ……てなわけで、ほれ」

俺は両手を広げて受け入れ態勢に入る。

「……え？」

「どーんと飛び込んでこい、ボコの優しきで包んでやる」

ほれ、ばっちこーい。

「いや、いやいやいやいや！おかしくない!？」

「このボコの肌触りは気になるんだろ？」

「ぐぬぬ……抗いがたい衝動が……」

「なるほどなるほど、あれだ、恥ずかしいわけだな」

まほにアイコンタクトを送る。

（ちよつとみほには色々吐き出させるわ。初めは勢いでいけるかと思ったが、これはダメだな、飲み込んで我慢しようとしてる）

いつも通りポンコツ發揮しておかしなテンションのまま

全部ぶちまけて自爆してくれればそれが一番楽な方法だったんだが……。

無意識だろうな、全部吐き出そうとはしてないからな。

(なら二人の方がいいな……同じ黒森峰の関係者より、

部外者の守矢のほうが話しやすいだろう……みほを任せたぞ)

アイコンタクト終了。

これくらいは朝飯前よ。

「エリカ、飲み物がなくなったから買いに行くぞ」

「え、隊長！これほっとくんですか!？」

「……あ、私も一緒に行きますよ。結構な数買いますよね？」

「こ、この空間に置いて行かないでくださいよ！」

「みほ、守矢が暴走しないよう見張っててくれ」

「お姉ちゃんがそれを言うかなあ!？」

「はっはっは、では後ほどだ」

まほ、エリカ、赤星さんが部屋を出て行き扉を閉める。

「これで問題ないな」

「うう……でも……気になるし……」

遠慮がちにボコを抱きつくみほ。

俺はそのままみほを抱きしめる。

ふわぁ、と声を出すみほ。

最高級だぜ？このボコの毛並みは。

そんじょそこらのボコとは比べ物になりませんよ。

しばらくみほは黙ってボコを抱きしめていた。

「……あったかいね」

ボコに俺の体温も加わってるからな。

「こんな風にボコに抱きしめられたのは初めてだよ」

「俺もこんな風に女の子を抱きしめたのは初めてだな」

「そっか……」

少しの間、静まり返る部屋。

「ちっちゃい頃、みほに言ったこと覚えてるか？」
無言のみほ。

「自分の信念を貫き通す事が大事だと思うって」

「うん」

「赤星さん達のほうが大事だったから助けに行っただろ？」

「うん」

「ただ、他のみんながそうじゃなかったってだけさ」

「そう……だね……」

みほはただでさえ溜め込むタイプだからな。

「辛かったな」

ぽんぽんと背中を叩く。

「……うん」

溜め込むだけ溜め込んだら飲み込めなくせに
無理して飲み込もうとするからな。

「今ここには黒森峰とかまったく関係ないボコしか居ない」

どっかで吐き出さないと潰れちまう。

「今は思いつきり泣いていいんだ、ボコが受け止めてくれるからさ」

みほの頭を軽く撫でてやる。

「泣いて吐き出してからゆっくり頑張ればいいさ」

「みんなの私を見る目が……」

ぽつりと

「みんなの言葉が……」

ぽつりぽつりと

「怖かった……怖かったよ……!」

みほの口から少しずつこぼれる言葉。

「私の……私のせいで10連覇できなかったって……、

1年のお前が副隊長なんかしてフラッグ車に乗ったからだって……」

「おう」

ボコの胸元が涙で濡れる。

「西住流家元の娘なのに自分の流派さえまともに使えない無能だって……」

まほが聞いたらマジで肅清もんじゃねえか。

「練習に行かなきゃって……でも何か言われるんじゃないかって……外に出るのも怖くなって……」

「頑張ろうとしたんだな」

自分は間違っていない、間違ったことはしていないって。

「でもやっぱり私が間違ってたのになって……」

やっぱり、って……抱え込みすぎなんだよ、みほは。

「守矢君……私の戦車道って一体なんだったんだろう」

西住の名前を持つ者として周りが勝手に期待しすぎてるんだな。

戦車道をやってるただの女の子だって言うのに。

「何かを切り捨てるよりもみんなで協力して戦って勝ったほうが楽しいって、子供の頃言ってたじゃないか、それがみほの戦車道の根幹じゃないのか？」

「でも……私は……」

「戦車道って正しいとか正しくないとかでやるもんか？」

「それは……」

「俺はそのままのみほでいいと思うんだ。

誰かに何か言われようが俺はみほのような

戦車道のあり方があってもいいと思う」

俺はあの時のように頭に手を置いてくしゃくしゃと撫でてやる。

「お前は、間違っちゃいない」

その一言を聞いてみほが我慢してたものが一気に溢れ出した。

苦しくない程度に抱きしめる力を強くして声を殺してやる。

とりあえずみほの胸の内も聞けた。

最悪のタイミングではあったが丁度いい機会でもあるし……。

しほさんとちゃんと話し合ってもらわないとな。

原作 1 話に追いつくのはまだ時間かかりそうですかねえ……。

ここまで間延びさせるとやっぱうっとおしいですかねえ……？

16・怖さを和らげます!

前回ははっちゃけすぎたと反省はしている。

だが、アーラシユさんもアーラシユフライトするから多少はね？

それと原作ではガラケーが主流でしたが、

この世界線では現代と同じくスマホが主流となっておりますゆえ

ご了承をお願いしますだ。

……こう言っておけば数話前に決勝を

動画で確認してたのも問題なくなるな！

それと後半にある黒森峰云々はオリジナルです。

今度面接なので初投稿です。

しばらく背中をさすっていると、

みほも落ち着きを取り戻してきた。

「みっともない姿を見せてごめんね、守矢君」

「気にすんな、誰だってそういう気分になるときがある」

「そっか……そうだね」

ボコから離れるみほ。

「えっと……久しぶりだね」

「こうやって会うのは久々だな、声はしょっちゅう聞いてたが」

「あはは……なんでも相談できる人ってそんなにいないから……」

「そこら辺黒森峰はお固そうだな。俺の行ってる学校なんて、

会長がほぼ学校の全権握って好き勝手やってるぞ」

「好き勝手って……」

「泥んこプロレス大会とか仮装大会とかやるっていったな」

「……ちよっと楽しそう」

割と楽しいこと優先みたいなどころあるからな、角谷の姐さん。

そんな話をしてると、部屋のドアが開きさっきの３人が戻ってきた。

「戻ったぞ」

「アイスティーしかなかったけど……みほ大丈夫よね？」

「エリカさん、それ以上はまずいです」

手には大量の飲み物とお菓子が。

消費した分ちゃんと買ってきたのか。

後で俺もお金渡しとこう。

「お姉ちゃん、エリカさん、赤星さん」

「どうした？ みほ」

みほが3人に向き直る。

「心配かけてごめんなさい、私はもう大丈夫だから」

みほがぺこりと頭を下げる。

「謝るような事をみほはしたか？」

「でも……」

「でも、は無しよ。アンタそういうところは直した方がいいわよ」

「みほさんが立ち直ってくれたなら、嬉しいです」

3人共出来た子達だよなあ。

（上手くやってくれたようだな）

（俺は何もしてないさ、みほが自分の大事なものに気づいただけだ）

（それでも、だ。ありがとう守矢）

（本当に何もしてないんだけどなあ……）

まほとのアイコンタクトでの会話が終わる。

「しかしだ、まだ問題が残ってるぞ」

「お母様だな？」

「師範は流石に読めないわよ……」

「あまりお見掛けはしませんが西住師範とはどういう方なのでしょう……」
赤星さんはあまり接点がないのか。

まあ、あんまりこっちに顔見せてないんだろうな。

ちゃんと来てりゃ決勝はもっとまともだったろうに。

「えっと……いつも難しい顔してるかな？」

「私達が中学生になってからはあまり笑ったところは見たことはないな」

「無駄に話しかけようものなら睨まれそうな感じがしら？」

「すごく怖いイメージしか沸かないんですが……」

まあ、そんなもんだよなあ。

普通は

二大流派の師範……次期家元としての顔があるしな。

だが、そうではない1面があるのを俺は知っている。

俺と……多分菊代さんや母さん、千代さん辺りは知っている。

本当はただの女性だということを。

先ほど内容は流石に見せられんと思ったが……。

あれは撤回させてもらう。

みほの為に、愛する娘の為に飛散しろっ、西住しほ……！

「では、そんな皆さんにいつもと違う西住しほ師範をお見せしよう」

俺は携帯電話のメール画面を表示する。

「これは、まほが中学生に上がりしばらくして送られてきたメールだ」

~~~~~

差出人…しほさん

件名 ……(・ω・)おかしー！

ここ最近、上の子が溜息ばかりついています

学校で好きな子でも出来たのでしょうか？

それとなく聞いて元気付けてもらえませんか？

(人。△。) ㄅㄅ ！

~~~~~

「ええ……」

「……これ私についてだな」

「あの人のメールの大半はまほかみほだぞ」

「西住師範……顔文字使うんだ……」

「ちよつと意外ですね……」

「そういう機能があるから娘とのメールに使ってみては？」

「って言うってから割と顔文字使うようになったぞ」

初めはひどかったがな。

(∴)

の連発だぞ？

腹抱えて笑ったぞこっちは。

「いや、少なくとも私には用件を簡潔に一言なのだが」

「私に送られてくるのもそうだよ……」

「何で俺にしか送ってないんだ、あの人は。」

俺はあくまで練習台だって言ってるのに」

「ち、ちなみに荒谷さんはこれに何と返したんですか？」

「無難に返したよ。内容はまほに関するものだから答えないがな」

それを聞いてまほが自分の携帯を弄りだした。

「ああ、これだな。守矢から

【溜息ばかりで元氣ないらしいけどなんかあったか？】って

メールが届いたんだ」

は？送った俺でさえ当時の内容なんて正確に覚えてないぞ？

「ちよっと待て、まさか保存してあるのか？」

「？当然だろう、守矢からのメールは全部保存してあるぞ。」

さすがにこの端末に全部は入りきらないから、パソコンに

バックアップを取ってる形だが」

「重い……重いよお姉ちゃん……」

みほが頭を抱える。

「ちなみに私は【同学年の子からしょっちゅう呼び出されて

困っててな、結婚を前提に守矢が付き合ってくるのであれば沈静化するんだが】と返してるな」

「……」

3人共無言で俺を見るな。

「あの時は返答に困ったぞ、まほの事嫌いじゃねえし。

ただ、まほの家に行ったり会った事なかったんだぜ？

まあ、メールと電話はしてたけど」

「こ、困るとかそういう内容じゃないよそれ！」

みほが慌てた様に声を上げる。

「先ほども言ったが、私の気持ちは伝えたはずだろう？」

「出会った初日じゃねえか」

そうでなくても俺の他にもいい男は居るっての。

「ち、ちなみに守矢君はなんて返信したの？」

「ん？【お友達からで】だ」

「守矢君はまだまともでよかったよ……」

俺を何だと思ってるんだ、みほは。

「荒谷さんは隊長のメールを受けて西住師範にはなんと……」

お、気になるのかい？赤星さん。

そういう好奇心嫌いじゃないぜ。

しほさんにはもうちょっとカリスマブレイクを
していただかないといけないからな。

~~~~~

送り先…しほさん

件名 …まほちゃんの件

まほちゃんがとても可愛いので同級生の男の子から  
しょっちゅう告白を受けているみたいです。

真面目な性格なので断ってもその後、

その子のことを少し考えちゃうんだと思います。

好きな子に関してはノーコメントで。

~~~~~

「俺が送ったメールがこれだ」

「なんというか、真面目ね……アンタ」

「相手は年上だぞ？それくらいの良識は小学生でもあるっての」

「今、荒谷さんと話していなければ小学生が打ったメールとは思えませんよね……」
まあ、ビジネスメールなんぞ腐るほど打った経験があるからな。

「私が可愛いとは嬉しいことを言ってくれる」

真実だからね、仕方ないね。

「で、お母さんからはどんなメールが返ってきたの？」

みほもちょっとわくわくしてんなあ。

~~~~~

差出人…しほさん

件名…Σ d (。A。\*)

母：わ、（）まほは可愛いので仕方ありませんね。

父：ω、（）みほも中学に上がればそうなるのでしょうか。

母：、（）二人共そういったことは何も言ってくれませんか。

父：（）母親から根掘り葉掘り聞かれるのは二人にとって嫌なことでしょうし。



そのご意見はごもっともです。

「お姉ちゃん……私達もとお母さんに甘えて良かったのかな……」  
「……かもしれんな、負担にならないようにしてきたつもりだったが」  
やっぱりこいつを見たみほとまほは少し考えてしまったか。

お互い気をつかっちゃってるんだよ。

まほは同年代と比べても精神的な育ちが早い。

家の事情なんかも察する聡い子だ。

そんなまほの後姿を見て一緒にいるみほもそれに合わせる様に  
育ったが故の母親と姉妹のすれ違いだ。

俺も何となく察してはいたが簡単に踏み込んでいい場所でもないからな。

二人が何かを言ってくればって思ってたが相談なかったし。

だがまだ取り返せないほど時間がないわけじゃない。

まだまだゆっくり関係を改善していけばいいさ。

「しかしこれ……もはや昼の帯番組のお悩み相談室ね……アンタいくつよ……」

「これお母さんが私と同じ年の子に送ってるんだ……」

「照さんならまだ納得いくんだが」

「あれ、荒谷さん。これにも返信してるんですね」

「あ、待て！それは不味い！」

~~~~~

送り先…しほさん

件名 ……(A・)ノ□ッ (W・)ナミダヲヲキ

まほちゃんはかなり同年代に比べればかなり大人ですから。

忙しいお母さんに迷惑をかけたくないと思っていますのでしよう。

みほちゃんも可愛いですが、まほちゃんと比べてると

幾分か人懐っこいのでまほちゃんよりもそういう体験が

多くなるかもしれないです。

いつかみほちゃんやまほちゃんがしほさんを頼った時、ちゃんと話を聞いて、理解してあげた上で、

西住家の女としてではなく、母親として話してあげてください。

もし、その時に西住家としての立場を取るのであれば、

みほちゃんとまほちゃんの性格上何も言わず受け入れた上で、

無理をすると思います、二人共根が優しすぎるので。

無理しすぎて二人の中で何かが壊れるかもしれません。

そうなる前に僕と……おそらく母さんですが、

しほさんから二人を離れた上で、

しほさんの敵になると思ってもらって結構です。

僕は二人の味方なので。

~~~~~

「きゃー！エリカさん！これ！これすごいですよこれ！」

テンション爆上がりだな、赤星さん。

「ある意味尊敬するわよ……よくこんなクサイこと書けるわね」  
そう言いながらガン見するの辞めましょうや。

「あの……守矢君……あの……はう……」

顔を赤くしてこつちをチラチラ見るんじゃない！

「守矢、お母様への挨拶が終わり次第お母様への挨拶を済ませよう」  
もはや、なにを言ってるのかわからねえぞ。

……おい、お母様とお義母様ってことか？

話を変えなきゃずっとこの話題で盛り上がりそうだな……。  
強引に打ち切るか。

「盛り上がってるところ悪いが進展は何一つしてないからな」

「『あ……』」

盛り上がるために見せたわけじゃないしな。

「はい、今のメールを見て君達はどう思いましたか？」

4人をびしっと指差す。

「お母様も意外と普通の人だったんだな、と」

「うん、何でも出来る完璧超人だと思ってた」

「西住師範って意外とお茶目な部分もあるのね」

「隊長とみほさんのこと、ちゃんと考えられてるんだなと思いました」  
うんうん、いい傾向だ。

「では、それを踏まえて今から西住本家に呐喊して、  
しほさんと喧嘩する度胸はありますか!？」

「無理よ（ですよ）」

と、エリカと赤星さん。

ま、そうなるな（Z I U N 師匠）

「西住流に撤退の二字は無い」

どこぞの圓明流のような覚悟だな。

「私は……私の戦車道をする為に、前に進む為に、お母さんとちゃんと話すよ」

よし、みほの覚悟が一番大事だからな。

これならいけるだろ。

「今回は、みほの戦いだ。直接戦うのはみほだ。

みほの覚悟さえ固まっていれば何の問題もない」

「みほ、お姉ちゃんは応援しているぞ」

ふんすつ、と両拳を握る。

まほも戦力として使いや完璧だったが……駄目だからなあ。

「直接って……アンタ本当に何する気よ？」

「そもそも西住師範に勝てる場面が想像つきませんよ……」  
甘い、甘いなあ二人共。

「あのしほさんだって苦手なものがあるんだよ。

そこを狙って奇襲を仕掛ければまず間違いないで勝てる」  
多分余裕で、ぐうの音も出ないくらい完封できる。

「奇襲ってアンタ……」

「守矢、あんまり無茶なことならば私は止めるぞ」

「みほさん、苦手なこととか見当がつかますか？」

「つかないよお……」

そりゃ弱点だもの、簡単には話さないさ。

しかし俺は違う。俺は知っている。

初め聞いたときはマジか!?と思った。

この勝負、みほなら相手にチャンスを与える事無く勝てる。

「大丈夫だ、別にド深夜に夜襲かけたりはしないさ。」

正々堂々手段を選ばず真っ向から不意を討ってやるさ」

では、その奇襲の仕込みをはじめましょうかね。

「まほ、実家に電話してくれないか？」

「家に？」

「ああ、んで菊代さんが出たら変わってくれ」

「わかったが……何をするんだ？」

そう言いながら電話をかけるまほ。

「もしもし、まほです」

相手は誰かな？

「はい……それなんですがちよっと守矢と変わります。」

彼が用事があるとのことなので」

お、一発で菊代さんに当たったか。

万が一しほさんに出られたら身構えられちゃうからな。

慎重を重ねないとな。

「もしもし、荒谷です。菊代さん、お久しぶりです」

『本当にお久しぶりです。今熊本にいらっしゃるんですか？』

「ええ、まほとみほに会いに熊本に」

『それはそれは、お嬢様たちもお喜びになったでしょう？』

「来た理由が理由なので、みほとは初めは気まずい所では無かったです」

『ああ……何やらみほお嬢様がいわれない中傷を受けているとか』

「菊代さんはみほの件はどう思います？」

『……そうですね、西住家の家政婦としてこちらに

お世話になっていきますのでそういった差し出がましいことは……』

「まあ、そうですね」

『……これは独り言なのですが、あの戦闘とあの結果で

みほお嬢様に全ての責を負わせるのであれば、今の黒森峰は合わないかと。

このまま無理に嫌々続けるくらいなのであればいっその事戦車道を

辞めた方がよろしいのではないかと思います。

元々みほお嬢様はどちらかといえば照様や守矢様のタイプだと思いますので

見るとこはきっちり見てくれてるし、

言うことはきっちり言ってくれる人だな。

西住家家政婦、井手上菊代さん。

「流石、笑う虎と言った所ですか」

『照様から昔の話を聞いたんですか？少し恥ずかしいですね』

戦鬼・西住しほの右腕にして唯一彼女が指揮を任せられる選手。

ティーガーIIを駆る元黒森峰副隊長。

当時、他選手から口々に出ていた名がラッ<sup>笑</sup>フィン<sup>う</sup>グ<sup>虎</sup>ティーガー。

母さんの話だと、どんな事態だろうがキューポラから身を出す菊代さんは絶対に微笑を崩さなかったらしい。

それが逆に他の選手からは不気味に見えたのだと。

まあ、追い詰めてる相手が不適に笑ってたらそら不気味だわ。

しかも実力は西住しほの折り紙つき。

菊代さんもそれがわかってるから実践してたんだろうって言ってたな。

「その副隊長さんから見て今回隊長はどのような感じだったでしょう？」

『私も一緒に試合を観戦させていただきましたが、

怒るというよりは何かというか、心配したり呆れたりで忙しそうでしたね』

「呆れていたのは、負けたからですかね？」

『それは違います、そうであれば西住は何も変わっていない事になります』

「それを聞いて安心しました……そこで折り入って菊代さんにお願ひがあるんですよ」

『可能なことであればお手伝いいたしますが』

「今から、みほとまほ。後は俺を含めて3人連れて行くんですけど」

『そうなのですか?』

「しほさんからみほに呼び出しの電話があつたみたいで」

『あらあら、それでは晩御飯など考えないと』

「それでですねしほさんには内緒で……」

俺は菊代さんにどうして欲しいかを伝えた。

『えっと……どういうことでしょう?』

「しほさんの事ですから、準備万端で会いに行ったら心の内に思つてることを言わずにキリツとしながら無難なことしか言わないと思うんですよ」

『奥様も不器用ですからね……』

「今後の親子関係の為にも、ここは腹を割って話すべきだと思うんです」

『そこはまあ、私もわかりますが……』

「なのでしほさんに対して話の途中で奇襲を仕掛けようかと」

『いや、そこが私にはさっぱりわからないんですが……』

「しほさんは思ってる以上にぽんこつですからね。」

ちよつと揺さぶれば本音が駄々漏れになると思うんですよ」

『揺さぶるって……ああ、だからですか』

「察していただけました？」

『みほお嬢様であればそうですね……間違いないかと』

「ちよつとくらい喧嘩腰になっても止めないでくださいよ？」

今のこの状態だったらそのくらいが丁度いいと思いますから」

『わかりました、準備についてはこちらでも進めておきます』

「助かります」

『それにしてもよく知っていましたね？奥様のこと』

「メールで相談受けまして……」

『納得いたしました。では準備がありますので』

「はい、宜しく願います」

俺は通話を切ってスマホをまほに返した。

「これで仕込みは済んだ」

「悪い顔してるわよ、アンタ」

「正直言うと楽しくなってきた」

「荒谷さん、それはちょっと……」

「私どうなるんだろ……」

「みほはまずは思いの丈をしほさんにぶつけるだけさ。

後のことは俺に任せろ。」

「わ、わかった」

「まほは……」

「泊まりになるのだろうか？寮監には私が話を通しておく。

お前達は先に寮の玄関に行ってくれ」

ほんとに出来る女だよ……まほは。

「んじゃ、西住流次期家元を奇襲しに行きますか！」

---

次回はまたおふざけが大量に含まれる予定です。

## 17・奇襲開始です!

以前お話したとおり、おふざけ成分があふれ出ています。

今更過ぎますがキャラ崩壊がとんでもないことになっています。

これ誰?となる思われる方もいらっしゃると思います。

でも……とまらなかつたんやなって……。

面接の時、確かな手ごたえの無さを感じたので初投稿です。

「戻りました」

「おかえりなさいませ、奥様」

外出から帰宅すると菊代が出迎えてくれた。

「私が不在の間、何かありましたか?」

玄関でパンプスを脱ぎながら菊代に問いかける。

『みほ、先日の決勝のことについて話があります。

一度家に帰ってくるように』

……今日、みほに連絡を取った時自分の言った言葉だ。

正直、来るとは思えない。

今のみほの黒森峰での扱いや状況は知っている。

あの場からみほを離すために連絡を取ったのだが、

我ながらもっと違った言い方は無かったのだろうかと思う。

……明日にでもまほを通じて連れてきてもらいましょう。

「ああ、先ほどお客様が尋ねてこられたので応接間にお通ししておりますよ」

「客？私に？」

誰か尋ねてくる予定などあったか。

そもそも私がいつ帰ってくるかわからないのに待っていたのか。

「ええ、帰ってくるまで待たせて欲しいと」

「そう……わかりました、すぐに向かいます」

私は上着を菊代に預けると応接間へと向かった。

「おかえりなさい、お母様（さん）」

「お、お邪魔しています西住師範」

「菊代も人が悪いわね……」

応接間に居たのは、みほ、まほ、みほと同級生の逸見。

そして……。

「お久しぶりです、しほさん」

我が友人の息子、荒谷守矢君だった。

「いやあ、唐突にまほとみほに会いたくなって、

会いにつたら何の偶然か家の方に帰るって聞きました、ご挨拶にと」

「……何故、このタイミングでみほとまほに会いに行ったのかは聞きません」  
聞かなくてもなんとなくわかりますから。

おそらくまほ辺りからみほの事を聞いて会いに来たといったところでしょう。

それよりも今は大事なことがある。

「みほ」

「は、はい」

私の声にびくつとする娘。

「先日 of 全国大会の決勝、あれはなんですか」

「……道の崩落で戦車が1両、河川へと落ちて……」

「それで？」

「車両は特殊コーティングもされてるけど、

車両内への浸水ももしかしたらあるかもしれないって、搭乗員の救助を……」

やはり、この子は優しすぎる。

「西住流がどのような流派か、わからないわけではないでしょう?」

「それは……」

「あなたも、西住流の名を継ぐ者なのよ」

ああ、私はこんなことを言いたいわけではないのに。

「西住流はどんなことがあっても前に進む流派」

みほにはできないとわかっているのに。

「強き事、勝つことを尊ぶのが伝統……」

「でも、お母さん……」

「犠牲なくして、大きな勝利を得ることは出来ないのです」

口から出るのは西住流師範としての言葉。

以前、彼にはっきりと伝えられた。

自分はまほとみほの味方だと。

もし、母親としてではなく西住家としての

立場を取るのであれば敵になると。

守矢君がこちらを見ている。

じっとこちらを見ている。

こういう言い方をすればみほは我慢してしまう。

わかっている、わかっていることなんだ。

だが私の口から出てしまった。

ごめんなさいみほ……ごめんなさい……。

「私は……私はそんな戦車道は嫌だ……！」

「!!」

だが事態は思わぬ方向へと転がった。

初めて、初めてみほが西住流師範としての私を拒絶したのだ。

驚いた私は、守矢君の口角が上がったのにも気づかなかった。

「私は！私の戦車道はみんなと戦う戦車道！」

誰かを何かの犠牲になんてさせない！みんなで勝つ戦車道なの！」

隣に居る逸見は驚き、まほも眼を見開いている。

そんな中、顔色は伺えないが守矢君だけが落ち着いていた。

まるで、まほが西住流を否定するのを知っていたかのように。

……なるほど、彼がまほを立ち直らせたと言うことね。

お節介なところはあなたにそっくりね、照。

守矢君とあなた、姿がダブって見えるもの。

みほの目もいつもと違う。

何かを伺うようないつもの目じゃない。

何か決意をしている目だ。

「あなたは西住流を否定するのですか？」

「否定はしないよ……でも私の戦車道とは違うの！」

思えば、みほがここまで何かを言うてくることはなかったわね……。

「私は！私の戦車道がしたいの！」

まほは既に私の手から離れている。

私と同じような道ではあるが彼女は彼女なりの戦車道を進み、  
そしてみほも自分の道を進もうとしている。

「ですが、あなたは黒森峰の生徒……あなたの勝手を許すわけには行きません」  
「わかってる……だから……私は黒森峰を離れようと思うの」

衝撃的な一言だった。

「はぁ!？」

「み、みほ!？」

驚く二人。

この二人も知らなかったのね。

「おお、そこまで考えてたか。なかなか覚悟決めてんなあ」  
素直に感心する守矢君。

「あなたは黒森峰の副隊長……そんな勝手が許されると思ってるの？」

「みんなには悪いと思ってる……でも……」

「そう思うのであれば……」

だが、言い切る前に守矢君が割って入ってきた。

「自分の信じた道に気づいたんだ、

その道を進みたいと思うことは別に悪くはないさ」

みほの頭をくしゃくしゃと撫でる守矢君。

「しほさん、このままじゃお互い平行線で結論は出ない。

しほさんは黒森峰から転校させる気はないんだろ？」

「当然です」

こういう道を歩もうが構わない。

だが、今の黒森峰を変えられるのはみほだけなのだ。

「みほは、今後戦車道をやるかどうかは別として、

今の黒森峰に居る気はないんだろ？」

「そう……だね……もう、黒森峰に私の居場所ってなくなっちゃったし」

みほもみほで譲る気はないようね。

このままでは戦車道自体辞めると言い出しかねないわね。

守矢君もそれがわかって戦車道をやるかどうかは別、

と言っているのでしょうし。

「だよなあ……なら、もう勝負して白黒付けるしかねえなあ」

……ん？妙な方向に話が言っていないかしら……。

「さすがに今から戦車乗って勝負だ！とはいかねえからな。

こちらで今からすぐに出来そうな勝負事を用意しておいた」

「ちょ、ちょっと待ちなさい。

守矢君、話の方向性がまったく見えないわ」

おかしい、我が友人とダブって見える。  
荒谷 照

「それでは……お願いします……!!」

お、お願い……？

みんながぽかんとしている最中、応接間の障子が勢いよく開かれた。  
バン！バン！

そこに居たのは小さいシンバルのようなものを  
打ち鳴らす赤星さん。

「あ、赤星？」

「何やってるのよアンタ……そして何させてんのよアンタ！」

「も、守矢君……赤星さんの顔真っ赤だよお……」

教えてなかったからか動揺してるのはしほさんだけじゃなかった。

ちよっと奇をてらいすぎたか……？

まあいいか、面白い方がいいだろ。

しばらくシンバルを鳴らしていた赤星さんは

シンバルを床に置き赤星さんがポケットからメモを取り出した。  
あれは俺が事前に渡しておいたカンペだ。

ちらちらとこちらを見る赤星さん。

本当にやっていいのかどうか聞いてきてるな。

俺はオッケーと言わんばかりに親指を立てた。

赤星さんがすーっと息を吸う。

勢いのままにやった方がいいんだぜ、こういうのは。

「やあー!やあー!西住ーっ!しほーっ!」

「[[[.....]]]」

おー、これは完全に奇襲成功してしまったな。

敵にも味方にも。

「本年4月！忘れもしない！島田流家元との『お花見飲み比べ対決』！

貴殿のお、堂々たる飲みっぷり！情けない泥酔姿！

敵ながらあ！あっぱれであつた！」

ガタツ！と立ち上がるしほさん。

「待ちなさい！何でそのこと知ってるのよ！」

「ひい!?わ、私は荒谷さんにメモを渡されてこれを読んでく……」

「勝負にはまったく関係ないから大丈夫！」

「それだとただ、私が貶められてるだけじゃない！」

「だって勝負だ！じゃ味気ないだろう？」

面白くないしな。

「情報源は千代さんなんので、文句なら利用できる情報を流した島田流にどうぞ」

「おのれちよきちいい！！！！！」

情報源は千代さんとは言ったが、この現場に居なかったとは言っていないんだがな。

実はこの件、後片付けさせられたのは俺なんだよな。

母さんから、二人が倒れたと聞いたときは慌てたさ。

言ってみたらものすごい酒の臭いをさせて

人様に見せるにはちよいと刺激的な格好で、人様には決して見せられない顔を  
した

島田流家元と西住家師範がそこにはいた。

ちなみにそのときの姿は写メってあります!

しっかしこの時点で十分動揺誘えてんじゃねえかな……。

でも面白いし、しほさんのこの姿はみんな普段見れないだろうから放置だな。

面白いし(2回目)

「しかーし！みほの母親と言う立場上……これを聞かれようが、おめおめとみほを黒森峰から転校させるわけにはいかない！」

「そ、そうよ！勝手なことはさせません！」

動揺しすぎィ！

「よって！ここに！『晩御飯どっちが美味しく作れるかな』を、この西住家にて！執り行う事お！ここに！もうしこーむ……！！！」

それだけ言うと赤星さんは障子を閉めてしまった。

「「「……」」」

静寂が部屋中を包む応接間。

「効果は抜群だったな！」

奇襲大成功！と。

「何よこれ！」

「ん? 奇襲だろ?」

「違うそうじゃない、そういうことを聞きたいわけじゃない」

「戦車でドカンドカンするよりも、こっちの方が面白いじゃねえか」

「ええ……」

若干震えるしほさん。

的確にウィーク狙ったからな。

「今のは聞き間違いかしら?」

「なにがです?」

「晩御飯を作るとかどうとか……」

「俺らが行くことを菊代さん知らなかったンでな、

晩御飯の準備してなかったらしい。

じゃあ勝負のついでに作っちゃったら早いなってな」

しほさんが固まった。

しばらくした後、俺に鋭い視線が刺さる。

「……図ったわね？」

「なんのことやら」

「答える気はないと……それはそれでまあ、構いません。

西住流に撤退の二字はありません。

それに私も日々精進を重ねているのですから。」

まほと同じ事言うじゃないか。

流石親子。

しかしこの言い方……少しは任せずやっていたと言ったところか。  
が、俺は知っているぞ。

付け焼刃でしかないということを。

「作る料理はお互いの評価を比べやすいようパスタにしようか」

「パスタかあ……色々作れるけど……」

「パスタ……まあ、そばみたいなものでしょう」

男でも作れる簡単料理だが、ソースや工夫次第でかなりバリエーションが増える。

俺も一人暮らししてる時にしょっちゅう作ってたな。

ちなみにしほさんから零れた危険な発言は無視する。

俺は何も聞いてない、いいね？

「今この場に居ない人にも審査の協力してもらうけど、

二人であんまり量作ると食べきれなくなる可能性もあるからな？

適量で頼む、足りなきゃ俺が追加で作るから」

その発言にエリカが驚いたような顔をする。

「アンタ料理なんか出来るの？」

「エリカ、守矢の料理の腕はすごいぞ」

「中学生の時に作ってもらったけど美味しかったよ」

「なんというか意外ですね」

「うちの台所は俺が仕切ってたからな」

母さんでかねえんだよ……料理。

「だが守矢、これで何を決めるって言うんだ？」

「そうだな、それも発表しておかないとな」

「は、発表？」

「よろしくお願いします！」

再び勢いよく開かれる障子。

プワァーと笛の音が響き渡る。

「やあー！やあー！西住ーっ！しほーっ！」

「ま、また赤星が犠牲に……」

哀れむような目で赤星さんを見るエリカ。

「このお！対決に勝てばあ、みほは黒森峰に残ろう！」

しかし負ければあ、みほはあ黒森峰を去っていく！

もううわかったであろう、西住しほ！

これよりー行うはあ！みほのお残留を賭けたあ！

調理対決とお！なるのだあー！！！！！」

ボタンと障子が閉まる。

「なあ、守矢。これは必要なことなのか？」

「んー？面白いだろ！」

「これ、赤星が哀れすぎない!？」

「俺がやってもよかったんだけど赤星がどうしてもみほの力になりたいって」

「それでオツケー出すってあの子ちょっとおかしいわよ……」

俺はしほさんとみほに激励を送る。

「しほさん、みほの残留を賭けて頑張ってください」

「ちょっと待ちなさい」

「みほ、自分の戦車道のために頑張れ」

「こ、これはいいのかなあ……」

お互いひかねえもの、しょうがないだろ。

一番初めにしほさんが引いてくれるようであれば、

俺だって奇襲するつもりは無かったさ。

そうじゃないんだから仕方ないね。

「どうした？しほさん」

「どうしたじゃないわ、勝手に決めて

そんなものを私が認めるとでも？」

「ほお、やっぱ認めないと？」

「当たり前です、こんなことで娘の人生を左右させられません」

素直になつてりゃここまでする必要は無かったんだがな。

「……だったらいいんだな？この事、常夫さんに報告しても」

「あ、あなた何を……」

知ってる弱点、あれ一個じゃないだぜ? しほさん。

「常夫さんにみほの意見をガン無視して

黒森峰で戦車道をさせようとしている、と」

「そ、それがどうしたのよ……」

「常夫さん、怒るだろうなあ。」

日頃からみほとまほに対して母親としての接し方をするように言われてるんだろ?」

「あ、あなた汚いわよ!」

この人、常夫さん好きすぎるんだよ。

世間体を気にして誰か居る時はキリッとしてるけど

二人きりだと割りと甘えて来るんだと常夫さん言ってたもんなあ。

「こうなったらやばいよなあ、

好きだった戦車を嫌いになるみほを見たら

常夫さんも考えるところが出てくるよなあ……。

当時小学生の俺でさえ思ってたんだから、

大人の常夫さんはみほ連れて家を出る可能性もあるよなあ……」

これは絶対じゃない。

そんなことするくらいなら徹底的にしほさんを説得する。

娘も溺愛してるがしほさんに対するものも負けてないし。

あの人、しほさん好きすぎるんだよ。

世間体を気にして誰か居る時はキリツとさせてるけど

二人きりなら徹底的に甘やかしたいって言ってたもんなあ。

やべえ、砂糖吐きそう。

「ぐぬぬ……」

「この勝負さえきっちり受けてくれるんなら、

常夫さんにも黙っとくんだけどなあ？」

「い、致し方ありませんね……!」

もうこの時点でしほさんは一杯一杯なのがわかる。

俺はさっきこの場に居ない人も審査に参加するって言ったじゃないか。

常夫さんをその中に含まないとは言っていないよね?(ニツコリ

「ああ、そうだ。それともうひとつ言うことがあったんだった」

「ま、まだ何かあるのですか?」

「勝負に当たってこういう条件を付けさせてもらおうかな、と思ってまして」

「じよ、条件?これ以上何かあるっていうの?」

「お願いします!」

「ま、また!」

三度勢いよく開かれる障子。

ピーッ!と勢いよく3方向に伸びるびろびろ笛。

「やあー！やあー！西住ーっ！しほーっ！」

「また赤星が……」

もはややぶれかぶれになつてゐる赤星さんを見て、

ほろりと涙を流すエリカ。

アイツだつてみほの為に頑張つてんじゃねえかよ！泣くなよ！

応援してやれよ、応援してやれって！

「この対決に負けたならあ、しほさんにはあ！

生き地獄をおー味わつてもらおう！」

「な、何でそんなものを……」

「みほは負けたら居場所の無い黒森峰戦車道に逆戻りで

数人味方は居るとはいえ生き地獄に近いんだ。

それにみほを失つて痛手を受けるのはあくまで黒森峰であつて、

勝つても負けてもしほさん自身は何も痛むところは無いんだぜ？

ただ娘がちょっと遠いところに転校するだけ何だから。

危険性ゼロでみほを手に入れようなんて……、

そりゃあ公平じゃないですよ」

娘が行きたい学校があるから県外に行きたいって、言ってるだけ何だよな。

何か二人共親子関係がマツハでやべえみたいに感じてるけど、

俺からすればそれくらいで親子の縁は切れないだろ……と思うんだよなあ。

親の方が勘当する、娘の方が縁を切るとかしない限りは、だけど。

「なに？ みほがちょっと遠くへ行くことより、

苦しい生き地獄があ、あるものかって？」

いや、あるよな？

一生会えないとかならまだしも

ちよっと遠くに転校するくらいであれば

普通に他にも一杯あるよな？

自分でカンペ書いておいて何だがもうちょっと

他の事書けばよかったな。

「うは！うは！うはは……あるじゃあないか……、

あるじゃあないかあ、西住しほお」

「な、何をさせる気よ……」

「おまえはあ、フリフリヒラヒラが大嫌いだ！

露出度の高い服があ大嫌いだ！戦車道連盟の広告の一環で

コスプレをしたときはあ、ずいぶん辛かったそうじゃないかあ……」

「だから何でそんなことまで知ってるのよ！」

「色々と情報源を持っているので」

これの情報源は母さん。

戦車道連盟は様々な分野とコラボを行っている。

戦車のよく使われる陸自などであれば自衛隊員を。

交通安全週間であれば女性警察官を。

アパレルブランド等ともコラボしておりその際はそのブランドの衣装を着たりしている。

しほさんは鼻屑目で見なくても美人だ。

そもそもそういう依頼は殺到する。

クールでバリバリのキャリアウーマンの様な立ち振る舞いから

女性警察官や自衛隊、服であればスーツやパンツなどの

きちっとした衣装を着る依頼が多いのだが、

極稀にとんでもない依頼をぶち込んでくる企業も居ると言う。

つい最近、母さんと共にとあるアイドル育成ゲームを

手がけている企業の依頼を受けたという。

30秒程度のCM撮影だ。

衣装を着て、そのキャラの様に喋るだけ。

誰でも出来そうな簡単なお仕事。

だがひとつ問題があった、アイドル、すなわち二人の着る衣装だ。

その衣装がすげえフリフリのアイドル衣装と

すげえ露出度の高いドレスのような衣装。

身長の低く実年齢より更に若く見え、こういったことにノリノリな

母さんはアイドル衣装に着替えて振り付けまで完璧にこなしたと言う。

ちなみに演じたアイドルの設定は自称永遠の17歳。

発言にとりどころぼろの出る自称永遠の17歳。

余談ではあるが、そのキャラクターと違い戦車道で鍛えられた母さんは、セトリリストを休憩無しで完璧にこなしたそう。

そのゲームやってるんじゃないか？母さん。

こうなると問題はしほさんだ。

確かにまるでしほさんをベースに作ったようなキャラは存在する。

以前は戦車道で素晴らしい活躍をする寡黙な隊長だったが、

デビューしステージに立ってからは聴く者見る者を魅了する妖艶な女性。  
キャラのデザインも長い黒髪で釣り目気味のキャラとまるで本人。

だが、それをしほさんがやるかと言うとそれは否だ。

こんな素肌に見える衣装は絶対に着ないと頑なに拒否。

スタッフや戦車道連盟の方、うちの母さんも説得をしていたが、  
本人はそんなの知ったことかと拒否。

撮影が長時間止まってしまい、依頼した側も諦めようとした。

しかし、そこは長年の友人である母さん。

必殺の一言をしほさんだけにぎりぎり聞こえる程度で言い放った。

『そうかそうか、つまり西住流きみはそういう流派やだったんだな？』

と、非常にわかりやすい煽り。

わかりやすすぎてもはや苦笑いの出るくらいのものである。  
しかし、その効果は絶大だった。

『っ！やってやろうじゃないの！』

とやけくそになったしほさん。

奪うかのように衣装を取って更衣室で着替え  
無事依頼を完遂したと言う。

この件で母さんは、

「しいちゃんマジチョロイン」

と、不適切な発言を残していた。

ちなみに、その動画の経済効果はとんでもなかったそうなの。

「んん？なんだと？」

1着なら大したことないだろ？」

「言っていない！言っていないわよ！」

まあ、1着でも絶対に嫌だろうな。

「ぬは！ぬは！ぬはは！誰があ1着と言った？」

ん？じゃ2着かって？」

もうノリノリの赤星さん。

いいぞいいぞもつとやれー！

「ぬは！ぬは！ぬはは！」

着せ替え放題だ！満足するまで！ずっと着せ替えさせてもらうぞお！」

「嫌、それは絶対嫌よ！」

「今後２年間のみほに比べれば満足するまでなんですからよっぽど楽ですよ、僕達も鬼じゃないんですから」

「お母様、諦めましょう。これもみほの為です」

しほさんを慰めるまほ。

でもなあまほ……お前は黒森峰の隊長なんだよなあ。

つまり、お前もどちらかと言えば向こう側なんだぜえ……。

「なあ、西住まほお……」

「どうした？赤星」

「人事じゃないんだぞお……お前もお一緒に着せ替えられるんだぞお。

みんな満足するまで！西住しほと西住まほのお！撮影会をおするんだあ！」

「な、何故私が参加しなければならないんだ」

「そら、隊長だもん。戦力の低下は防ぎたいでしょ？」

みほも渡したくは無いでしょ?」

「だが……しかし……」

「なあに、しほさんが勝ってもまほが黒森峰を変えれば、  
みほのやりやすい土壌を作ってやればいいだけじゃないか……。  
みほも助かる、黒森峰も強くなる、いいことしかないぞお?」

「頑張れ! 頑張ってお母様!……!」

よおし、まほは抱き込んだぞ。

「エリカ、身構えてるがお前は別に着せ替えられないからな」

「そ、そうなの……安心したとかじゃないわよ!」

そもそものよこの展開! 絶対おかしいわよ!!」

「だって、どっちも意地があるだろ」

「いや、それはそうだけど……」

もう一押しだな。

「エリカ考えても見ろ、確かにみほが勝ったら同じ学校で

戦車道は出来なくなるかもしれないが友人関係まで破綻するわけじゃないんだぞ？

それにまほの着せ替えはもう2度と出来るチャンスは無いぞ……。

満足度にはお前の満足度も含まれてるんだからなあ……」

「ま、マジ？」

「当然だろ？何で副隊長だけが責任負わなきゃなんのだ。

せめて隊長は犠牲になってもらわないとな、主に俺の為に」

「みほ！頑張んなさい！応援するわ！」

「エリカ!？」

「隊長、私は黒森峰戦車道履修生の前に、

みほの友人です！みほの意思を尊重します！」

エリカもオッケーだ。

「あのお、これでよかったんでしょうか……」

「お、赤星さん。今回は悪かったな」

「いえ、私がお願いしたことですので……」

「まあ、後は野となれ山となれって感じだな」

「でも、ちょっとふざけすぎでは……」

「これくらいで丁度いいんだよ、この人達は。」

「普段がちよっと固すぎるくらいあるんだから」

「外じゃそうもいかないだろうけど。」

「家でくらい、もっと碎けて接するべきだ。」

「家族なんだからよ。」

王道を征く……迷いからの決意ですよ。

原作はよくこんな簡単に転校できましたなあ、と思ってました。

僕の知らない媒体で解説があったかもしれないけど。

でもやっぱり決意決める方が……ええんやなって。

なお、その後の奇襲のひどさよ。

## 18・ビストロ西住開店です!

ちなみに僕は料理はほとんど出来ません。

ネクストキングのしほさんである

カモミールをクリアしたので初投稿です。

現在、夜の18時。そろそろお腹もすいてきたころ。

居間に設けられた特設の審査員席の前には二人の戦士が立っていた。

特設と言っても、人数の関係でいつものテーブルじゃ席が足りなかったので、別の部屋からテーブルを持ってきてくつつけただけである。

『ぼっこぼこにしてやんよ』とでかでかと書かれた

ボコのエプロンを装着する西住みほ。

『今夜も電撃戦』と意味深な文字の書かれた  
デザインのエプロンを装着する西住しほ。

「まずはみほにパスタ系の料理を一品作っていただきます」

「が、頑張ります！」

「その後、しほさんにも同じようにパスタ系を一品作ってもらいます」

「守矢君」

「なんででしょう？」

「なんで常夫さんまでそこに座ってるのかしら？」

審査員席にはしほさんの愛する旦那さん、

西住常夫さんもニコニコしながら座っていた。

「守矢君からしほさんが晩御飯作ると聞いてね、すっ飛んで帰ってきたよ」

「くっ……余計なことを……！」

「……母さんや千代さん呼ばなかったただけ有情だと思っただけだいたい」

「常夫さん！私頑張るから！」

「うっし、じゃあみほ。早速台所で料理を作ってくれ」

「わ、わかった」

台所へと向かうみほ。

「後は……まほ、スマホ貸してもらえるか?」

「貸すのは別に構わないが、何をする気だ?」

「一般家庭に中継設備なんかそろえられないからなあ」

審査会場(仮)にあるテレビにケーブルを差し込む。

「スマホの画面をテレビに映しても構わないか?」

「問題ない」

スマホにもケーブルを刺してテレビの映像出力を切り替えると

まほのスマホの画面を映った。

「おお、私のスマホがテレビに映ってるぞ」

「壁紙はみほか、お姉ちゃんらしくていいじゃないか」

「隊長の携帯ミラーリングして……ああ、中継設備ってそういうことね」

「逸見さん、わかるんですか?」

エリカのやつは察しが付いてるみたいだな。

「設定をリアカメラにしてまほのスマホにビデオ通話すると……」

テレビの画面いっぱいに今の会場が映し出される。

「これで簡単だが台所の中継が出来るようになるって寸法だ」

遅延があるのはしゃあない。

一昔前の衛星放送だと思っただければ問題はない。

「んじゃあ、俺は台所に行って中継してくるから」

俺は、スマホを構えたまま台所へと向かった。

「みほー、ちゃんと料理できてるかー?」

「まあ、パスタくらいなら普通に……って、何で携帯構えてるの?」

冷蔵庫からひき肉を準備しながらこちらに反応するみほ。

「ビデオ通話でみほの姿を中継してるんだよ」

「や、やめてよ! 恥ずかしいよ!」

わたわたとするみほ。

「見てるのは身内みたいなもんだ、問題ねえよ」

「大ありだよお……」

「気にしたら負けさ」

「もう……」

諦めた様子で料理を再開するみほ。

「あ、しほさんにもだけど味付けとかそこらへんは手を出さないけど、何か切るとか冷蔵庫からなんか出すとかアシストはするから言ってくれ」

それくらいなら手伝ってもいいだろ。

……じゃないとみほはともかくしほさんは怖え。

これは、常夫さんからのお願いでもある。

「いとも簡単に指切りそうだからカバーしてくれ」と。

「んー、だったら手伝ってもらおうかな」

そう言いながら大量の水を入れた鍋に火をかける。

「玉ねぎとピーマンを切ってくれるかな？」

玉ねぎはスライス、ピーマンは種をくりぬいて輪切りでお願いします」

「ん、任された」

スマホを台所が移る位置に固定して綺麗に手を洗う。

「守矢君、前より早くなってる？」

話している間にみほは厚切りのベーコンを短冊状に切っていく。

「ずーっと家で飯作ってるからなあ」

みほの横に立って玉ねぎをちゃっちゃか切っていく。

「あ、相変わらず照さんって料理ダメなんだ？」

気づけばソーセージを数本斜め切りし終わっていた。

「みほは上手くなってるじゃねえか」

ピーマンの上下を切り落として中の種を取り除いていく。

「食堂でご飯は出るけど、部屋のキッチンで自炊もしてたから」

みほはトマトピューレに少量のウスターソースを入れ混ぜ、

フライパンにも火をかけ始める。

「ずっとしていると嫌になるがやらなきゃやらないで落ち着かないんだよな」

種を取り除いたピーマンを輪切りにしていく。

「だよねえ、自分の好きな味でご飯食べたくなっちゃうもん」

沸かしたお湯に塩とオリーブオイル、パスタを加えていく。

「さて……と」

熱したフライパンにオリーブオイルをひき玉ねぎを投入。

「ふむ……しんなりするまで炒めてからソーセージとピーマンか」

ここまでくると何作るかは大体予想が付くよなあ。

「あ、パスタが茹で上がる時間だから鍋から上げてこれに入れてくれる？」  
十分に火が通ったらケチャップを加え塩故障で味を調える。

「あいよ」

みほの指示通りに茹で上がったパスタを具材に放り込む。

「絡めてる間にこっちのフライパンもあつためてと……」

パスタを絡めながら別のフライパンにも火をかける。

「ふむ……ただのナポリタンじゃねえな」

「ただのナポリタンじゃインパクト薄いから」

ナポリタンをお皿に盛り付け終わると今度は溶き卵を作り始めたみほ。

「ああ、そういうことか」

「まずオリーブオイルは多めにいれてっ」と

別に熱しておいたフライパンにオリーブオイルをたらす。

「ひき肉とベーコンから火を通して、ある程度経ったら今度は溶き卵。

トマトピューレも一緒にに入れてトロトロになるまでかき混ぜてー」

出来たスクランブルエッグをナポリタンの上に盛り付ける。

「はい、守矢君直伝アンツィオ名物鉄板ナポリタンの完成ー」

通常の鉄板ナポリタンとは違うんだよなあ。

アンツィオ高校に存在するアレنجされた鉄板ナポリタンがこいつだ。

……アンツィオに行った千代美さん頑張ってたかなあ。

「ちゃんと美味しく出来てるかな……」

「見てたけど失敗なんて無かったさ、みんなに美味しいって言って貰おうぜ」

俺は出来上がった料理とスマホを手に取ると特設会場(仮)へと戻った。

「出来上がったぞー……って、まほはどうした？」  
会場に戻ると、ものすごい不機嫌なまほがいた。

「えっと……何があったの？」

後から来たみほも困惑している。

「みほ」

「な、なに？」

「楽しんでたな？」

「な、なんのことかなあ？」

この有無を言わさぬ威圧感は試合のものと変わらん。

「守矢！ 守矢！ こっち来なさい！」

さりげなく席を立ったエリカに呼ばれた。

「まほのやつ、どうしたんだよ」

「どうしたじゃないわよ！どうしてくれんのよ！」

「何で俺とみほが責められるのかさっぱりわからん」

いや、わからんというより何故？

「あんだだけ二人でいちゃついてればこうなるのもわかるでしょうが！」

「ああ？いちゃつくって……料理してただけじゃねえか」

「そんな風に見えなかったのよ！隊長には！」

まほの方をしてみる。

「なあ、みほ。新婚さんごっこは楽しかったか？」

「し、新こ……た、楽しかったよ！もちろん！」

何故張り合う、そこは引くべきでしょうに。

「守矢君、さり気なく私が必要なもの渡してくれたりだとか……、

もうなんかわかってるって感じだよね」

何故そこからマウント取りに行くんですかみほさん。

「さらに戦火広げてるじゃないの！」

「今のに関しては関係ないと俺ははっきり言うぞ」

「どうにかしなさいよ！」

どうにかしろってなあ……。

まあ、俺は料理が出来る出来ないは関係ないしな。

「まほ」

「なんだ守矢、今みほと大事な話を……」

「俺は料理が出来る出来ないじゃなくて

美味しくご飯を食べてくれる人が好きなんだよね」

どっちかっていうのなら美味しいものなら美味しいと

ちゃんといってくれる人のほうが好きだからな。

その点まほは美味しいものならどこが美味しいかを。

好みに合わないのならどこが合わないのかを、

ちゃんとやってくれるから作り手としては非常にありがたい存在だ。

「みほ、早く作ったパスタをみんなに配るんだ」

「ぐぬぬ……守矢君はどっちの味方なのかな！」

「はいはい、さっさと配って食べてもらいましょうね」

こういうのはさっさと話を進めてしまうに限る。

「ちょ、ちょっと！守矢君はどっちの……もう！」

納得のいかない面持ちをしているが我慢してもらおう。

「んじゃ、みほの鉄板ナポリタンを食べてみてください」

みんながそれぞれみほの料理を口にする。

「うわ、これ美味しいじゃないの」

「みほさん！これすごく美味しいですよ！」

「うむ、これはいい。卵の甘みとナポリタンの味が非常によく合う」

学生さんたちの反応は上場だな。

「本当……みほお嬢様に後でレシピを聞いておこうかしら……」

「うん、ポリウムもあるし美味しいよこれ」

大人達にも好評みたいだな。

「で、しほさんは？」

ちゃんと対戦相手の評価も聞いておかないとね。

「……美味しいわね」

悔しそうで、でもどこか満足げに話すしほさん。

娘の成長が嬉しくないわけないんだよなあ。

「では、次のしほさんの料理を食べた後で、

どっちがよかったか判定してもらいましょう」

さて、しほさんの料理はどんなもんかな？

俺はさっき呼ばれたときにビクッと

反応したのを見逃してないからね？

ちゃんと食べられるものが出るといいなあ……。。

自分で作ってみたけど鉄板ナポリタンはマジで美味い。

そんなに難しい工程も無いから作ってみるといいゾ。

料理が苦手な俺でも出来るんだからヘーキヘーキ。



## 19・ぴすとりる西住訥喊です！

面接で見下されたような目をされ半分切れてしまったので初投稿です。

「えー、こちらキッチンです」

通話中のスマホに向かって俺は喋る。

「みほの時はいろんな作業を任されたので喋りませんでした、  
今回は喋る余裕があります」

だって何もしてないんだもの、この人。

「しほさん」

「……なに？」

微動だにしないしほさんに声をかける。

「台所まで来たのはいいですけど調理開始しないんですか？」

スマホ片手にしほさんに問いかける。

「何を作ろうか考えてるのよ」

「考えるほどレシピあるんですか？」

「あ、ありますよ！パスタなんて楽勝です！」

「でもさっきから食材を打ち抜くような目で見てるだけですよ？」

これには流石の食材も真っ青である。

「えー、特設会場の常夫さん。しほさんの手料理を食べるのはいつぐらいですか？」

「な、何てこと聞くの!？」

「いや、これじゃ間がもたないので」

さっさと作ればよかったものを……。

《そうだね……結婚してから菊代さんにまかせっきりだったし……、

一度だけ学生の頃にお弁当を持ってきてくれたんだけどその時だけかな？》

「その時はどんなものを食べたんですか？」

《卵焼きやウィンナーが入ったオーソドックスなお弁当だったよ。

ちよっと見た目はあれだったけど美味しかったな―》

「卵焼きが焦げてたとかそんな感じですか」

《そうそう、何か半分スクランブルエッグみたいになってたんだ》

「鋼の西住しほにも可愛らしいところがある、と言ったところでしようか」

《ごめんなさいって涙目でお弁当渡された時は何だと思ったけどね。

まあ、そんなところもひっくるめてしほさんのこと好きなんだけど》

「もう辞めて……ッ!」

この西住流師範、完全に晒し者である。

《お母様にそんな一面があるとは……》

《何か意外だね、お姉ちゃん》

《何で私は隊長たちの親御さんの惚気話を聞いているのかしら……》

《逸見さん! しっかりしてください! 目に光がないですよ!》

「しほさん、早く調理を開始してください。

このままじゃ夜中になってしまいます」

「わかってます！」

《しほさん頑張ってー》

「常夫さんも応援しています、頑張りましょう。

微力であれば俺も手伝いますから」

「わ、わかったわ……それじゃあブロッコリーを使いましょう」

「無駄にならないで助かった、そちらに下処理の済んだブロッコリーがあります」

「無駄って……水で洗うだけでしょう？」

《お母さん……ブロッコリーって意外と手間がかかるんだよ？》

《む？ そうなのか？ みほ》

《隊長もご存じないんですか？》

《私も洗うだけだと思ってました……》

「意外と知らない人が多いんだな」

「え？ 違うんですか？」

「菊代さん、説明どぞー」

《ブロッコリーは蕾が密集しているお野菜なので水をかけただけでは不十分なの

です。

あらかじめ50度くらいのお湯に逆さまにして20分ぐらい浸しておく、

奥の方のゴミまでとれるのです。私はその後念の為振り洗いいたしますが。》

「ちなみに重曹や野菜用の洗剤で洗ってもいいですよ」

「ただ洗うだけじゃないのね」

また一つ賢くなったしほさんである。

「他に使うものは何があります?」

「そうねえ……海老とトマトかしら」

そう言いながら先ほどパスタを茹でたなべに再度火をかける。

先ほどとそんなに時間が立っていなかったのですぐにお湯が沸いた。

「麺は細い方がいいわよね、多分」

言うが早い!か早々にパスタを鍋に放り込む。

「ちよ、しほさん!パスタ早い!」

みほとは違うんだぞ!?!まだソースのソの字もないんだぞ!

「大丈夫です、パスタが茹で上がるのに時間があります」

ふんす！とトマトを切り始めるしほさん。

大丈夫なのか確認のためしほさんの入れたパスタの袋を見る。

「……ちなみに何分くらい茹でるからその作業に入りました？」

「10分ないくらいでしょう？ 普通」

……ヤバイ。

これパスタ細いやつだぞ……1・4mmって書いてるぞ……。

そんなことを尻目にソースの材料を作るしほさん。

「しほさん……早め早めに麺の固さ確かめた方がいいですよ」

「まだソースの下ごしらえの最中ですが……守矢君がそういうのなら

念の為確かめておきましょう」

麺を一本菜箸で掴んで食べてみる。

「……あら？」

「ど、どうしました？」

「ちよっとこれ食べてみてくれないかしら」

そう言ってパスタを一本渡してくる。

「……いい感じですね」

「思ったより早く茹で上がったわね……」

そう言ってパンチングボウルにパスタを移す。

「何でこんなに早くゆだったのかしら……」

パスタの太さが違うからです。

慌ててフライパンに火をかけオリーブオイルをそこに垂らす。

「守矢君、そのパスタにオリーブオイルを振ったときなさい!」

「伸びないように一応は手を打つんですね?」

「黙って手を動かす!」

怖え……マジじゃねえか……。

「ジュっとしんない……フライパンの加熱が十分じゃないわね……」

先ほどのフライパンに海老を入れているが油の音がほとんどしない。

「そうだわ! 守矢君にんにくを探して!」

「へあ!?!」

「急いで！」

ブロッコリーをフライパンに投入しながら焦ったような表情で指示を出すしほさん。

「俺が台所に来る前に切っていないんですか!？」

慌ててにんにくを探す俺。

「急がないとパスタはもう準備万端なのよ！」

「あ、あった！これどうするんですか!？」

「このソースに使うから切って頂戴！」

「ちょっと待ってください！」

さっさと皮を剥いてにんにくをスライスしていく。

「切ったのはフライパンに入れますよ！」

にんにくをフライパンにそのまま入れていく。

「やっぱりイタリア料理ににんにくのパンチは必要よね」

「さ、先ににんにくじゃないんですかね……こういうのって……」

「切ってなかったから仕方がないわ！いつ入れても一緒よ！」

……もう何も言うまい。

おそらくパスタがちゃんと自分の時間通りに出来ていたのであればここまで混乱することはなかったんだろう。

もう西住流を料理でも体現してるといっても過言ではないな。

「ここに赤ワイン」

炒めている具材に赤ワインをさっと振る。

「塩コショウで味を調え……あ」

「あってなんですか！ あって！」

「今回のパスタはちよつと辛いわ」

塩コショウ入れすぎたな!?

「後は、ここにパスタを入れて絡めるだけね」

パンチングボウルのパスタをフライパンに放り込む。

その見てくれはまさにドームだった。

《な、何でそんなに増えちゃったの!?!》

《何か焼きそばみたいだな、なあエリカ?》

《わ、私に振らないで下さいよ!》

《ボウルに移してから大分経っちゃいましたから……》

《奥様……》

《ほんとしほさんは不器用だねえ》

「大丈夫、ソースと絡みさえすれば全然挽回できるわ……」  
が、増えすぎたパスタは一向にソースと絡まない。

「は、早くしないとまだ増えますよこれ!」

麺をかき回しソースと絡めていく。

「たっぷりあるから、みんなお腹一杯食べれるわね」

違う、そうじゃない。

そういう話ではないんです。

絡めたパスタを

お皿に盛り付ける。

「出来たわよ、パスタ海老とブロッコリーのスパゲッティーティーガー風」

「な、何がティーガーなんですか……」

「圧倒的存在感と攻撃力ね」

「存在感はともかく攻撃力ってなんですか、攻撃力って」

「なんかお見舞いされんのか？」

「まあ、食べてみれば美味しいわよ。きっと」

「不安だなあ……」

企画しといてなんだけどここまでとは……読み違えたなあ……。

「ほら、行きますよ」

しほさんはさっさとお皿を持って会場の方へ戻っていった。

「まあ、なるようになるか」

「では、こちらをご賞味ください」

全員の目の前にはこんもり詰まれたドーム型パスタ。

「少ない方がいいとかお腹一杯とかそんな弱音は聞きません。

みんな平等に食べるんです」

想定よりかなり増えてるからな。

ただ、気持ち多めに常夫さんには食べていただく。

「……なんかもちやもちやしてますね」

「パスタがもはやおもちみたいな食感ね……」

赤星さんとエリカからは微妙な判定。

「お母さん、もうちょつと料理勉強頑張ろう？」

「奥様、私もお手伝いいたしますので」

みほと菊代さんからは応援の声が。

「私も料理は勉強した方がいいか……」

まほからは決意表明が。

「……」

一人黙々と食べ続ける常夫さん。

これにはしほさんも不安顔、

俺も食ったけど不味くはないんだよなあ。

致命的なまでにパスタが伸びてるだけで。

まともな時間だったらそれなりのものが作られてるはず。

「ふう……」

他の人よりも若干多いパスタを完食する常夫さん。

「おいしかったよ、しほさん」

常夫さんの笑顔がしほさんにとっては何よりの報酬だろう。

「さて、結果は何となく察しては居ますが判定をどうぞ」

お皿を片付け審査員に問う。

「師範すみません、みほの方が美味しかったです」

「私も……」

エリカと赤星さんはみほに。

「私はお母様に、味は……察してください」

「僕もしほさんだなあ、みほのも美味しかったけど、

やっぱり愛妻の手料理ってのはそれだけで価値があるもんだよ」

まほと常夫さんがしほさんに。

「おっと、これは菊代さんに全てが委ねられた!」

「あらあら、私ですか」

「さあ、今夜の勝者は……どっち!」

「じゃあ、私はみほさんに」

「決まったああああ!!!」

少し予想外ではあったがみほの勝利に終わった。

「残念でしたなあ、しほさん」

「くっ……パスタさえ……パスタさえ太ければ……」

確認しない方が悪い。

料理ってのはおおよそ手順どおり分量どおりにすれば美味しく出来上がるんだ

よ。

慣れないのに変にアレンジ加えたり目分量でやるから失敗するんだよ。

「さて、みほさん。これで黒森峰から転校することも出来るようになりましたがいかがでしょう？」

「えっと……勢いで言ったのはいいけどちょっと考えようかなって……」

まあ、当たり前だよなあ？

「当然だな、色々考えて決断すればいい、邪魔するもんはもうねえよ」

「……うん」

「まほやエリカ、赤星さんはみほが出て行って欲しくなけりや

内部を変えろ。いい機会だと思ってやり直したらいいさ」

頭のお堅い連中がどこまでいうこと聞いてくれるかはわからんがね。

「しほさんは……」

「わかってます……この件に関して私は口を挟みません」

「いや、違いますよ？」

何言ってるんだこの人？

そんな当たり前のこといちいち確認しませんよ。

「はあ？ ではいった……まさか」

「着替えはここにあるので早く着替えてください」

巨大なバッグを差し出す。

「嫌よ！ 絶対に嫌！」

「いや、長い髪ですしスタイルもいいのでこの衣装は映えると思うんですよ。

あ、安心して下さい。フリフリではないですよ」

俺はカバンから衣装を取り出す。

「何でしょう、この全身紫色のタイツのような……」

「そうですね……あれです、母親の権化みたいなものです」

頼光ママは回す方のノブのママとしても有名だからね。

「正直みほとまほは見ないほうがいいと思うんだ」

「ど、どうして？」

「これ、めちゃくちゃ体のラインというか……扇情的な格好？ みたいな。

それを親がしていると想像してみ？」

「それは……ちょっとあれだな……」

しかもこの世界にはいないキャラクターである。

つまりオリジナルと言う扱いである。

「これ、ツブヤイッターでよく上がってるやつじゃない……」

「お、エリカは頼光ママ知ってるのか。」

うちの学校のサークルで作られてる本のキャラだぞ、これ」

何人かのサーヴァントの絵を漫研に書いて見せたら

鬼のような形相でアイディアをよこせと詰め寄られた。

やっぱりあれほど売れたコンテンツはこちらの世界でも通用するようで、ツブヤイッターでも軒並み好評、今年の夏コミにも参加していたようだ。

「なんですか、この格好……！無理です！絶対に嫌です！」

「そんなに嫌なんですか？」

「当たり前でしょう！」

「うーん……じゃあ、今から言う条件を飲むのであれば勘弁してもいいですよ?」

俺はしほさんにその条件を伝えた。

「……本当にそれでいいのですか?」

「そういいますけど出来ないからこうなってるんですからね?」

「そ、それはそうですが……」

「これは二人のためでもあります、俺はこっちをオススメしますがね」

「……わかりました」

「ではこれを」

俺は一枚のメモ用紙を渡す。

「これは……」

「後で見えておいてくださいね」

さって、俺は他の準備をしないとなあ。

やばい……どんどん間延びしてるぞ……。

出来れば後数話で原作1話にしたいぞ……！

## 20・母と娘、そして春です!

無職になって1年なので初投稿です。

「すー……はー……」

お母さんの部屋の前で深く深呼吸をする。

——先ほど謎の料理対決が済んだ後、守矢君に呼ばれた。

「しほさんから話があるから、今日の22時にしほさんの仕事部屋を訪ねてくれ」

「お母さんが？」

「着せ替えの代わりにな、思ってること包み隠さず話してくれっから」

「で、でも……」

「なあに、ただちょっと親子で話をするだけさ」

一体何を話すんだろう。

一体何を話せばいいんだろう。

考えても考えても答えは出ない。

親子で話？戦車道以外で何を話すというのか。

そこでふと気づいた。

もう長いことお母さんと家族の会話と言うものをしていない。

……考えてもしようがない。

答えなんてでないんだから。

コンコン

「誰？」

「……みほです」

「入りなさい」

お母さんの許可を得て仕事部屋へ入る。

「お母さん」

「……」

座ってメモ用紙を見ているお母さんの表情は険しかった。

「……何見てるの?」

「これ? 守矢君からの指令書みたいな物かしら?」

「な、何やらせようとしてるんだろ……」

「余計なお節介ってやつかしら? ……本当、そういうところは、彼の母親そっくりね」

「照さんの事?」

「ええ」

ふう、と溜息をつくお母さん。

「今回の事と照さんと初めてあった時って本当……そのまんまなのよね」

「そのまんま?」

「知りたい?」

「……ちょっと気になるかも」

「縁側で話しましょうか、ここだと気を使うでしょ？」

「ご、ごめんなさい」

お母さんの後を追うようにして部屋を出て、縁側に腰掛ける。

「彼女と会ったのは戦車道全国大会の決勝戦だった。

当時3年の私は隊長でね……」

お母さんの口から語られた過去の事件。

先日の決勝戦とまったく同じ状況でまったく正反対の対応を取ったお母さん。それに怒って詰め寄った照さんとお母さんの本当の気持ち。

「決勝は本当に驚いたわよ、あの時と同じ状況が私の娘に起こっていたんだから」

「うん……」

「戦車からあなたが飛び出た時は、驚きと一緒に、

やっぱりとも思ってたわ」

「やっぱり?」

「ええ、あなたはまほに比べれば優しすぎる。

あの状況なら飛び出してもおかしくない、と」

「でも……お母さんは……西住流は勝つことが全てだって……」

「西住流の師範としてはね……でも、母親としては別よ」

「母親として……?」

「これはね……私、まほ、逸見そして守矢君の共通見解になるわ」

な、なんだろう……。

「なんで命綱も付けずにあの濁流に飛び込んだの!？」

「え、ええ!？」

予想外の言葉だった。

「あの勢いならあなたが溺れる可能性も十分に考えられたのよ!？」

「で、でも……」

「あの場で一番危険だったのは命綱も着けずに飛び込んだあなたよ。

もしあの時……あなたにもしものことがあったら……」

意外だった。

お母さんが。

西住流の師範が。

勝利とは別のことに意識を置いていることを。

「でも、試合には負けたし……お母さんは西住流は勝つことを尊ぶ流派だって……」

「それは西住流師範としての立場での言葉です」

西住流師範としての言葉？

「……私はダメな母親ですね。誰かにお膳立てされないと

言いたいことも言えないとは……」

少し悲しそうな顔をするお母さん。

こんなお母さんは始めてみる。

「みほ」

「は、はい!」

「あなたがあの子達を助けようとしたこと、あの場で私には出来なかった決断をしたこと。

そんなあなたを私は誇りに思います、胸を張りなさい……」

お母さんとしての言葉。

当たり前に思える言葉に私は感情を抑えることが出来なかった。

「うん……！うん……！」

お母さんに戦車道のことで褒められたのは初めてかもしれない。

「ほら、もう泣かないの」

「ごべんなさい……」

「まったく……誰に似たんだか……」

そう呟くお母さんは少し笑っていた。

「すぐにでも転校するの？」

「勉強もあるし流石に無理だよ」

「……これから戦車道はどうするの？」

「守矢君も言ってたけど、戦車に乗らなくても出来ることはあると思う」

「そうね……特にあなたは車長になることが多いから、

色々やれることはあるわね」

「学校では乗らないの? まほに言えばきつと……」

「それはお姉ちゃんに悪いよ、納得できない子も一杯居るだろうし」

「私も黒森峰の中では表立って動くことは出来ないわ」

「うん、お母さんに迷惑はかけないよ」

「……はあ、これは私が悪いのだろうけど」

そうお母さんが呟いた。

「もっと私やまほを頼りなさい。

黒森峰校内ではダメでも西住<sup>じ</sup>本家なら通せることもあるわ。

戦車に乗りたくなったら菊代に言いなさい。

確約は出来ませんが出来る限り私も力になりましょう」

「うん……ごめんね……」

「そこは謝るところじゃないでしょう?」

「そう……だね……ありがとう、お母さん」

守矢君のおかげで、私とお母さんはまたちゃんとした親子に戻れた……かな？

「まったく、世話の焼ける母娘なこと」

少し離れたところで隠れて様子を伺っていたが杞憂だったな。

俺はその場をそっと離れて自分に宛がわれた部屋に戻る。

「しほさんがメールくらい素直になつてりゃ何の問題もないんだがなあ」  
上の立場ってのもなかなか不便なものな。

「でもまあ、あの調子なら大丈夫そうだし明日大洗に……あん？」

俺の部屋の前の縁側にはまほが腰掛けていた。

「おかえり、守矢」

「よお、エリカと赤星さんと一緒にじゃないのか?」

「二人共すぐに寝てしまったよ。みほの件やお母様とのことがあったからな」

「あー、精神的にガリガリやられたのか」

なんだ、ならコスプレもさせてねえんだな。

「……主な原因は君だと思うが」

「あんなイベントうちの学校じゃ日常茶飯事だぞ? 角谷の姐さんが

色々ひっちゃかめっちゃかにしていくからな」

「黒森峰にはそういった催しなどないからな……」

「中学もガチガチだったもんなあ……」

「これから寂しくなるな」

「なあに、転校にはまだ時間はあるし、今生の別れてわけじゃないんだ。

メールでも電話でも好きにやりやいいさ」

「それにいままで仲間だったみほと争う可能性があると思うとな……」

「みほが大事なら戦う時、まほの西住流で叩き潰してやればいいさ。

簡単にはやられてはくれないだろうけどな」

まあ、それこそ総力戦って感じだろうなあ。

「そんな時は特等席で観戦させてもらおうとするさ」

「当然、私を応援してくれるのだろうか？」

「どっちも応援するに決まってんだろ」

「むう……」

「不満そうな顔をするなよ」

不服そうな顔をしていたまほだったが、

急に俺に頭を下げてきた。

「守矢……本当にありがとう」

「なんだよいきなり」

「もしかしたらみほが戦車道を捨てたかもしれないなかった」

「そうだなあ、戦車道が嫌いになってたかもなあ。」

だけどもならなかった。それでいいじゃねえか」

「それでも、だ」

「律儀だねえ」

「……私はダメな姉だな」

「なにがよ?」

「みほを庇うことも出来ず、現状で放置してしまった」

「しょうがねえだろ、黒森峰の隊長ってのはそれだけ重たいもんだ。

それに、あの場で庇ったところで誰も許しはしねーよ、残念ながら」

「だが……」

「いや違うな……説明不足過ぎるのか、敗戦はみほのせいじゃないって言ったところ、  
ろで、

何にも考えてねえやつらにゃわからんぜ」

そもそも自分らのチームの戦略の性質を把握している連中なら、

パニックにはならねえだろ。なった時点で自分らの強みが失われるんだからな。

「そういう意味ではこの敗戦は必然であって、いいタイミングなのかもな」

「変えられるのだろうか、この私に」

「それはまほの頑張り次第だな。ただ、困ったことがあれば

いつでも相談してくれ、ご期待に応えられるかはわからんがな」

まほの頭をくしゃくしゃと撫でる。

「さて、俺はそろそろ寝るからまほも部屋に戻りな」

「何を言っている、今夜は私もここで寝る」

「んじゃ、おやすみ！」

まほを締め出し布団に入る。

まあ、家族がまとまったようでもよかったよ。

翌日、まほ・みほ・エリカ・赤星さんに見送られ熊本を発った。

それから青森に行きちびっこ隊長<sup>カチキューシヤ</sup>をなだめに行ったり、生徒会の手伝いでめまぐるしく過ぎていった。

夏休みが終わって季節は夏から秋へ、秋から冬へ。

そして冬から春へ。

「学年一個上がっても、通学路はなんも変わりやしねえなあ」  
いつもの時間、いつもの喧騒、いつもの風景。

今日もまた変わらぬ一日が始まる。

「いや……少しは変わったか？」

視線の先には少し浮かれ気味な女子高生。

「アイツはやっぱなんも変わってねえな」

よそ見して電柱にぶつかるとか滅多にみねえよ。  
思わず笑みがこぼれる。

「大洗に来て早々もうドジってんのか？」  
その女子高生に駆け寄って声をかける。

ビクッとする女子高生。

「まさか戦車道のない大洗学園<sup>うち</sup>に来るとはなあ」

恐る恐る振返った顔はやはり見知った顔だった。

「あ……」

あちらも俺に気づいた様子。

「事前に行ってくれば引越しの手伝いとかもしたんだがね」

「えっと……あの……」

相変わらず試合以外じゃおろおろしてんなあ。

なにはともあれだ。

「おはよう、みほ。」

「っ! うん! 守矢君、おはよう!」

その笑顔はとても晴れやかで、

いつもの風景に少しばかりの花が添えられることとなった。

久しぶりに書きましたん。

共学なので県立大洗女子学園から大洗学園と表記しています。

ぼちぼちお金を稼ぎつつ就職活動してるので更新は遅くなりますですよ。

## 21・お友達と予想外の復活です！

合間に初投稿です。

---

始業式から数日が経ち新しいクラスにも少し馴染んできた。

「今日のランチなにかなー？」

「パン買って屋上で食べよう」

時刻はお昼、午前の授業が終わりクラスメイトはそれぞれ昼ごはんに向かっていく。  
そんな中、数日前よりこの大洗学園に転校してきたみほはと言うと……。

カラカラ……。

「あっ……」

シャーペンを落とし、

ゴン！カラカラ……。

「おっ……」

拾おうとして頭をぶつけ定規やらを落とし、  
ガタガタ……カチャカチャ……。

「あう……」

挙句、筆箱を落としてひっくり返していた。

ふむ……子供の頃とは比べ物にならないくらい大人しくなったよなあ。

友達が出来たような感じもねえし。

クラスに馴染んできたら変わっていくか。

とりあえず一人で飯食うよりは二人の方がいいだろ。

幸い今日は弁当作ってきてないしな。

みほに声をかけるとしよう。

「おーい、みほー。一緒に昼めs……」

「へーい！彼女！一緒にお昼どーお？」

……おん？

みほに声をかけてきたのは同じクラスの武部と五十鈴だった。

「え、ええ!？」

「ほら、沙織さん。西住さん驚いてらっしゃるじゃないですか」

「あ、いきなりごめんね」

「改めまして……宜しかったらお昼一緒にどうですか？」

「わ、私とですか!？」

「「うん」」

さすが武部だ。

みほにもあっさりランチのお誘いをするとは……やはり女子力満載か。  
なら俺は購買でなんか買って屋上にでも……。

「荒谷さんもお声をかけようとしていたみたいですが、

もしかして西住さんとお約束でも？」

「え!? 荒谷君、西住さん狙ってるの!？」

さすが武部、残念力満載か。

「いや、みほが一人だったみたいだから一人より二人の方が……」

「名前を呼び捨て!? もうそんな関係なの!？」

「ああ……これには少し事情が……」

「転校したての西住さんと荒谷君の関係……きやああああ!」

なんか一人で盛り上がってんぞこいつ。

「ごめんなさい、荒谷さん。それでしたらまた後日お誘いを……」

「五十鈴、別にそんな深いもんじゃねえよ。親同士が知り合いでな、

子供の頃から顔を知ってんだよ」

嘘はついてないぞ。

みほが戦車道のないこの学校を選んだからそっち関連の話題も、

あんまししないほうがいいだろ。

俺が戦車道をしていたことを知ってる人間も居ないだろうからな。

「あら、そうなのですか」

「俺としてはみほには早いところクラスに馴染んで欲しいから、五十鈴や武部と一緒に飯食った方がいいと思うんだがな」

「そ、それだったら4人で食べればいいんじゃないかな？」

お、みほもちよつとは進歩してるな？

「俺は五十鈴や武部がいいなら別に構わないが……」

「私は大丈夫ですよ」

「武部はどうよ？」

「荒谷君とご飯？もちろんOK！」

ビシィッとサムズアップする武部。

人気はあるんだがなあ……武部も……。

「私達、一度西住さんとお話してみたかったです」

「ふえ、そうなんですか？」

「なんかいつもあわあわしてて面白いんだもん」

「お、面白い……」

「うん（はい）！」

わかる（天下無双）

見てる分には面白い。

「あ、私はね……」

「武部沙織さん、6月22日生まれ」

「え？」

「五十鈴華さん、12月16日生まれ」

「はい♪」

「へえー、誕生日まで覚えててくれたんだ！」

「うん、名簿見てクラス全員いつ友達になっても大丈夫なように」

すげえな……俺は友達数人覚えてるか覚えてないかだぞ。

「やっぱ、西住さんって面白いよね！」

「そうだ！名前で呼んでもいい？」

「え？」

「みほって」

「すごい！友達みたい！」

テンション上がっちゃったのか渡された鯖煮定食を振り回すみほ。

「わ、わわわ！」

「「おおっと」」

倒れそうになったみほを武部が支え、落ちそうになったお盆を五十鈴が支えていた。

「嬉しいのはわかるが気をつけろよ」

俺はおばちゃんから特盛りのとんかつ定食を受け取っていた。

「なんか、荒谷君全然会話に入ってこないよね」

「女子高生3人の楽しそうな会話に割って入るような無粋な真似はしねえよ」

「すごく温かな目でこちらを見てらっしゃいましたね」

「孫の成長を感じるおじいちゃんみたいないな心境なんだよ」

「守矢君、それどういふことかな!？」

「も、守矢君!？みほって荒谷君のこと名前で呼んでんの!？」

「え、ええ!？そこそんなに食いつくところかな?」

「だって荒谷君だよ!？この学校でお隣のお兄さんにしたい生徒No.1の荒谷君だよ!？」

「なにそのピンポイント!？何してんの守矢君!？」

「いや、俺もしらねえぞ?」

「あらあら、でしたら私も守矢さんとお呼びしても?」

「話の流れをぶった切ってきたな……俺は別に変な呼び方じゃなきゃ構わんが……」

「では、これからは」

「はい!はい!はい!はい!私も!私も!」

「お、おう……」

この圧倒的圧力。

「でもよかったー、友達が出来て。

私、一人で大洗に引越してきたから」

上手いこと4つ席の空いてるテーブルを見つけそこに座る。

「俺はまさか大洗だとは思ってなかったけどな」

最近はこの高校も戦車道やってるし、そうでもないのか？

「そっかー、まあ人生色々あるよねー。泥沼の三角関係だとか、

告白する前に振られるとか、5股かけられるとか」

「流石に沙織さんと思うような事情じゃないよ……」

「高校生でそんな波乱万丈な生活お断りだろ」

「ではご家族に不幸が？骨肉の争いですか遺産相続ですか」

「華さんが思ってるようなことでもないかな……」

近い！近いが遠い！

「なんだ、じゃあ親の転勤とか？」

「……自分を変えたいから……かなあ……」

「「？」「？」「？」」

そら他人にはわからんよなあ。

特に戦車道がそこまで浸透していないここじゃなおさらだな。

「せっかくのあったかい飯なんだから冷める前に食った方がよくねえか？」

「あ、うん」

おしゃべりに夢中になるのもいいがご飯はちゃんと美味しく食べないとだからな。

俺達は昼ごはんを食べ終わると教室へ戻り談笑していた。

放課後にお茶して帰るのを女子高生みたいと言ったみほには涙が出そうになったが。

「二人共友達になってくれてありがとう」

「うん」

「こちらこそ」

仲が良いってのはいいことだ。

みほにはもっと積極的に友達を増やしてもらいたい。

そう微笑ましく3人を見ていると上級生が3人教室へと入ってきた。

「会長？」

「なんで生徒会が……」

上級生は我が大洗学園生徒会の3人。

会長の角谷の姐さん。

副会長の小山先輩。

それと……

「角谷の姐さん、小山先輩と桃ちゃん先輩連れて何か用か？」

広報の河嶋桃ちゃん先輩だ。

「ええい！桃ちゃんと呼ぶな！お前2年生だろ！もっと上級生を敬わないか！」

「響きが可愛いじゃねえか、桃ちゃん先輩って」

「ぐぬぬぬ……」

「荒谷ちゃん、かーしまで遊ぶのはそこら辺にしといてもらえるかな？」

「了解。で、うちのクラスに何の用だ？みんな驚いちゃってるんだが」

「あー、用事があるのはその西住ちゃんなんだよねー」

「みほに？」

「少々話がある」

「……はい？」

そう言って廊下に連れ出してしまった。

……なんだったんだ？

「西住ちゃんさあ……必修選択科目なんだけどさー」

私は廊下に半ば強制的に連れ出されていた。

「戦車道とってねー、よろしく」

……はい？

「えっと……この学校は戦車道の授業はなかったはずじゃ……」

調べて入学したから間違いない。

私はあえて戦車道のないこの学校に転校したのだから。

去年のあの出来事があってから、少し戦車道から離れてみよう思ったからだ。

戦車道を続ければ必ず「私とは違う西住流」が付いて回ることになる。

「自分の目指す西住流」を進むために必要なことはなんなのか。

色々な経験を積みれば少しはそれがわかると思ったから。

だから戦車道の関係ないこの学校へ転校したんだけど……。

「今年から復活することになった」

「私、この学校には戦車道がないと思って転校してきたんですけど……」

「いやあ、運命だねえ！」

「必修選択科目って自由に選べるはずじゃ……」

「とにかくよろしく」

バンツと背中を叩くと3人は行ってしまった。

そこには呆気にとられて何も出来ない私が残された。

みほが3人との話が終え戻ってきた時、何か様子がおかしくなっていた。

「次の問題、西住さん」

「……」

先生に当てられても何の反応も見せないみほ。

なにやら深く考え込んでる様子だ。

「……みほ!」

「ふえ?」

武部に声をかけられようやく反応を示す。

「どうしたの? 気分でも悪い? だったら保健室へ行きなさい」

「あう……はい……すみません……」

力なく立ち上がり教室を出て行くみほ。

またなんか難しく考えてんな? あいつ。

武部、五十鈴と目が合う。

（すまん、ちょっとみほの様子を見てきてやってくれねえか？）

（まかせて）

（お任せください）

（頼んだ）

「先生！私もちょっとお腹が……」

「私も持病の癪が……」

武部のはともかく五十鈴はもっと何か考えろよな……。

私が保健室で横になっていると、沙織さんと華さんも保健室へやってきた。

「今日は気分が悪くなる人が多いわねえ……静かに休んでね」  
先生が保健室を出て行く。

「……みほ」

「大丈夫ですか？」

「あっ……」

「いいよ、寝てれば」

「早退されるのであれば、カバンを持って参ります」

「沙織さん……華さん……ありがとう」

先生が立ち去ったのを見計らって二人が声をかけてくれた。

「一体、生徒会長に何言われたのよ」

「よかったら話してください」

私は先ほどの生徒会の人との話の内容を伝えた。

「なんで？みほになんか関係があるの？」

「みほさんが一騎当千のもののふとか？」

「えっと……実は私の家って代々戦車乗りの家系なんだ……」

「まあ」

「へえ、なんか意外」

い、意外ですか……。

「でも……色々あって……戦車道から少し離れたくてここに……」

「そうだったのですか……」

「別に戦車道が嫌いなわけじゃないんだけど……」

黒森峰戦車道<sup>前</sup>チームを急に抜けた手前、

すぐに他の学校で戦車道をやりづらいのも事実だし……。

でも、正直戦車に乗りたくはある。

自分で思ってた以上に私は戦車道が好きなんだ。

戦車に乗る割合が減ってからそう思い始めていた。

「そっか……じゃあ無理にやらなくていいじゃん！」

……え？

「やりたかったらやる、くらいでいいと思うけど？」

「そ、そうなのかな……」

「第一、戦車道なんて女子高生のやることじゃないよ」

そ、そこまで言いますか沙織さん……。

「そうですよ、もし生徒会にお断りをするのであれば、

私達も付き添いますから」

「……ありがとう」

なんていうか……すごく暖かい。

黒森峰じゃこういうのはほとんどなかったな……。

私は西住流師範の娘で西住みほではなかったから。

そういう意味ではエリカさんだけがちゃんとした友達だったかな。

そうこうしていると授業の終わりを告げるチャイムが鳴った。

「授業終わってしまいました……せっかく寛いでいたのに……」

そう言える華さんは大物だと思う。

「後はホームルームだけだね」

そう沙織さんが話していると、唐突にスピーカーからノイズが聞こえてきた。

「え、何？」

「全校生徒に告ぐ。体育館に集合せよ、体育館に集合せよ」

この声……確か生徒会の……。

「全校集会の予定なんかあったっけ？」

「確かなかったと思うけど……」

「とりあえず行ってみましょうか」

私と沙織さんと華さんの3人は保健室を後にし体育館へと向かった。

このみほはしほさんに啖呵切れるくらいには成長しているので、  
ぼんこつではありますが、内向的過ぎると言うことはありません。

黒森峰の外に守矢という相談相手がいたからこそ、

少しばかり成長を見せているってことですね。

なのですぐに沙織さん、華さんと名前で呼べています。

この話、視点がしょっちゅう変わってるけど、

変える前になんか書いたほうがいいんかなあ？

一応行間は開けまくってるけど……読みづらいよねえ？



## 22・悩んでいます！

何気なく初投稿です

---

放送で体育館に集められたと思っていたら……。

「戦車道……それは伝統的な文化であり、

世界中で女子の嗜みとして受け継がれてきました」

必修選択科目のオリエンテーションと言うのは名ばかりの、

戦車道の戦車道による戦車道のためのプロパガンダが行われていた。

「戦車道を学べば、必ずや良き妻、良き母、良き職業婦人になれることでしょう」

参考に来るのは母さん、しほさん、千代さんか……。

……この文面に関しては再考の余地があるな。

だが、なれるかもしれないくらいでとめておけば問題ない。

そしてでかでかと表示される選択科目の用紙のデザイン。

戦車道だけ目立ってんなあ……。

「数年後の日本で行われる予定の世界大会の為、文科省より

全国の高校、大学に戦車道に力を入れるよう要請があったのだ」

「んで、うちの学校も戦車道復活させるからね」

まあ、戦車道を復活させるのはわかるな。

今じゃ多くの高校もやってることだし、

戦車道での推薦や企業からのスカウトも珍しくないし。

世界大会があるのならなおさらだな。

「なるほどねえ……さっきのみほの表情の原因はこれだな」

間違いないな。

また去年みたいに深みにはまってんだな。

ふむ、ちょっとだけお節介でも焼いてみるか。

今日の晩にでもみほに連絡しておいて

おそらく明日生徒会室に呼び出されるだろうから、

色々と場を和ますための小道具を用意しておかなければ……。

……しかし、ちよいと引っかかることがあるな。

戦車道成績優秀者への特典はやりすぎてないか？

食券100枚と遅刻見逃し200日と通常の授業の3倍の単位だろ？

胡散臭え。

いくら角谷の姐さんと言えどこれはやりすぎだ。

そもそもこういうのって文科省じゃなくて、

高校戦車道連盟が言ってくるもんじゃないか？

それに今、戦車道をしていない学校に

いきなりやれて言っても無理じゃないか？

選手はまだしも車両どうやって調達するんだよ。

過去に戦車道をやっていた学校とはいえ、

パーツや車両は売却されたり譲渡されることがあるんだ。

そもそもこの学校に車両ってまだ残ってるのか？

……まさかなんか裏がある？

「……よし」

携帯を取り出しこっそりメールを打つ。

送り先…しほさん

件名 …文科省からの戦車道強化の要請

お久しぶりです。

ちよいとお聞きしたいことがあるんですが

高校戦車道連盟に対して

文科省辺りから高校・大学戦車道の

強化とかの要請ってありましたか？

はい、送信。

……ポコン。

しほさん返信早えよ。

~~~~~

差出人…しほさん

件名 ……(ﾐ)ﾉ・A・E)ﾅｲﾅｲ

お久しぶりですね。

なんですか？その文科省からの通達とは。

こちらにそういったものは来ていませんが。

~~~~~

はいダウト。

完全に裏に何かありますねこれは。

……いづれ角谷の姐さんからも話を聞かないとな。

その日の夜。

私は一人部屋で悩んでいた。

「……」

私の目の前には必修選択科目の用紙。

あの後、沙織さんと華さんは戦車道をやりたと言っていた。

華さんはアクティブなことがしたかったから。

沙織さんは男性は強くて頼れる女の子がモテるから。

……沙織さんはちょっとしただけのが外れてる気もするけど。

正直に言えば私も戦車には乗りたい。

戦車道をやりたい。

でも、今私が戦車道をやったら……。

「黒森峰の人が……いい顔はしないだろうな……」

あの学校から見れば私はいわば戦犯で裏切り者だ。

お姉ちゃんやエリカさん、赤星さんだけが私の本当の気持ちを知っている。  
そんな状態で私が大会に出たら……。

「どうしよう……」

私は……私は……。

「やってやる! やってやる!」

一人で悩んでいる時、携帯電話の着信が鳴った。

「……守矢君だ」

荒谷守矢君。

去年、私に少しだけ変わるきっかけをくれた人。

まさかこの学校に居るとは思わなかったけど……。

「……もしもし」

「よう、みほ。もう寝るとこだったらすまんな」

「起きてから大丈夫、どうしたの？」

「どうせ、今日の必修選択科目のことで悩んでると思ってな」

彼にはお見通しだったようだ。

「私どうしたらいいのかな……」

「やりたいならやる、やりたくないならやらないでいいんじゃないか？」

「沙織さんもそう言ってくれたけど……」

踏ん切りがつかない。

「なあ、みほ。何がお前の中で引っかかってるんだ？」

「それは……」

「大方、この学校で戦車道はじめたら黒森峰の連中  
何か言われるかもと思うてんだろ?」

「……うん」

「言わせとけばいいじゃねえか」

「え……?」

「向こうが勝手にお前を排斥しただけなんだから。」

「知らん振りしてやりたいことやればいい」

「で、でも……」

「んで、見せ付けてやればいいだろ。」

「お前らが追い出した私はこんなに強いんだぞって」

「それでいいのかな……。」

「マホもエリカも反対はしないだろ……もしかしたら逆に火が付くかもな。」

「一番の味方だったのが敵になるんだからな」

「そう言って守矢君は笑った。」

「だが、やりたくないのであれば話は別だ。

無理に戦車道をやる必要はねえさ」

それもまたお前の意思だ、と続ける。

「みほがどちらを取ろうが何も心配は要らないさ」

そう言って守矢君は一呼吸置いて、

「お前は間違っちゃいない」

小さい頃と同じ言葉で励ましてくれた。

翌日、朝のホームルームの前に私は生徒会に呼び出された。

「私達も行くから！」

「落ち着いてくださいね」

沙織さんと華さんも心配にだからと一緒にいつてきてくれた。

「さて、返事を聞かせてもらおうかな？」

「それよりなんでみほには強制的に戦車道を取らせようとするんですか！」

「そりゃ、戦車道に力を入れるから経験者が居た方がいいでしょ？」

「我が校、他に経験者は皆無です」

「終了です、我が校は終了です……！」

「勝手な事言わないでよ！」

「そうです、みほさんのやりたいようにさせるべきです」

「んな事言ってるってあんた達……この学校に居られなくしちゃうよ？」

「脅すなんて卑怯です！」

「脅しじゃない、会長はいつだって本気だ」

「そーそー」

「今のうちに謝った方がいいと思うよ？ね？」

「ひどい！」

……二人共、関係ないのに……私のために……。

私は……私は……！！

「こんな横暴、スペイン宗教裁判じゃないですか！」

ジャーーーーーーーーン!!!!!!!!!!!!!!

言い争う生徒会質に響く謎の効果音。  
そして勢いよく開かれる生徒会室の扉。

NまOさBかOのD時Yのeスxペpィeンcンtンsンtンhンe宗S教p裁a判nニiニsニhニIニnニqニuニiニsニiニtニiニoニnニ!!

何故か赤い衣装を着てハイテンションな守矢君がそこに居た。

ただ酔った勢いのまま書いたため文字数少なめ。

ネタはそこそこ。

だめだね、そんな状態で書いたら……。

結構古いところからネタを持ってきたが、

知ってる人はいるんだろうか……。

## 23・戦車道、始めます!

いつもの通り初投稿です。

よし、この場を完全に掌握したぞ。

後はもう、こっからは俺のステージだ! ってやつだ。

「俺の武器は突然の登場、そして恐怖……この二つ」

……ん? まてよ?

「さらに脅迫……ああ、だから三つだな。唐突・恐怖・脅迫」

……あれ? なんか足りなくないか?

「ネタへの異様な執着心信もあった。四つだったか……もとい!

一度立て直すことも重要だからな。

「俺の武器は、恐怖・唐突……ダメだ、やり直しだな。」

みほ、さっきの啖呵はよかったぞ。もう一回頼んだ」

俺は生徒会室の外へ出てみほのセリフを待つ。

「こんな横暴、スペイン宗教裁判じゃないですか！」

ジャーーーーーーーーーーーーーーーーン!!!!!!!!!!!!!!

それに合わせて携帯から効果音を鳴らし、  
勢いよく生徒会室の扉を開く。

完璧だ。

ここまでは完璧だ。

NまOさBかOのD時Yのeスxペpィeンcンt宗s教t裁h判e一S一p一a一n一i一s一h一I一n一q一u一i一s一i一t一i一o一n一u一

「俺の多様な武器は、恐怖・唐突・脅迫……

ネタへの異様な執着<sup>信</sup>心・赤い服」

……げ。

「またトチツた！」

今度は1個増やしちまった。

「このネタの習熟度が足りてなかったか……

いやむしろ足りすぎてしまっている？」

「たまーに荒谷ちゃんっておかしくなるよね」

「そうですか？むしろこれが守矢君の平常運転のような……」

みほ、2割程度はお前のためやぞ。

「え!? 守矢君ってこんな人だったの!?!」

武部、こんな人呼ばわりは失礼だぞ？

「守矢さん、一体何をしに来たのでしょうか……?」

五十鈴はいたって冷静だな。

「荒谷！勝手に入ってきて何が様だ！」

「まあまあ、怒るなよ桃ちゃん」

「桃ちゃん言うな!」

「今日、必ず角谷の姐さんがみほを呼び出すと思ったんだな。」

その返答に少し興味があつたからこうしてきたんだよ」

「えっと……じゃあ、荒谷君のその格好と今の一連の流れは……?」

「小山の姐さん、普通に入ったら面白くないでしょう?」

「面白いとかそういう話なのかな……?」

「そういう話ですよ」

強引に話を押し通す。

「んで、みほの返答は?」

「ええ!?!ここで私に振るの!?!」

「だって、みほが話さなきゃ話がすすまねえよ?」

「誰のせいでこうなったと思ってるのかな!?!」

……ゴルゴム?

「多分思ってることは違うからね!？」

ぷんすこ怒るみほ。

「ほれ、その調子で角谷の姐さんにも言ってしまえ」

こういうのは勢いも大事だからな。

「……うん」

そうしてみほは一步前に出て武部と五十鈴の方へ振返った。

「ごめんね、沙織さん、華さん。」

私の為にこんなに怒ってくれて」

「当たり前だよ!」

「友達ですから」

「……ありがとう」

そしてみほは生徒会長と向き合う。

「今の生徒会長の強引なやり方は正直好きじゃないです」

「ストレートだねえ」

「特にさっきのはあまりにひどかったので怒鳴っちゃいました」  
「こっちも引けない事情があるからね……で、答えは？」

「私は私の意志で戦車道をやります！」

……いいねえ。

私の意志ってところが特に。

生徒会室からみほ・武部・五十鈴が出て行き俺と生徒会の3人が残った。

「荒谷ちゃん、まだなんかあるの？」

「まあ、あるっちゃあるが……」

「なら早く言え、こちらも暇ではないのだ！」

「角谷の姐さんや小山の姐さんとはともかく桃ちゃんに言われたくはないね」

「だから桃ちゃんと呼ぶな！！！」

「落ち着いて落ち着いて……」

「でー、なーにー？」

とりあえずストレートに核心に迫るか。

「生徒に嘘ついてまで戦車道復活させて何したいんだ？」

「……嘘ってなんのことかな？」

普通の人にはわかりづらいが動揺したな?

「文科省から戦車道強化の要請ってのに引っかかってな、

ちよいと知り合いの高校戦車道連盟の人に話を聞いたんだよ」

(嘘は言って) ないです。

「そしたらそんな要請はないって話だ、こりやおかしいと思ってね」

さあ、どうでる……?

「いやゝ実はさゝ、生徒会の来年度予算ががつり減らされそうなんだよねゝ」

「……は?」

「ほら、ちよつとここ数年色々イベントやっちゃったじゃん?」

「まあ……姐さんが生徒会長になってから派手にはなったよな」

「金かけすぎだって理事長から怒られちゃってさゝ」

「へえ……それで？」

「ここで一発生徒会主導で戦車道を復活させて、

初出場初優勝なんかしちゃえばそれも撤回してもらえるかなって。

ほら、流石に来年の生徒会が可哀想じゃん？」

「……まあ、とりあえずそれで納得しとこうかね」

わかりやすい嘘をつくものだ。

そもそも来年度予算なんて今年一杯で任期の終わる

角谷の姐さんには関係ないことだろう？

次の生徒会のためと聞けば聞こえはいいが、

別に来年度の生徒会の連中に理事長が釘を刺せば済むことだしな。

これ以上は聞くなっただろうな。

「それと、ちょっとしたお願いがあるんだが……」

「ん〜?」

「俺もその戦車道を履修することは出来るのか?」

「そういえば、戦車道に興味があるんだっけ?」

「そうなのか?」

「親が戦車道関係者なんだってさー」

「力仕事なんかも手伝えると思うぞ」

これもまた嘘はついていない。

「そうだねー……少しでも戦車道を知ってる人が居ると助かるしオツケー!」

「いいんですか? こいつは男ですよ?」

「少なくとも桃ちゃんよりは戦車道に詳しいからな?」

実力も、ね。

「桃ちゃん言うな!」

「まあまあ……男の子がいれば助かる部分もあると思うし」

「さっすが小山の姐さん、話がわかる」

男子からのやっかみを受けるかもしれないが、

正直戦車に触ってられるんならそれくらい我慢できる。

「じゃあ、荒谷ちゃんも戦車道を履修するということでしょう……」

そう言うのと、角谷の姐さんの目が妖しく光る。

「どうにも西住ちゃんと荒谷ちゃんが妙に仲がよさそうに見えてねえ」

「ん？ ああ、うちの両親がみほの両親と仲がよくてさ。

その兼ね合いで一緒に遊んだことが合ってたな。

それからちよくちよくメールなんかしてたんだよ。

遊んだって言うっても小学校の時くらいだったか」

「ほんとにそれだけ？」

「それだけだな」

去年の夏のことまで言う必要はねえだろ。

「ふーん……まあいいや、じゃあ戦車道の授業の時に

ちゃんと車庫まで来てねえ、よろしく」

ひらひらと手を振る角谷の姐さん。

ああ、授業が楽しみだなあ……。

数日後、戦車道の初授業。

「思ったより集まってねえな」

俺が来たときには既に履修者が全員集まっていた。

「会長、全部で18人です。私達を入れて21人プラス今来た守矢君です」

「小山の姐さん、プラス扱いつてのは悲しいぜ」

「しゃーないよ、荒谷ちゃんも試合に参加できないんだし」

「悲しいなあ……」

乗りたいなあ……いや、絶対乗る。

その為に、この授業選択したんだし。

しかし、見事に女子ばっかだな……。

みほ達3人、松本・杉山・鈴木・野上の歴女、

磯部と後輩3人のバレー部？、6人組の仲良しグループ。

後、遠巻きにみほと俺に熱視線を向けてくる癖っ毛の女の子。

個性爆発してんなあ、この学校。

「あれ？なんで守矢君がここにいるの？」

みほが俺に気づいたようだ。

「俺も戦車道を選択したからな。

ああ、ちゃんと角谷の姐さんの許可は取ったぞ？」

「守矢さん、戦車道がお好きなんですか？」

五十鈴が俺に問いかける。

「まあ、親が関係者ってのもあるけど俺は好きだぞ。

見るのもやるのも」

「いや、見るのはわかるけどやるって……。

守矢君、どっからどうみても男じゃん」

武部の意見もごもっともですな。

「えっと……守矢君って実は……」

みほが二人に話しかけようとしたが、その声は桃ちゃんによって遮られた。

「これより、戦車道の授業を開始する」

お、決まってるねえ桃ちゃん。

「戦車道履修者はひとまずこれで全員となる」  
もうちょっとくらい人数が欲しかったなあ。

「あ、あの……」

おずおずと1年生の子が手を挙げる。

「何だ？」

「な、なんで男の人がここに……?」

「ああ、こいつは雑用みたいな扱いだ。

お使いでもなんでも好きに言って貰ってかまわん」

「桃ちゃん、俺パシリじゃねえよ」

「うるさい！」

「荒谷守矢だ、力仕事なんかは俺に任せてくれ。

戦車道についてもぼちぼち知ってるから、

色々聞いてくれて構わねえよ」

「わ、わかりました……」

「他には？」

「あの、戦車は？ ティーガーですか？ それとも……」

お、あの子は多少なりとも戦車について知ってるようだな。

「えーとなんだたっけな……」

「姐さん、車両も存じ上げてねえのかよ」

「いやあ、ちょっと資料見たただだからさあ。

見てもらえば荒谷ちゃんならわかるでしょ!」

そういつてガレージの重い扉を開く。

そこにはよく知っている1台の戦車が鎮座していた。

「なにこれ……」

「ぼろぼろ」

「ありえな〜い」

「侘び寂で宜しいんじゃ」

「これはただの鉄錆び」

ひどい言い様だ。

俺はみほと顔を見合わせた。

「みほ、俺はこっち側をチェックするから反対側を頼む」

「わかった」

各部を軽くチェックしていく。

錆びちゃいるが……大丈夫そうだな……。

「……ん？」

砲塔側面に大洗の校章とは別のペイントを見つけた。

「箒星のペイント……」

見覚えがある。

ある人物が自分の搭乗する戦車に必ず書く下手くそな落書き。

「これ……母さんの乗ったIV号だ」

間違いない、今も自分の乗る戦車にはこの落書きをしているから。

「まだ……戦えるよな……?」

そう言うのと、触っている部分がほんのりと熱を帯びた気がした。

こちらは問題ない、とみほに頷く。

「装甲も転輪も大丈夫そう……これでいけるかも」

後ろの女子から「おぉー」と声上がる。

「でも、こんなボロボロで何とかなの?」

「武部、今はボロボロに見えるがレストアすればこいつは期待に応えてくれるぞ」

「みほー、大丈夫なの?」

「……多分」

「それに1両しかないじゃん?」

「この人数だと、5両くらいは必要だな」

戦車の種類にもよるが。

「じゃあ、みんなで戦車さがそっか！」

角谷の姐さんがとんでもないことを言いやがった。

「どういうことですか？」

「いやゝ、昔この学校も戦車道してたんだけどね、

その時使っていた戦車がまだどこかにあるはずなんだよねゝ」

姐さん適當すぎねえか？

「明後日、戦車道の教官がお見えになる。

それまでに残りの4両を見つけ出すこと」

桃ちゃん急すぎねえか？

「して、一体どこに？」

「それがわかんないんだよねゝ」

「な、何も手がかりないんですか？」

「なゝい！」

あー、もうめちゃくちゃだよ……。

「では、搜索開始!」

桃ちゃんの一言で生徒がそれぞれ文句を言いながらも搜索に向かった。

頑張っ  
て書い  
ていま  
すです。



## 24・戦車、探します!

やっぱり初投稿です。

「どこに戦車があるって言うのよー!!!!!!」

明後日来るかっこいいという触れ込みの教官に釣られた武部が叫ぶ。

そもそも戦車道の教官なんだから女性じゃないか……?

そこまで考えが回ってないとは……やはり残念女子。

「駐車場に戦車は止まってないかと……」

各グループで戦車を搜索しているのだが、

俺はその中でみほたちのグループと一緒にいた。

「守矢君、私達と一緒によかったの?」

「1年のいるグループにいきなり入るわけにもいかんし、

鈴木達は同学年だが連中の対応は正直めんどくさい」

「いろいろあるんだね……」

「関わっていくうちにわかってくるさ」

選手間のコミュニケーションは大事だからな。

「じゃあ、裏の山林に行ってみよ！何とかを隠すなら林の中って言うしね！」

「それは森です……」

ポンコツ武部と五十鈴さんが先行する。

「俺達も行くか」

「うん」

それに続こうとするが、

「……」

木の陰からこそこそと誰かが付いてきている。

さっき、戦車の種類を桃ちゃんに聞いてた子だな。

（みほ、あの子ずっと付いてきてないか？）

(そうみたい……どうしたのかな?)

(一緒に探したいんじゃないか? 本人に聞いてみなよ)

(ええ!?)

(同じ戦車道チームなんだ、勇気出してみほから一歩踏み出してやれ)

(う、うん……)

「あ、あの!」

意を決して、みほはその子に話しかける。

「はいい!」

驚きすぎじゃねえか?

「よかったら、一緒に探さない?」

「いいんですか!？」

おっと、テンション爆上がりだ。

「あ、あの……普通Ⅱ科2年C組の秋山優花里と言います」

普通Ⅱ科か、道理で知らんわけだ。

「えっと……不束者ですが、よろしく願います！」

「こちらこそ願います、五十鈴華です」

「武部沙織〜！」

「あ、私は……」

「存じ上げてます！西住みほ殿ですよ〜？」

「あ、はい……」

戦車に興味があるんならみほの事知ってもおかしくないか。

この感触なら悪い方向ってわけでもないだろうし。

「俺は、さっき自己紹介したし大丈夫だよな？」

「ええ！以前から存じ上げておりました！」

……以前から存じ上げておりました？

なんか言い方が妙だ。

自己紹介する以前より知っていたような言い方だ。

「では、よろしく願います！」

秋山はびしっとしたい敬礼を見せた。

「しっかし、裏の山林も広いよなあ」

俺達は武部の言う通り校舎裏の山林を探していた。

「……あら？」

先頭に行く五十鈴が急に立ち止まる。

「どうかした？」

武部が五十鈴にそう聞くと、

五十鈴は何かを鼻で探っていた。

「あっちから匂いが……」

匂い？

「花の香りに混じってほんのりと鉄と油の匂いが……」

「匂いでわかるんですか!？」

これには秋山もびっくり。

「華道やってるのそんなに敏感になるの!？」

武部も驚いてるな。

「私だけかもしれませんけど……」

「いやいや、案外人の能力ってのはバカに出来ないからな。

手がかりがない以上五十鈴を信じてみてもいいんじゃないか？」

「では、パンツァー・フォー!」

五十鈴の進む方向を指差す秋山。

「パンツのアホ!？」

何言ってるんだこいつ……。

「パンツァーフォー……戦車前進って意味なの」

「まあ、普通は聞かねえ言葉だな。

っと、五十鈴見失っちゃうぞ」

匂いを辿るように進む五十鈴。

「……お？」

しばらく歩くと遠くに黒い影が見えた。

「やった! あった!」

「すげえな、五十鈴」

そこには投棄された戦車があった。

「38 (t) ……」

「なんかさっきのよりちっちゃい……、

ビスだらけでぼつぼつしてるし」

「38 (t) といえば、ロンメル將軍の第7装甲師団でも主力を勤め、初期のドイツ電撃戦を支えた、重要な戦車なんです」

秋山の説明が止まらない。

好きなんだなろうなあ、戦車。

「はっ！」

我に帰る秋山。

「今イキイキしてたよ……」

「す、すみません……」

しょんぼりして謝る秋山。

「いや、謝る必要はねえんじゃないか？

好きなことに熱中できるってのは良い事なんだから。

したくてもできない人もいるだろうしな」

俺とかな。

「守矢君……」

みほは何となく察したようだ。

「それに、一瞬でそれだけの情報を出せるんだから、

他にもいろいろなこと知ってるんだろ？」

「えっと……皆さんが思ってるほどじゃないかもしれませんが……」

「俺やみほはこの車両の名前を知ってはいるが、

そこまで細部まで知ってる訳じゃない。せいぜい武装くらいだ。

五十鈴や武部に関しては初心者らしく名前すら知らないんだぞ？」

情報ってのは宝だ。

パッと見ただけでそれだけ引き出せるってことは、

相手にとっては脅威になりえるんだ。

「その知識は絶対に今後の役に立つはずだ」

「そ、そうでしょうか……」

「とりあえず桃ちゃんに発見の報告だけしとくかね」

俺は桃ちゃんの携帯にコールする。

「見つかったか？」

「校舎裏の山林に1台見つけたぞ」

「運搬は自動車部に依頼する、引き続き搜索を続行せよ」

「あいよ」

通話を終え電話をしまう。

「こいつは自動車部が回収してくれるってよ、他の探しに行くぞ」

「えゝ、まだ探すのゝ？」

「沙織さん、頑張りましょう」

「とりあえず、一回校舎の方に戻ろっか」

武部、五十鈴、みほが来た道に戻っていく。

「あ、あの！」

「どうした？なんか見つけたか？」

秋山が不意に声をかけてきた。

「先ほどはありがとうございます」

「なに、本当のことだからな」

「それと、少し聞きたいことが……」

「ん? 何だ?」

「あ、荒谷殿はもう戦車には乗らないのですか!？」

「……乗らない、とは?」

さっきの言葉もあるし多分……。

「小学生ながら社会人チームの砲撃手を務めその撃破率はトップクラス!

中学生に上がってからは戦車道のある学校を渡り歩いてその力を見せつけ、  
いろんな強豪校からスカウトがあつたとか!」

多分じゃねえ! これ詳しく知ってるやつだわ!

「人違いじゃねえか?」

「いえ! 一度、荒谷殿の試合を拝見したことがありますので!」

「え、見たことあるの? 俺の出た試合……」

「はい！」

ひ、非公式だからそんなに観客とかいないはずなんだけど……。

それに戦車道が好きだからっておいそれと見れるようなものじゃ……。

「私の母親が荒谷殿のお母様と知り合いでして、

その伝手で一度拝見したことがあります！」

マジかあ……世間は狭いな……。

「一発も外さない砲撃には感動しました！」

目がキラキラしている。

「よ、良かったのなら幸いだよ」

「それで、是非もう一度……今度は間近でそれを見見たかったのですが……」

「どうだろうな……公式の場では絶対に乗れないしな……。

俺が戦車に乗るのを良く思わない人がいるのも事実だからさ」

「荒谷殿は戦車に乗るのは……嫌ですか？」

「いや……今でも戦車に乗りたい気持ちはあるよ」

あんなに楽しいことを俺は知らないからな。」

「そうだな……角谷の姐さんにでも頼んでみるか」

姐さんは俺が戦車に乗ってたってことは知らないようだけど。

あの人だから嫌な顔はせんだろ。

……代わりになんか要求されそうだが。

「それなら秋山にはその時の装填手にでもなってもらおうか」

「いいんですか!？」

そこまでテンション上がることかね？

「その為には、今出来ることをやっていかないとな。

ほら、探しにいくぞ。みほ達に置いてかれる」

「了解であります！」

うむ、良い返事だ。

その後、1日搜索し発見したのは車庫にあったIV号中戦車D型と、俺らが見つけた38(t)軽戦車の他に、

バレー部？が崖の洞窟内で見つけた八九式中戦車甲型を、

歴女達が池での底でIII号突撃砲F型を、

そして1年生がウサギ小屋で放置されたM3中戦車リーを見つけていた。

その日は時間も遅くなり自動車部の回収もあったので解散となり、

翌日、戦車倉庫前に車両の洗車のため再度集合した。

なお、搭乗する戦車に関しては、38(t)を生徒会の3人が、

IV号戦車はみほ達のチームが、それ以外は見つけた車両に搭乗することとなった。

「うわっ！ベタベタするー！」

「これはやりがいがありそうですね」

まあ、放置されてた車両だしな……。

「これじゃあ中も……」

とんとんと戦車を上っていく。

「おお、流石」

「武部もこんくらいならすぐに出来るようになるさ」

俺も同じく戦車を上っていく。

「どうだ……って聞く必要もねえなこりや……」

車両の中はひどい臭いと状態だった。

「うう……車内の水抜きをして……錆取りをしないと……」

「塗装のし直しとグリスアップも追加だな」

他の車両の確認しては見たがどれもこれもひどい状態であった。

「こりゃ、今日一日使わなきゃ無理だな」

早速洗車に取り掛かるう。

が、ここで重大な事実に気づく。

「なあ、姐さん。俺も一緒に洗車に参加していいんだろうか？」

「ん？どったの？」

「いや、小山の姐さんみたいならいいんだけどさ」

「なに？小山の水着に欲情でもしちゃった？」

「ええ!? 荒谷君！ダメだよ！」

「一概に違うとも言えないのが男の悲しいところではあるが、重要なのはそこじゃないんだよなあ……」

「じゃあ、どういうこと？」

「洗車ってことは水を使うだろ？」

「使うねー」

「見る限り、みんな体操服だろ？」

「まあ、汚れてもいいからねえ」

「……濡れたら透けねえか？」

絶対透ける。

正直眼福だと思う自分もいるが、その後を考えると

これは事前に通告しておくべきだと俺は思う。

ただでさえ、女生徒ばかりなのに、そんなことがあってみる。  
話しかけづらいどころか総スカンだぞ。

「あー、じゃあ荒谷ちゃんは車両内の掃除だけやってねー」

「了解した」

「後、戦車の外に出る時は必ず声をかけることー」

「わかった」

その日の授業時間のほとんどは戦車の中の清掃だけ。

暑い上に大変だったが何とか全車両終わらせることが出来た。

その後、秋山の提案にせんしゃ倶楽部に寄る事となった。

「こんな店あるんだー」

「この学校にはなかったから触れることは少ないだろうけど、戦車道にも結構ファンがいるからな」

「私もその一人です！」

お店の中には、書籍や戦車の模型。

パンツァージャケットのレプリカなども売っていた。

「お、これうちの母さんの着てた奴じゃん。まだ実家にあるぞ」

ジャケットのコナーの1着を手を取った。

「これ数年前の日本代表のジャケットだよね？」

同じく店内を見ていたみほが声をかけてくる。

「ああ、結局1度たりとも着なかったみたいだね」

車長じゃないから大丈夫でしょ！とか言ってたな。

「そう言えば、黒森峰の中等部に来たときも違ったよね？」

一応、教官をする人たちには連盟からジャケットが配られていたようだ。

まあ、受け取った日に押入れに投げ込んでいたのだが。

「私が着るジャケットはこれだけって言ってるからな」

「何のジャケットなのかな? 守矢君知ってる?」

「さあ? 昔から持ってたから学生の時のとかじゃねえか?」

俺も詳しくは知らないが、これを着ると負けられんという気持ちになると、本人は語っていた。

「次は、戦車道の話題です。高校生大会で昨年MVPに選ばれて、国際強化選手となった、西住まほ選手にインタビューに行っております」  
店内に設置されたテレビから聞き覚えのある名前が聞こえた。

「あ、お姉ちゃんだ」

夕方放送番組での1コーナーの生インタビューに、まほが出演しているようだった。

「へえ、これがみほのお姉ちゃんなんだ」

「みほさんと似ているような、似ていないような……」

「そっくりだぜ？特にここぞという時以外でのぽんこつつぷりは」

「も、守矢君!？」

「い、意外です……何でもできる人だと思っていました……」

まあ、そう見えても仕方ないな。

そういう風にわざと見せてるものもあるし。

「戦車道の勝利の秘訣は？」

「諦めない事、そして……どんな状況でも逃げださないことですな」

おお、かっこいい事ってんなあ！

「かっこいいなあ……お姉ちゃん」

まあ、こういうのはまほが向いてるからな。

プロフェッショナルって感じだからな。

「あー、西住選手は女子・男子問わず人気のある選手ですが、好みの男性のタイプはどんな人でしょう?」

スタジオの出演者がちよつと下世話な話題を振る。

視聴率のためとはいえ、まほがちよつと可哀想だな。

プライベートすぎて答えづらいだろ、この質問は。

「戦車道において同じチームであれば、絶対に勝たせてくれる男性ですね」

あつさり言う辺り流石まほだとは思う。

「勝たせてくれるとは、健康管理やコンディションの調整など日々のサポートの出来る方ということですか?」

「いえ、言葉通りの意味です」

……ん？

「となると、戦車乗りですか？」

「そうなりますね」

あ、あれ？

「男性で戦車に乗っていて西住選手にそのような言葉をかけてもらえる男性なんているのでしょうか？」

「一人。たった一人だけ」

みほからの視線が痛い。

なんだ、俺はまほが言うような有能な人間じゃないからワンチャン……。

「またまた、冗談もお上手ですねえ」

「ご想像にお任せします」

「では、現場からは以上です」

番組は次のコーナーへと変わった。

「……お姉ちゃん」

何というか、すごい表情だ。

「みほのお姉さん全国放送ですごいことしてない!?

あぁ、あんなことの言える女になりたい!」

……やめたほうがいいと思うんだがなぁ。

「しかし、男性で戦車道がそこまで上手な方はいるのでしょいか……」

「ど、どうだろうな、全国探せばいるんじゃないか?」

「(キラキラキラ……)」



~~~~~

はあ……まだ言うか……。

俺よりいい奴なんてそれこそいっぱいいるってのに……。
溜息が出る。

場の空気がほんのり重たくなる。

主に俺が重くしているのだが。

「あ、そうだ！」

武部がそんな状況を見て助け舟を出す。

「これからみほの家に遊びに行ってもいい？」

「私もお邪魔したいです」

「うん！」

「あの……私もお邪魔していいでしょうか……」

「もちろん！」

「そうだ、ついでに晩御飯作って一緒に食べようよ！」

「いいですね」

「楽しそうです！」

ちよっと前の空気が嘘のように明るくなった。

（助かった、すまんな武部）

（いい女はこういふときに出来る女だからね！）

アイコンタクトで武部と会話する。

が、これがないやいい女なんだろうけどなあ……。

「んじゃ、俺は帰るわ」

「あら、守矢さんはいらっしやらないのですか？」

「いや、みほん家だろ？」

さすがに厳しいって……。

「えー！ 守矢君もみほの家行こうよ！」

「いや、男が女の子の部屋に行くのはなあ……」

「守矢君なら別に大丈夫だけど」

いや、少しは拒否の姿勢を見せようや……。

「久しぶりに守矢君のご飯が食べたいんだけどな？」

む!?

「守矢君、ご飯作れんの!？」

「バカにするなよ武部、こちとら小さい頃から家の食卓を守ってるんだぞ」

「西住殿、荒谷殿の料理の腕前ってどうなんですか？」

「少なくとも、私よりは全然上かな……悔しいけど」

「守矢さんのご飯食べてみたいです」

「そこまで言うんだったらしゃーねーなー！」

ほんと、しょうがねーなー！

「露骨にテンションが上がったよ……」

「守矢君、こういうこと大好きだから……」

「守矢殿も、会ってみると思った人と違うんですね……」

「楽しみです」

「みほ、冷蔵庫のストックを早く教えるんだ。

足りない材料は買いに行くぞ！」

自分で作って食べるのもいいんだが、

やっぱり誰かに食べてもらって感想は欲しいからな。

だからしょうがないよな!

ボクは白飯と白飯の進む何かがあればそれでいいです。

みほの出身地が熊本なので熊本県に縁のある人のネタをぶち込んでおります。
わかりやすいと思うけどネ!

25・戦車、乗ります!

いつも初投稿です。

みほの案内で女子寮へとやってきた。

「なんだ、みほの住んでるところってここなのか」

「守矢君の家も近いの?」

「近いって言うか……あそこだ」

俺は寮の正面にある古びた一軒家を指す。

「大洗は男子寮ってのはなくてな。」

学校が指定した家に住むことになってんだよ」

ちなみにここは男子生徒の間ではものすごく倍率の高い物件だった。

そりゃ女子寮の近くだもん。

じゃあ、何故俺が住むことになったのかというと、

「荒谷ちゃんなら問題も起こさないだろうし、

逆に女子が何でも頼みに行けばいいじゃない？水道トラブルとか。生徒会の権限で荒谷ちゃんを住まわせることにするからねー」

俺はなんでも屋じゃないんだが。

そんな角谷の姐さんの一声で俺が住むことに。

そもそも女子寮にわざわざ近づくことなんてないから、別にどうでもいいんだがね。

ただ、学校から近いのはすごく助かるんだよね……。。

「となると、俺がみほの家に行こうか

みほ達が俺の家に来ようがほぼ変わらないのか」

「今日はみほの家で、今度は守矢君の家ということで！」

「いずれにせよ来る気なのか……」

「男性のお部屋は初めてですし楽しみですね」

「五十鈴、お前もか」

「では、西住殿のお部屋に行きますか?」

「うん、じゃあこっちだよ」

そう、みほが案内しようとする。

「あー、俺は1度家に帰っていくことにする」

「どうして?何か忘れ物?」

武部よ……ちよつとは気を利かせろよ……。

「俺にだって異性に見られたくないものがあるんだから、

みほにだって見られたくないものの一つや二つあるだろ……」

洗濯物が干してあったら、どう反応したらいいんだよ。

「大丈夫になったらメール送って、下まで降りてきてくれると助かる」

「う、うん……わかった」

「んじゃ、また後でな」

俺はとりあえず一度我が家へと戻った。

「お邪魔します」

「どうぞどうぞー」

少ししてから連絡があり、みほの部屋へと案内された。

「ふむ、ボコだらけでいい部屋じゃねえか」

「そうですよ！」

案の定と言うべきか、実家の部屋同様ボコがたくさん並んでいた。

「そうだ、引っ越し祝いにこれやるよ」

俺は家から持ってきた紙袋を手渡す。

「うわぁ！福岡限定の明太子カラーボコだ！」

袋の中からはピリ辛カラーのボコが出てきた。

「最近出たやつで通販で買ったんだが、

懸賞で応募してたのも当たっちゃって2個あってな」

「ありがとう！」

鼻歌交じりでボコを飾るみほ。

うむ、渡してよかったな。

「よし！守矢君もきたし作るか！」

「ちなみにこの中で料理の出来るのは？」

武部とみほが手を挙げる。

「五十鈴は？」

「花しか切った事がないので……」

「秋山はそのカバンから取り出した野営道具を片付けような」

「ええ、これで色々出来るんですよ？」

「室内で飯ごうでご飯を炊く必要はねえよ？

そもそもなんで一式持ってんのよ」

「いつでもどこでも野営できるようにです！」

「みほの家を使わせてもらうのでみほは休んでもらうから、

……やるぞ、武部」

「おっけー！」

そう言つて、眼鏡をかけだした。

マジか……まさか武部に不意打ち食らうとは。

「……コンタクトだったのか」

「いつもはね、家とかだと眼鏡の方が楽だからね」

「そうだったのか」

「眼鏡がどうかしたの？」

「別に眼鏡がどうこうって訳じゃないが」

「なににー？眼鏡をかける仕草にドキッとした？」

からかう武部。

「不覚にも少しな、眼鏡もなかなかじゃねえか」

「あ、うん……そうなんだ……」

照れるな、黙るな、俺が辛い！

「いいから作るぞ」

「そ、そうだね！」

強引に話題を変えてしまえ。

「何を作る気なんだ？」

「定番の肉じゃがかな？ 後何品かは作るけど」

「了解、作るもん教えてくれりゃこっちで

下準備やら何やら受け持つぞ」

「じゃあ、まずはこのジャガイモの皮を……」

俺と武部は手早く晩御飯の支度を勧めた。

「はいよ、お待ちどうさん」

肉じゃがとから揚げ、蛤の酒蒸しを机へ運ぶ。

「いやー、守矢君の手際の良さが半端じゃなかった」

「そんなにですか？」

「それなりに勉強して料理が出来ると思う私が嫉妬するレベル」

「何言ってるんだ、これ作ったのほとんど武部じゃねえか」

俺は手伝っただけだからな。

最初は、俺も途中でなんか作ろうかと思ったんだが、

予想した以上に武部の料理の腕は良く、

この際だからと色々なものを教えてもらうために

裏方に徹することにした。

「みほ、机借りていいか? 俺はそっちで食うわ」

「うん、使って大丈夫だよ」

俺は自分の分をみほの机へと運ぶ。

「「「いただきます!」」」」

全員きちんと手を合わせて食べ始める。

こういうのは大事だよな。

「しかし、この肉じゃがうめえな」

味付けはほとんど武部にやってもらった。

ついでに手伝いながら味付けや隠し味なんかを教えてもらうことに成功した。

これで我が料理のレパートリーにまた1ページ……。

「いやあ、男を落とすにはまず肉じゃがだからね」

「落としたこと、あるんですか?」

「何事も練習でしょ？」

「と言うか、男子ってほんとに肉じゃがが好きなんですかね？」

「守矢君はどう思う？」

そこで俺に振るか、みほよ。

何答えても間違いな気がせんでもないんだが……。

「料理の腕がそこそこ必要で手間がかかるからじゃないか？」

今は万能だしなんかがあつて簡単にはなつたが、

昔は調味料のさじ加減で味が決まつてたからな。

そこいらを上手く調整して、さらにきちんと全体に味を

染み渡らせる必要があるからな」

俺の予想だけどな、と付け加える。

「手間のかかるものを美味しく自分のために作ってくれる。

それに肉じゃがの作り方についていろんな調理工程を踏まえるから、

これが美味しく出来る。料理が上手って図式になったんじゃないか？」

ただ、現代の世の男性が肉じゃがが好きかつて言われると、

自信はないな……俺も違うし。

「ちなみに、守矢君は何を作ってもらいたい？」

「俺か？」

女子全員が注目する。

「そうだな、俺のために作ってくれるんなら何でも嬉しいぞ」

「違う！守矢君違うんだよ！そこはバチつと言ってもらわないと！」

食い気味だなあ、武部。

「とは言ってもなあ……基本的に好き嫌いねえんだよな」

「一個くらいないの!？」

「そうさなあ……鉄板ナポリタンかなあ……」

「なにそれ？」

「アンツィオにあんだよ、そういう料理が」

「私が去年作ったやつだよね？」

「え!?!みほって守矢君に手料理作ったことあるの!？」

「ちょっと状況が特殊だったけど……」

まあ、千代美さんの鉄板ナポリタンを超えるものには出会ってないんだがね。

「しかしパスタか……」

パスタ……ドーム……ティーガー風……。

うっ、お腹が膨れる！

「ちなみに、守矢君は作れるの？」

「みほに教えたのは俺だからな」

「じゃあ今度作ってよ！」

「機会があればな」

その日、みほの家で食べた夕食は大変にぎやかで楽しいものとなった。

翌日、今日は初めから戦車道の授業のため早めに登校しようとしていた。

「あ、守矢君おはよう」

「おはよう、朝はこの時間なのか？」

「早めに行こうと思って」

玄関を出てしばらく歩くと登校中のみほに出会った。

そのまま二人で登校していたのだが……。

「……はあ、今日もまたダメだったか」

目の前をふらふら歩いている人物に溜息が出る。

「だ、大丈夫ですか!？」

心配して駆け寄るみほ。

「辛い……生きているのが……辛い」

「ええ!？」

「だが……行かねば……」

みほが肩を貸す。

このまま冷泉に付き合つてると早めに出たとはいえ、
みほの力じゃ無理だな……。

「冷泉、これじゃ授業にすら間に合わんぞ」

「おお……荒谷の知り合いだったか……」

「守矢君、知ってるの？」

「冷泉麻子、学年トップで武部の幼馴染だ」

「学年トップ!？」

「とりあえずいつも通り運ぶぞ、いいな？」

「……すまない」

そう言つて俺は冷泉の前にしゃがみこむ。

「ほら」

「ん……」

冷泉はしゃがみこんだ俺に全体重を預け首に腕を回す。

その冷泉をそのまま背負う。

「さてと、遅刻はしちまうが真面目に学校に向かうとするか」

「え、そのまま行くの?」

「じゃねえと、冷泉の力が尽きちまうからなあ」

「……すまない」

「みほは先に言ってくれて構わんど、俺はどうせ雑用だしな」

「そういうわけにもいかないかな……あ、冷泉さんと守矢君のかばん持つよ」

「いいのか?」

「うん、このまま学校に行っても気になっちゃうし」

「そうか……なら一緒に風紀委員に怒られますかね」

俺はみほと一緒にゆっくりと学校へ向かった。

「冷泉さん、あなたこれで連続245日の遅刻よ！」

「やべえな、ある意味尊敬するぞこの記録」

「荒谷君、尊敬なんてしなくていいの！」

「でも、それだけ頑張って学校には来ようとしたってことじゃねえか」

「間に合わなきや意味ないじゃない！」

「そど子……」

「何か言った？」

「別に……」

校門では風紀委員の園先輩が立っていた。

「荒谷君は甘いだよ、いつもそうやって背負ってくるじゃない」

「いつもじゃねえよ、見かけたときだけだ」

「ほぼ毎日じゃない!」

「まあ、通学路だからな」

さすがに俺も待ったり探したりはしない。

頑張って冷泉なりに早く登校したときだけ時間が合うので、

その時は手伝ってやっている。

……いろんな事情は知ってるしな。

「西住さん、今度から冷泉さんを途中で見かけても先に登校するように」

「は、はい……」

園先輩のありがたい説教を受けて校門をくぐる。

「悪かった……」

「気にすんなよ、俺も朝つらいときがあるしな」

「冷泉さんこそ大丈夫ですか?」

「……いつか借りは返す」

そういつて冷泉は下駄箱へと向かった。

「俺たちもさっさと車庫に向かうか」

「うん」

みほと共に足早に車庫へと向かった。

「お二人とも遅いから心配しました……」

「寝過ぎしちゃって……」

「戦車道が楽しすぎて寝られなくて……」

「二人とも小学生じゃないんだよ!？」

とりあえず、冷泉のことは伏せておき適当にごまかしておいた。

そうこうしていると遠くのほうから輸送機が轟音を響かせやってきた。

「なあ、みほ。どうやって着陸する気だと思う?」

「えっと……無理じゃないかな……?」

「奇遇だな、俺の答えもそうなんだ」

そのまま見ているとどうやら後部ハッチが開いたようだ。

「なあ、みほ。どうやって戦車をここに持つてくると思う?」

「パラシュートつけてそのまま降下……だと思っ」

「偶然だな、俺の答えもそうなんだ」

その言葉通り、輸送機から戦車が降下してきた。

が、勢いがつきすぎて学園長のスポーツカーに戦車が直撃。

当然スポーツカーは横転した。

「学園長の車が！」

「あー、やっちったねー」

さらに、何を思ったか戦車はそのままバック。

止めといわんばかりに車を踏み潰した。

「なあ、みほ。俺さ……角谷の姉さんから、

今日来る講師は戦車教導隊から来るって聞かされてんだ」

「そうなんだ……え、戦車教導隊……？」

「浮かんذار？戦車教導隊所属で思い切りのいいというか、

躊躇ないと言うか、豪快な人が一人」

一人だけ浮かぶんだよなあ……。

その人だったら遠慮しなくて楽だけどなあ……。

「こんなにちは！」

そこで笑みを浮かべていたのは浮かんだ人物その人だった。

「特別講師の戦車教導隊、蝶野亜美一尉だ」

「戦車道は初めての人が多いと聞きましたが、一緒に頑張りましたよ！」

武部の騙された、という声は無視しておくことにする。

そもそも戦車道の講師で男ってのはほぼいないぞ？

整備課や上の方の役員になるとまた変わるんだろうが。

「あら、みほちゃんじゃない！」

蝶野さんがみほの存在に気づく。

「師範や、お姉さまはお元気？」

「メールや電話する限りは元気でやってるみたいです」

みほに注目したところで辺りがざわつきだす。

「師範って……？」

「有名な……？」

「みほさんのお母様が師範をしている西住流ってのはね、戦車道の中でも最も由緒ある流派なの」

まあ、歴史は古いよな。西住流って。

それがイコール強さに直結はしないんだがね。

「まあ、みほはみほさ。」

家が古い流派やってようが関係はないんじゃないか？」

俺が後ろから口を出す。

「……あら、この学校は男子も戦車道をやっている……の……」

蝶野さんの動きが止まる。

「あいつは雑用ですから、気にしない……で……」

桃ちゃんが言い終わる前にすごい勢いで蝶野さんが詰め寄ってきた。

「もしかして……荒谷君？」

「お久しぶりです、蝶野さん」

「あんなに小さかった子がこんなに大きくなるなんてねー」

「蝶野さんもあれから変わらずお綺麗で」

「お世辞なんか言える歳になって」

いや、蝶野さん実際美人だろ。

……中身は豪快だけど。

「あれ？荒谷ちゃん知ってるの？」

「前にちょっとあつてな」

「前って、最後にあったの高校に上がる前かしら？」

「え、小学生の時以外に何かあったの？」

「あー、うん。色々だ、色々」

「守矢君、なんか齒切れ悪くない？あ、蝶野さんに告白して撃沈したとか!？」
何言ってるんだこいつ……。

「それは逆、私が撃破されたのよ」

何言ってるんだこいつ!？」

言葉が全然足りてねえ!？」

「も、守矢君……」

「何々!？好きな人でもいたの!？」

視線が……視線が痛い……！

「……戦車教導隊と殲滅戦をして勝ったんだよ」
静まり返る車庫前。

「荒谷ちゃん、賭け事はよくないな」

「賭けじゃない、純粹に選手として出たんだよ」

「……」

静まり返った車庫前。

ちゃんと飲み込めたのは、事前に俺が戦車道をしていると知っていたみほと秋山のみ。

角谷の姉さんですらぽかーんとしてる。

「嘘はよくないと思う！」

武部がいち早く我に返る。

「みほさんは、守矢さんが戦車道をしていることご存知だったんですか？」

「……うん、目の前で試合を見たこともあるよ」

「どうだったんですか!？」

食い気味の秋山。

ぶれねえなあ……。

「照さんもいたけど、正直勝てる気はしなかったかな……」

「照さん?」

「荒谷殿のお母様ですね、今の戦車道の日本代表の選手で、

撃破率は世界トップですね! 日本では『流星』の異名で知られています!」

秋山の説明が入る。

「まあ、俺のことなんてどうでもいいさ。

公式試合で乗れねえんだからな」

選手になれないのであれば俺がどれだけ

頑張れるとしても無意味だからな。

「で、今日は何やるんですか?」

この話題を続けても仕方がないので蝶野さん今日の講習の説明を促す。

「そうねえ……本格戦闘の練習試合、やってみましょうか!」

「ええ！いきなりですか!」

小山の姐さんが驚くのも無理はない。

普通、徐々に慣らしていくもんだが……。

「大丈夫！戦車なんてバーっと動かしてガーっと操作して、

ドーンと撃てばいいんだから！」

豪快すぎやしませんかね……。

「何事も実践よ！では、この地図に書いてあるスタート地点へ向かってね」

「蝶野さん、俺は？」

試合に出るわけにもいかねえからな。

「荒谷君は私と観戦でもしましょうか」

「了解です」

「じゃあみんな、行動開始！」

蝶野さんの号令で、生徒たちがそれぞれの戦車へと向かった。

試合は思いがけないほど順調に進んでいった。

「戦車の操作ってそんなに簡単じゃねえんだけだな」
蝶野さんと並んで双眼鏡で試合を艦戦していた。

っと、Ⅲ突と89式がⅣ号を橋の中間に追い詰めたか。

「さて、ここからどう動く……?」

「もし荒谷君がⅣ号に乗ってたのならどうする?」

「1番戦闘力があるのが自分たちの乗るⅣ号なので、

ほかの4両は全力で自分たちを叩きに來ると仮定します。

その他のチームは敵同士であろうが今は結託するのが上策ですから。

現にⅢ突と八九式は明らかに組んでるみたいです。

あそこに居ない38(t)とM3の2台は前から漁夫の利も狙って挟撃する気かな

？」

1年に関してはとりあえずついていってる感がある。

「……ん、IV号の運転手が代わったか？」

一度停止したIV号が先ほどの動きとは変わっていた。
後退から前進がえらくスムーズになったな。

「俺がいつもの面子でここを突破しろといわれたら

全速力で前進して前から来る2台を先に叩く。

III突や八九式に比べれば行進間射撃になるので若干でも命中率は下がると思うの
で」

お、III突と八九式を撃破したな。

みほはそっちから狙わせるか。

まあ、当たらない確立の方が多いだろうし。

「おいおい、それを外すかよ……」

38（t）とIV号が同時に放った砲弾は、

一方は明後日の方向へ、一方は車両へ。

直撃し白旗が出たのは38（t）だった。

「んで、焦った1年は自爆しちゃったか……」

逃げようとしたところ泥にはまって行動停止になってしまった。

「生き残ったのは予想通りみほ達のチームか」

まあ、初心者ばかりだしな……。

しかし、ここまで動けるのは予想外だったな。

もうちょっと頑張れば1回戦で相手次第で良い試合は出来る……かもな。

「さて、試合も終わったことだし、みんなに総評を言いに行きましょう！」

蝶野さんが気分良く観戦塔を降りて行った。

しかし蝶野さんが総評……ねえ……。

「みんなグッジョブ! ベリーナイス! これだけガンガン動かしたら上出来よ!」
大雑把すぎねえか……?」

「特にAチーム、よくやったわね!」

まあ、最後まで生き残ったしな。

「じゃあ……荒谷君はなにかある?」

「え、俺ですか?」

「戦車道の先輩として、アドバイスを送ってあげなさい」

ええ……同い年の俺が何か言っただうすんだよ……。

「荒谷ちゃん、思ったこといっていいよ」

「……角谷の姐さんがそう言うのなら」

しかし、これといって言うこともないな……。

「まずⅢ突と八九式、組んでⅣ号を落とそうとした判断は決して間違いいではない。隊長がいらないこの試合でその判断ができるのなら上出来だ」

戦力なんかを十分見極めた上での判断だろうしな。

「38（t）は連動してない味方を利用しての挟撃はよかったと思う。

ただ、最後の射撃が明後日の方向に行かなきゃもっとよかった」

桃ちゃんがなんか喚いてるが無視だ。

悔しかったら俺より当ててくれ。

「1年のM3リー。目の前で全員撃破されてしまって、

ビビッてあそこで逃げると言う判断をしたと思うがそれでいい。

逃げ延びれば冷静になる時間が生まれる、冷静になれば意外と出来る事は浮かんでくる」

ただ、危険だから戦闘の最中に車両を降りて逃げるのだけはしないこと、と念を

押す。

勢いあまって車両を降りて逃げちゃ危ないからな。

砲撃の余波でなんか飛んでくるかもしれないしな。

「IV号は、急に動きが変わったが……動かしたのはいつの間にかそこにいる冷泉か？」

「……そうだが」

「いい動きだ、そのまま戦車道に入っちまえよ」

「……面倒だ」

「まあ、入らざるを得ないと思うがな」

主に特典関連のせいだ。

「これぐらいかね。さっきも言ったが聞き流してくれてかまわないからな」

「荒谷ちゃん思った以上に真面目なこと言うんだねえ」

みんなが一斉に頷く。

「ほんとにやってたっぽい？」

「なんかかっこいいかも……アウトローっぽくて！」

1年にはなぜか好評のようだ。

「というか、やっぱ信じてないんだな」

「そりゃ、みほを疑うわけじゃないけど簡単には信じられないよ」

「まあ、そうか……。戦車に乗る機会があれば、目に物見せてやるさ」

その時は知らなかったんだ。

その戦車に乗る機会が思った以上に早く来るってことを。

多分、本編の台詞やら何やらを極力なぞろうとするから長くなるんだな。
今後はカットできるようなところはカットしていこうかな……？

沙織の眼鏡って良いよなあってのを書きたかっただけで、
わざわざきちんと夕飯のシーン書いたからなあ……。。

26・聖グロリアーナです!

まだまだ初投稿です。

学校内での模擬戦の後は慌しく日々が駆け抜けていった。

みほと秋山以外は戦車のせの字も知らないような状態。

秋山も実際に戦車を動かしたことはなかったそうだ。

なので、いまだに乗るたびにパンツァーハイになる。

だがそんな状況よりもさらに驚いたことがある。

バレー色に染まった戦車、真っ赤に塗られ旗の立ってる戦車、

ピンク色に染まった戦車、金色に光る戦車が鎮座していたのだ。

みほ達のIV号に関しては秋山の涙の説得によりそのままになったという。

塗装したみんなは満足げで、秋山は涙を流す。

武部は自分らも塗ればよかったと不満をこぼし、

五十鈴はあらあらまあと驚き、冷泉はそ知らぬ顔。

そしてみほは大爆笑していた。

ちなみにIV号にあった箒星は俺が消しておいた。

こいつは母さんの手を離れている。

もうみほ達の戦車なのだから。

それともう一つ、その日の練習終わりに桃ちゃんから重大発表があった。

今週の日曜日に早速練習試合をやるというのだ。

それも聖グロリアーナ女学院と。

全国大会準優勝の実績もある強豪校だ。

ちなみに俺は母さんと共に中等部には行ったことがある。

今年の隊長はその時知り合ったダージリンだもんなあ。

それを告げられた生徒は不安の色を浮かべ、

冷泉は朝早くに集合ということで戦車道をやめると言い出していた。

武部の冷泉のぼーちゃん絡みの発言で何とか踏みとどまったみたいだが。

しかし俺は、その時に角谷の姐さんがこっちを見てにやりと笑っていたのが気にかかった。

その日に、対聖グロの作戦会議で38（t）に乗る生徒会チームと

それぞれの車長が集められたのだが、俺は参加はできなかった。

一応、信じてはもらっていないが経験者なので少しくらいは案を出せるといったのだが、

角谷の姐さん曰く、

「荒谷ちゃんには荒谷ちゃんの仕事を任せるからさあ」との事だった。

まあ、参加したところで俺は試合には出られんからな。

なんか当日別の作業があるんだろう、力仕事とか。

そう、戦車道の試合には出られないはずだった。

だが……その日の夜送られてきた1通のメールによって事態は大きく変わった。

~~~~~

差出人…ダージリン

件名 .. 用件だけ簡潔にお伝えいたします

私のチームの砲手をしていただけないかしら？

~~~~~

練習試合当日。

俺はみんなと会わないように、

日もそんなに昇ってないような時間に家を出た。

学園艦自体は前日に大洗に寄港していた為、陸に上がるのは簡単だった。

少し時間をつぶしてから、みんなが集合するであろう時間より少し早い時間にみほにメールを送っておく。

~~~~~

送り先..みほ

件名 .. ちよつと用事が出来た

試合の時間にそっちに顔を出すことが出来なくなった。

試合はちゃんと一番近いところで見てるから頑張ってくれ。

俺も一生懸命張るからさ。

~~~~~

「よし、これでとりあえずは大丈夫だろ」

ちゃんと連絡しとかなないと戦車で迎えにきかねないからな……。

今日も起きない冷泉のために戦車を使ってると思うし。

……使い方間違ってるねえか？

そうこうしているうちに指定された時間が近づいてきたので、少し早めに聖グロ学園艦への昇降口に向かったのだが、すでにそこにはオレンジ色の髪の子が立っていた。

「遅れてすまない、今日ダージリンと約束がある荒谷と言う者だが……」

「あ、あなたが荒谷様ですね。まだ時間にはなっていないから大丈夫ですよ」

なんかほわほわした子だなあ。

「聖グロリアーナ女学院 1 年のオレンジペコと申します」

1 年ってことは俺が聖グロに來たことがあることは知らないだろうし……。

ダージリンに話を聞いていたってところか？

じゃなきゃ、ここまでスマートに対応はできないだろう。

「俺は、大洗学園 2 年荒谷守矢」

お互いの自己紹介を済ませる。

「オレンジペコってのは本名なのか？」

「いえ、ダージリン様に名前を頂きました」

「名前をもらってるとして事は、相当腕が立つんだな」

聖グロでは変わった伝統がある。

聖グロでは一部の人間には本名じゃなくニックネームで呼ぶ風習がある。
ニックネームで呼ばれるのは幹部、もしくは将来有望な候補生だ。

つまり、目の前に居るこの子はいい選手だということだった。

普通の高校であれば、別に友人やチームメイトを

ニックネームで呼ぼうが普通のことだが、

ここは日本有数のお嬢様学校。

本来学生同士でそのように呼ぶことはあり得ない。

なのでこの風習が成り立っている。

「いえ、私なんてまだまだで……」

謙遜するオレンジペコ。

「ダージリンは人を見る目は悪くねえからな。

誇っていいと思うぞ、慢心は駄目だけどな」

「ありがとうございます。では、こちらへ。

紅茶の園へ案内いたします」

オレンジペコの案内で俺は聖グロのクラブハウスへと向かった。

「ごきげんよう、荒谷さん」

クラブハウスでは二人の生徒が優雅にお茶をしていた。

「よお、ダージリン。今日はお招きどうも」

一人は聖グロ隊長ダージリン。

「守矢様も紅茶でよろしかったですか？」

もう一人はその右腕、アッサムだ。

二人とも年上だが敬語は必要ないとの事なので、

いつも通り楽に話している。

……だが、アッサムはなあ。

「なあ、アッサム。様付けはやめねえか？」

本来なら俺が敬語を使う立場なんだぜ？」

「いえ、あなたにはこの学校を救っていただいた恩義がありますので」

「やったのは俺の母さんなんだが……」

実際、文句を言ったのは母さんだ。

「ケチをつけたいのならこの子達と公の場の戦車道で勝ってみせろ。

私はこの子達と共に戦う。あの時のように恥を晒すのが嫌なら黙って朽ちろ老害共」

いや、痺れたぜあの啖呵は。

ただ、その一言で沈静化したのにはある理由がある。

母さんがまだ高校生の頃、聖グロと試合をやったそう。

聖グロ戦車道チームは弱小と言われていた大洗女子学園相手に

圧倒的な勝利を収められると思っていたのか、

結構大々的に戦車道の試合の宣伝を行おうとしたそう。

その時点で優雅とは程遠いが聖グロの力を示すにはちょうど良かったのだろう。

だが一方ではその行動を危険視する生徒も居た。

情報処理学部^{G1}第6⁶課だ。

今年に入り大洗の戦力に大きな変化があったことを見抜いた彼女らは、

当時の隊長に宣伝仕事を辞めるよう具申したと言う。

だが隊長はその意見を一蹴した。

自分たちは強者であり相手は弱者である。

舞踏会のように優雅に踊り、

その上で相手を制圧し力を知らしめると。

しかし隊長が知っていたのは前の年の大洗女子学園。

G I 6 が危惧したのは母さんが入学した現在の大洗女子学園。

その判断が全てを狂わせた。

試合は悲惨なものとなった。

そこにあったのは聖グロが思い描いた舞踏会ではなく、

大洗の思い描いた下克上だった。

聖グロお得意の浸透強襲戦術を嘲笑うかのように

ヒット&アウェイでじわじわと削っていく大洗。

強者の驕りが全てを掻っ攫っていった。

結果、大洗の全車両生存による完封。

自らが行った工作によりその世代の聖グロ戦車道チームの権威は失墜したという。

現在の聖グロOG会で幅を聞かせている人間がこの世代に当たる。

母さん曰く、

「あれだけのことでやらかしたからねえ。

自分は出来る人間だと思ってるか、権威振りかざして憂さ晴らしたいんじゃないの？

出来れば自分のおかげ、出来なければ部下が無能だからかと思ってそうだよねえ」
と言っていた。

そのやらかしの原因の一端が母さんなんだがそれは……。

しかしながら最近はこのOG会でも色々な動きがあると言う。

先の母さんの啖呵だが、今も戦車に乗っている人間からはよく言ったと賞賛されている。

乗れば乗るほど自分たちがいかに不利な状況で戦っていたのか、不利の状況を強いていたのかが理解できるのだ。

これはなくすべき風習だと声を上げる人が出てきたのだ。

自分達の悔しさを繰り返し返してはいけない、持ちうる全てを使って戦い勝て。なかなかいいことを言ってくれる人達だ。

逆に乗らない人間はこれが理解できない。

そしてそういう人達が声高々と色々な口出しをしてくるのだ。

自分達もそうだったんだからお前達もそれで戦い勝て。

正直な話、強豪とされているが成績が振るわないのこの人達のせいだと思う。

この人達がいなくなれば本当に強豪校として復活する日も近いだろう。

閑話休題。

「俺は一体どんな仕事をすればいいんだよ」

「簡単ですわ、私の乗るチャータールの砲手として

大洗と戦っていただけばいいだけですから」

「俺はそれが冗談で他になんかあると思ってきたんだが？」

「冗談ではありませんわ」

「いやいや、冗談にしか聞こえないんだよ。」

「第一、俺は敵の大洗の人間だぞ？」

「そちらの会長さんには許可は取ってあります」

「すつと差し出される一枚のプリント。」

それは短期転校手続きの書類だった。

何やってんだ、角谷の姐さん……。

「俺が向こうの手の内知ってそうだからとかそういうのだったら……」

「いえ、事前に荒谷さんには何も教えないようにお伝えしていますので」

これかぁ！これが角谷の姐さんの言う俺の仕事ってやつか!?

「それに、ダージリンにはアッサムって言う有能な砲手が居るだろうが！」

「あら、守矢様に褒めていただけるとは嬉しいですね」

にっこり微笑むアッサム。

可愛いというよりは綺麗だな。

……いやそうじゃない。

「そもそも、男の俺が戦車に乗って試合に出るのはまずくねえか？」

「この試合は非公式の練習試合ですわ、あちらは久しぶりの復活と言うことで

お祭り騒ぎにしていますわが」

「大洗と聖グロはいいとして審判連中はどうする気だよ」

「それも大丈夫ですわ、蝶野さんにお話したらOKの一言でした」

「大丈夫かあの人……」

「これで何の問題ありませんわね」

「もし、俺がチャールに乗ったとしてアッサムはどうすんだよ」

「私は色々とデータを取る作業に従事いたします」

なるほど……リアルタイムに色々とデータの更新をすると。

「来年、我が校に守矢様が来た時の想定もできますし」

今すごい事言わなかったか？

「いや、さすがに女子高に転校はしないからな？」

「あら、我が聖グロリアーナは大歓迎ですわよ？もちろん私個人も」

無茶言うなっつての、個人でどうこうできる問題でもあるまいよ。

「はぁ……で、オーダーは？」

「……つれない人」

不服そうなダージリン。

「おそらく大洗は囹を使つてのキルゾーンへの誘引を狙つてくると思われます。

大洗の保有する戦車ではこちらの装甲を抜くのは難しいので」

「戦車の種類は知ってるのか？」

「IV号、38(t)、III号突撃砲、M3リー、八九式であることは既にG I 6が掴んでいます」

優秀な諜報員ですこと。

「ですが、この時期であればまだ各隊の足並みは揃っていないと思われるので、キルゾーンまで案内して頂きましょう」

「大胆だねえ」

「変に策を弄するよりはこの方法が確実かと」

「敵の戦力の集中している場所に突撃する形ですが大丈夫でしょうか？」

オレンジペコの心配も最もではある。

「ペコこんな言葉を知った」「虎穴に入らざれば虎子を得ずと言うだろう？」

……いけずな人」

ダージリンは一度格言言い出すと止まらないからな。

「それに、アッサムの言うとおり変に散開して探したりするよりは、

慣れた浸透強襲戦術を使ったほうが間違いないだろ」

「では浸透強襲戦術軸に……」

その後も色々と作戦や行動指針について話していたが、移動する時間になったので戦車道の車庫へと移動した。

車庫前には既に他の部隊が集まっていた。

俺の出現に一部生徒……主に下級生がざわついてますが、もしかして話を通してない？

「データ収集に専念するアッサムに代わり、

本日はこの殿方に砲手を勤めてもらいます」

おっと、ざわざわが大きくなったぞ。

「さあ、自己紹介を」

え!? この状況でさんの!?

「……あー、何故かダージリンの推薦によって

砲手を勤めることになってしまった荒谷守矢だ」

苦手だなあ……こういうの……。

しかも、周りはお嬢様ばかりで。

こう、なんというか変に緊張させられる。

ざわざわしてるし……もつとはっちゃけてくれたほうが助かる。

「質問ですわ!」

そんな中、ピンクの髪の子がビシッ!と元気よく手を上げた。

「ローズヒップ……もうちょっと淑女らしくできないのですか……」

なんというか元気がいいな。

「その前に一個いいかい？」

「なんですの？」

「それって本名？」

「ダージン様に付けてもらったんですの！」

マジかダージン。

この子にも名前をやったのか。

戦車道の腕がいいのか、伸び代があるのか……。

どちらにせよ聖グロっぽさはかけらもねえな。

だがそれがいい。

俺は変に猫かぶられるよりこっちの方が好感が持てる。

「聖グロには珍しく威勢のいい子だな。気に入った、なんでも答えるぞ」

「はいですよ! ダージン様とはどういったご関係ですよ!?

「ローズヒップ……」

アッサムがやれやれといった感じで呆れる。

「中学時代に少しの間一緒にこの聖グロで戦車道をしていた仲だ」

「ここは女子高ですわよ? なんでこちらで戦車道をしていましたの?」

ふむ、ローズヒップの疑問点は男で戦車道をしている理由ではなくて、なぜ女子高で戦車道をしているのかって事か。

ますます気に入ったぞローズヒップ。

「数年前中等部に戦車道強化の目的で教官が来たことあったろ?」

「聞いたことがありますわ。その時のおかげで

クロムウェルが導入されたとお聞きしてますが」

「その教官がうちの母親でな、俺も一緒に回ってたんだよ」

「マジですよ!?

「マジですよ」

やべえ、この子超面白い。

「じゃあ、OG会にすっげえ啖呵を切ったのは」

「うちの母さんだな」

「模擬戦で2車両で10車両落としたのは」

「あ、それは俺も居たわ」

「パネェですよ!!」

アッサムが頭を抱える。

「すごいですの！後で写真とってほしいですよ！」

「俺アイドルなんかじゃないんだがなあ……」

俺と写真撮って何がいいんだ？

「しかしあれだな、俺が戦車道やってるってことに
何の疑問ももたねえんだな、ローズヒップは」

昔から知ってる上級生ならまだしも、

普通はまずそこに質問すると思うんだがな……。

「殿方が戦車道をするのはおかしいことですか？」

女子だけが参加できる試合であれば駄目ですけど、

あちらも審判団も承知の上なら別にいいんじゃないですか?」

なんでそんなことを聞くんですの?と言わんばかりだ。

「そもそも戦車道は淑女の嗜みではありませんが

男子禁止とは言っていないですよ!」フム　!

「気が変わった。後で好きなポーズ、

なんならツーショットでも文句言わず撮らせてやる」

あんまし賢くはなさそうだが物事をきっちり捉えてる人間だ。

それに物怖じしないその態度が素晴らしい!

マジで大洗に転校しねえかなあ……みほなら面白い運用をしてくれそうだし。

「太っ腹ですよ!」

ことごとく聖グロらしさがねえなあ!この子!

「ローズヒップ、お喋りはそれまでです」

ぴしゃりとダージリンが会話をとめる。

「歓談もいいですが……まずは、目の前の敵を倒してから。

今回は隊長車にチャーチル、後はマチルダ4両で出撃しますわ」

それに対しても元氣よく手を上げるローズヒップ。

「ダージリン様！クルセイダーは出さないんですの!？」

「相手が5両で来る以上こちらでもそれに合わせます」

「うう……お留守番ですの……」

残念そうなローズヒップ。

「まあ、他のみんなが頑張ってきてくれるさ」

「荒谷様！私達の代わりに頑張るんですのよ!」

「任せとけ、きっちり勝ちを取ってきてやるよ」

ローズヒップに近づき頭をくしゃくしゃと撫でる。

「うう、淑女にする扱いではありませんわ!」

「はっはっは、すまんすまん」

しかし、満更でもなさそうなローズヒップ。

可愛いなあ、コイツ。

「では、各員乗車!」

ダージリンの号令で各員が一斉に自分の戦車に搭乗する。

俺も隊長車であるチャールに乗り込む。

いつもの場所砲主席に座りいつも通りスコープの確認。

マイクは……いらねえか。

あくまで今日は聖グロの助っ人だしな。

……チャールは久しぶりだ。

感触を確かめ、1回、2回と静かに深呼吸する。

「荒谷さん期待してますわよ」

「しっかりデータを取らせてくださいね」

「私も装填頑張ります！」

「期待にはちゃんと応えられるように頑張るさ」

やれることは全力でやる。

「では、パーティーに向かいましょうか」

俺達、聖グロリアーナ女学院戦車道チームは試合会場へと向かった。

次回こそ聖グロとの試合を……。

27・試合開始です!

初投稿かもしれないので初投稿です。

最近は少し働きながらちゃんとした就職活動をしているので、ほんと亀のような更新速度になってます。

すみませんです。

というか、気付いたらお気に入り1000件越えてた……。

ウッソやろ……。

たくさんの方に見てもらえてうれしいです。

文才の無い私ですががんばっていいこうと思います。

戦車道の試合前、集合場所で私達大洗戦車道チームは相手チームを待っていた。

「西住殿、荒谷殿からその後連絡は……？」

「……来てない」

朝、1通のメールが着てから音沙汰がない。

「試合の時間に間に合わないけど、試合は一番近いところで見てる」

会長が守矢君に仕事を任せたと言う話があるけど

一体なんの仕事を任されたんだろう……。

一番近いところ……？

会場で初めて戦車道を見る人向けに解説でもするのか？

「守矢君が来ても来なくても今日は絶対に勝たないとダメなんだよ！」

「落ち着いてください、沙織さん」

「……うるさいぞ、沙織」

沙織さんが声を荒げる。

理由は明白。

この試合に負けてしまった場合、納涼祭であんこう踊りを披露しなくてはならぬのだ。

最初に聞かされたときは何がすごいのか、どうしてみんなここまで絶望的な表情をするのかわからなかったが、家に帰って動画を検索して理解した。

これはやばいやつだと。

体のラインがもろに出るスーツを着て、胸振り腰振るあの踊りはやっちゃ駄目なやつだと頭が即座に理解した。

「西住、聖グロリアーナ女学院が来たぞ」

「わかりました」

各車の隊長が戦車の前に整列する。

遠目に見えるのはイギリス戦車。

マチルダとチャーチル。

ぴたっと列を成して止まる姿は流石強豪校。

「本日は急な申し出にも関わらず受けてくれたこと感謝する」

「構いせんわ。……しかし個性的な戦車ですわね」

私達の戦車を見て素直な感想を言ってくる。

……しかし、笑うようなことはなく引き締まっていた。

明らかに格下の学校がこんな戦車に乗っているとわかれば少しは油断してくれると思うんだけど……。

「姿と実力が比例しないと言うのは過去に嫌と言うほど思い知らされていますの。全力でお相手させていただきますわ」

そう笑う姿は少しかつこよく見えた。

試合開始の合図と同時に全車両が前進する。

「まずは私達Aチームが偵察に向かいます。

100メートルほど進んだところで他の方達は待機しておいてください」
試合前の挨拶を見る限り油断も慢心もない。

こちらの出来ることを全てやり遂げなければ勝機すら見出せない。

「西住ちゃん、作戦名とかないの?」

さ、作戦名? あんまりそんなこと気にしたことなかったな……。

「えっと……こそこそ作戦です。こそこそ隠れて相手の出方を見て、こそこそ隠れながら攻撃を仕掛けたいと思います!」

真正面からの攻撃では練度・車両性能で劣る私達は間違はなく殲滅される。

……これが、輝さんや守矢君ならひっくり返すんだろうけど。

私達にはそんなことは出来ないから出来ることで最大限の結果を得なきゃ。

試合開始の合図はなったがこちらは動かない。

みんなで紅茶を飲んでいた。

今は向こうが色々と作戦のために動いてるだろうからな。

後追いで動き出すこちらはリラックスしている。

「荒谷様、お口に合うかどうかはわかりませんがスコーンです」

「ん……うめえなこれ」

オレンジペコから差し出されたスコーンはとても美味だった。

後で作り方を教えてもらおう。

「良かったです」

はにかむオレンジペコが可愛い。

しばらくはそのままお茶を楽しんでいたがダージリンが戦車内に戻ってきた。

「さて、そろそろ動き出しましょうか……全車両、前進」

隊列を組み前進する聖グロリアーナ。

今から戦闘が始まると思うと気持ち昂る。

しかし心は熱く、頭はクリアに。

一度目を閉じ、ゆっくりと瞼を開け、確かめるようにレバーを握る。

「いつも座ってる人間と違うが宜しく頼むぞ、チャーチル」

今、お前に生命を吹き込んでやる。

偵察に來た私達 A チームは相手戦車を先に発見することが出来た。

これで相手のほうに先に見つかったら目も当てられない状況になったと思う。

「マチルダⅡ 4 両、チャーチル 1 両前進中」

「流石、きれいな隊列を組んでいますね」

秋山さんが少し興奮気味だ。

「あれだけ速度をあわせて隊列を乱さないなんてすごいよ」

「こちらの徹甲弾だと正面装甲は抜けませんね……」

「そこは戦術と腕かな？」

「はい！」

……戦闘中にこんな和やかな会話をしたのは初めてだ。

黒森峰の頃はずっとあっさりとしていた。

必要最小限を伝達するためだけのものだったんだけど……。

今はそんなことを考えてる場合じゃないか。

秋山さんと戦車に戻り他の車両に待機地点に向かうよう指示を出す。
出し終わると相手をこちらに誘導するための砲撃を準備する。

「敵、前方よりこちらに接近！砲撃準備！」

「装填完了！」

「えっと……チャーチルの幅は……」

「3・25メートルだよ」

「4シュトリヒだから……距離は810メートル」

「撃て！」

放たれた砲弾はチャーチルに当たらなかったは至近弾となった。

誘引の役割は十二分に果たしたと思う。

「すみません、外しました……」

「大丈夫、目的は撃破じゃないから」

「冷泉さん、そのままキルゾーンまで敵をひきつけつつ移動します」

「ん……」

冷泉さんが車体を回し移動しようとした。

その時、私に説明の出来ない悪寒が走った。
これ以上前進したら不味い、そう感じた。

「冷泉さん！！！！ 止まって！！！！」

停車とほぼ同時に目の前を砲弾が通過していった。

止まっていなければ履帯や足回りを破壊され行動不能になっていたであろう一撃。

どうやら隊長車のチャールから放たれたようだ。

「ふう……冷泉さん、できるだけジグザグに走行して被弾を避けてください」

「了解」

さすが聖グロリアーナ、気を引き締めなおさないと……。

少しでも気を抜いたら……持って行かれる……。

「あれを躲すかよ……」

俺は思わず眩いてしまった。

「守矢さん、あれは外したんですか？」

ダージリンがこちらに問いかける。

「いや、躲された。これ以上無いタイミングで撃ったが、

ここしかないタイミングで止まりやがった」

こちらがあちらの行動を読んだ上でさらにその上を行かれた。

「この距離をあの早さと精度で撃つ守矢様もすごいですが、

これを躲す大洗の隊長車も相当なレベルですね……」

おそろくみほ本人はわかっていないはずだ。

ただ、嫌な予感がしてその予感に従い止ったといったところか。

直感ってやつだろう。

この手の才を持つ隊長は多くない。

俺が知る中では千代さんの娘の愛里寿ちゃんくらいだ。

「……面白くなってきな」

この感覚は久しぶりだ。

是が非でも勝ちたいという気にさせられる。

本気を出して問題ないと心が奮える。

「これは……全国大会のために情報収集をしっかりとっておかないといけませんね」
リアルタイムでどんな情報を更新していくアッサム。

「手強い相手になりそうですね……」

オレンジペコも気を引き締める。

「ですが、私たちのやることは変わりませんわ。

全車両、前方のIV号に攻撃開始」

各車両がIV号を追い立てるように砲撃を開始する。

「速度を上げて、追うわよ」

更に行軍速度を上げIV号を追う。

「俺も仕事を始めようか。ペコ、頼むぞ」

「かしこまりました」

「守矢さん、IV号を撃破しないようにだけしてください。

あの方たちにはパーティ会場へ案内してもらわないといけませんので」

「了解、履帯に当って行動の阻害をするようなことも避けておく」

「結構、では守矢さん。砲撃を開始してください」

「あいよ」

俺もIV号に砲撃を浴びせる。

「たった数日であれだけの走行ができるとは、やっぱ冷泉はすごいな……だが」
俺の放った砲撃は寸分の狂い無くIV号を掠める。

撃破に至らない金属と金属のこすれる音だけがするようなもの。

「それくらいの機動なら何の障害にもならんよ」

数秒後、同じくIV号を掠めるように砲弾を放つ。

それをまったく同じ間隔で繰り返す続ける。

スコープ越しに、みほが戦車内に引込んだのを確認する。

武部が何か言ってたみたいだ。たぶん危ないからとかそんな感じだろうな。

黒森峰じゃそんなこと言われるはずも無かっただろうしちょっと面食らったんじゃないか？

とは言え、みほを戦車にこもらせるのは狙い通りだ。

身を乗り出されている時よりは格段に状況確認がしづらくなったはずだ。

引込んだ後も継続して砲撃を続ける。

淡々と、同じタイミングで。

さて、これに気づいたとき向こうの車内はどうなるかねえ……。

気づくとしたらみほと冷泉か。

秋山は戦車にこそ詳しいがこういった心理戦はわからんだろうし、

武部も五十鈴も一杯一杯だろうからな。

手一杯の状況から他人から教えて気付かされるのは自分で気付くのととは訳が違
う。

逃・げ・ら・れ・て・る・と・思・っ・て・る・状・況・か・ら、

逃・が・さ・れ・て・い・る・と・他・人・か・ら・気・付・か・さ・れ・る・ん・だ。

それも生殺与奪を自由に握られたまま。

まだ戦車に乗り始めたばかりの人間が多いんだ。

パニックにならなければ御の字だぞ、みほ。

ちゃんと俺達を死地へと案内してなきや困るからな。

頑張ってくれよ？

「みほ！何かあってからじゃ遅いんだからね！」

いつものようにキューポラから身を乗り出して様子を見ていると、

沙織さんからのすごく怒られた。

滅多に当たるようなものじゃないからと言ってはみたが有無を言わさない感じだった。

確かに相手のチャーチルがこの車両に砲弾を掠めてはいんだけど。

……けど、少し嬉しかった。
心配してくれる友達がいる。

試合中に感じるようなことじゃないんだろうけどそう思った。

「しかし、冷泉殿の操縦もすごいですね。

これだけの砲撃を浴びてるのに直撃はなし。

数発掠めてるだけですよ」

カァン!と砲弾の掠める音が響く。

先ほどから何発かこの車両に当たっている。

これだけなら、冷泉さんの操縦のセンスがいいというだけの話なんだけど……。

なぜか違和感がある。

気付かないといけないのに気付くのはまずい、そんな違和感。

カァン！と音がしまたしても砲弾が当たる。

まさか……いや、そんなはずは……。

「……冷泉さん、もっと車体を振ってよけてみてもらえませんか？」

「わかった……無駄だとは思うがやってみよう」

……冷泉さんも何かに気付いてる？

車両がさらに暴れる。

杞憂であってほしい。

この予感当たらないでほしい、そう願った。

カァン！

だが無情にも砲弾の当たる音はした。

「これだけ車体を振り回してるのに直撃は出来ずとも当ててくるとは、向こうの砲手もすごい腕をしますね」

違う。

「私たちは生かされてる……」

「西住殿……ど、どういう意味ですか?」

「そのままの意味だよ、相手はわざと直撃を外した上で、私たちを追いかけてきてる……」

「み、みほさんの考えすぎなんじゃ……」

「……後2秒くらいしたらはっきりするよ」

そう言ってきっちり2秒後。

カァン！と言う音が車内に響いた。

「そ、そんなことが可能なんですか!？」

これだけ車両を振っておいで確実にクリーンヒットさせないなんてこと！
私が知る限り2人だけ。

守矢君のお母さんの照さんと守矢君だ。

だが、照さんはここにいないし守矢君も試合には出られない。

じゃあ、一体誰が……。

いや、この状況で考えても仕方が無い。

現にすぐ後ろにいるのだから存在するのだろう。

……この時の私は考えが至らなかったのだ。

これが練習試合であり公式な試合ではない事。

非公式な試合で双方の同意があれば男子も戦車に乗れること。
社会人のチームの練習試合では守矢君もメンバーだったこと。

守矢君は一番近くで見ていると言っていたことを。

「み、みほさん……どうでしょう……」

「レベルが違いすぎるよお!」

車内が軽くパニックになる。

……言わずに胸のうちにだけ秘めておけばよかったと後悔する。

「おそらく私たちが囧だと言うことも、

キルゾーンへ誘導していることもわかってる」

「かと言って、私達だけでは……」

どう足掻いても勝てるわけが無い。

そして私たちが落とされればこちらの勝機は無くなる。

「……作戦はそのまま続行、予定通り合流地点へ向かいます」

「大丈夫なんでしょうか……」

「秋山さん、ここで戦ってもやられるだけだよ。

なら、少しでも勝てるように頑張ろう。

元々、相手がこういう戦略で来るってのを

想定した上で行動してくるとは思ってたし」

「……みほさんって意外と大胆なんですネ」

「最初から諦めたくないだけ……かな？」

何もせずに流されて負けるのだけは嫌だ。

「冷泉さん、引き続き回避行動をとりつつポイントへ移動してください」

「……ん」

だったら私は私のできることをやるだけだ。

「Aチーム、敵を引き付けつつ後3分でそちらに到着します」
無線でほかのチームに状況を報告する。

これでポイントにいるみんなが攻撃の準備をしてくれる。

カン！とまたしても砲弾の当たる音。

格下相手にここまで徹底して攻撃してくるなんて……。

だけど、まだ負けたわけじゃない。

「後600メートルで敵車両射程内です！」

まだ諦めるわけにはいかない！

「ダージリン、例のポイントに到着するぞ」

IV号を追いかけていき、キルゾーンと想定している場所に近づいていく。
みほはちゃんと車内を落ち着けさせることができたみたいだな。
ちよつと前ならあわあわしてただろうが成長したものだ。

「おいおい、味方撃つてんじゃねえか……」

IV号が開けた場所に出た瞬間、砲撃に曝されていた。

誰かテンパったか？

それに続いてこちらの車両もポイントに出る。

敵からの砲撃があるが散発的だし余り恐怖感と言うものはなかった。

……ここら辺は実践の経験の差が如実に出てるな。

両サイドから挟み込むようにじりじりと追い詰めていく。

「砲撃開始」

ダージリンの命令で一斉に砲撃が開始される。

「まあ、こうなるわな……」

向こうの砲撃がさらに雑になる。

囲まれて狙われている状況だから焦りが生じてるんだろう。

どこにどう撃ってどう逃げ道を作るか考えればいいんだけどな。

「さってと、なら俺も1台減らしときますかね」

狙うのはこの場から脱出を図ろうとしている車両。

逃がして市街地に入られると探すのも面倒だ。

「だからすまないが落ちてもらうぞ、1年生」

照準をここから1番遠いM3リーに合わせる。

あちらは逃げようと後退しているが、こっちは停止しての射撃だ。

「さすがに、これだったら外さんぜ?」

トリガーを引き放たれた砲弾はIV号と三突の間を抜け、

吸い込まれるようにM3リーに着弾、白旗を揚げさせる結果となった。

「お見事です、守矢様」

「これくらいならアッサムも楽にこなせるだろ」

「いえ、確実に決められるとは私には言えませんので」

自信持っていいと思うけどな。

「お、あいつらこっから移動する気だな？」

履帯の外れた38（t）を除くIV号、八九式、三突が移動を開始する。

移動される前に落としたいが……。

スコープ越しに見えるのは味方の戦車。

1台が少し前に出すぎて射線と被っていた。

これじゃさすがに撃てない……か。

てことは少なくとも3台は健在のまま市街地戦か……。

「まずいかな……」

「どういたしました？」

オレンジペコが不思議そうな顔をする。

「たぶん向こうは大洗の市街地へ逃げ込むつもりだろう。」

と言うことは、あいつらの庭にわざわざ入っていかなきゃならん」

この手のゲリラ戦は聖グロのような王道を行く連中より、

個性の強い大洗のような連中のほうが得てして強い。

発想がより柔軟だからな。

それに、ここは大洗のホーム。

何が起るかわからない。

「思ってる以上に苦戦するかも知れんぜ……これは」

さあ、どうでてる？

もうちょっと……次でやっとたぶん聖グロ戦が終わる……。

28・決着です!

就職先が決まったので初投稿です。

前職とまったく違う職種なのでさらに投稿速度が遅くなります。

仕事もするからナ!

市街地に向かった大洗チームは予想を遥かに超える奮戦を見せた。

『三突の攻撃を受け走行不能!』

『こちら被弾につき確認中!』

地元の利を生かしたゲリラ戦法。

元々ある旗に紛れ込ませて路地から狙い撃ち。

立体駐車場を使ったデコイ。

「いいねえ、あらゆる物を利用して勝ちにいく姿勢嫌いじゃないぜ?」

はたしてみほの入れ知恵か各チームの独自の行動か。

おそろく後者だ。

みほはこっちに來てからの日がまだ浅い。

出来ない事は無いだろうが指示を出せるかといわれれば微妙になる。

チーム同士での連携もまだまだだからな。

だが格上相手取るならこれくらいの戦い方は当たり前だ。

俺や母さんだってあらゆる状況であらゆる物を利用して戦う。

戦力的にも劣っているのだからなおさらだ。

格下相手にこうもうまく誘い込まれて好き勝手されれば、

相手の動揺誘うことだって出来るだろう。

指揮が乱れれば勝ちを拾える確率も上がってくる。

だが……それは動揺を誘えればの話だ。

「おやりになりますわね……ルクリリ現在の状況は？」

『外部燃料タンクがやられました。が戦闘の続行は可能。』

敵車両の進路を塞ぐ形になっているので確実に撃破出来ます！」

「では速やかに敵車両を撃破しこちらへ合流なさい」

『了解！』

「他の車両は三突を追い立てなさい。」

路地に逃げ込もうが旗を目印に砲撃すれば撃破は容易でしょう？」

『了解です！』

その程度でこちらの隊長は揺らがんよ？

『Cチーム走行不能!』

『こちらBチーム敵車両撃破失敗及び走行不能!すみません!』

「残っているのは我々だけです!」

強い……これが聖グロリアーナに対する純粋な思いだ。

まったく揺らいでくれない。

格下相手にも慢心することなく全力で対応してくる。

市街地戦で敵車両を撃破できれば士気も少しは削げると思っていたけど……。

「向こうは何両!？」

「4両です……!」

状況確認のためキューポラから身を乗り出すとマチルダがすでに集まってきた。
た。

「囲まれたらまずい!」

「どうする?」

この状況でできることなんて限られてる……! !

「とにかく敵を振り切ってください!」

「ほい」

冷泉さんがギアを変え車両を加速させる。

乗り始めて数日とは思えない淀みの無い動き。

まだやれる……頑張れる……!

敵を振り切るべく右へ左へ。

もう少しで振り切れる。

その時だった。

目の前の通路には工事用の重機と通行禁止の看板。

「工事中!?冷泉さん! Uターンしてここを離れます!」

「ん……」

車体を回転させ振り返った正面。

そこにはあつて欲しくなかった現実があつた。

「こんな格言を知ってる？ イギリス人は恋愛と戦争では……手段を選ばない」
聖グロリアーナが集結していた。

後ろは駄目、前も駄目。

路地はあるけど、動く前にやられちゃう……。

どうする……、まだ望みはあるにはある。

意識の外のチームがこの場を荒らしてくれさえすればここはしのげる。

上手くいけばこの場で敵の数を減らすことも可能だ。

あの人達^{さん}が来てくれれば……！

「さんじょー！！！！！！」

一筋の希望がこの場に現れた。

「生徒会チーム!」

「履帯直したんですね!」

これなら……これならまだ戦える!

しかし敵車両の目の前に躍り出た生徒会チームの放った砲弾は、
気持ちのいいくらい違う方向へと飛んでいってしまった。

ふ、副会長……この土壇場でなんてことを……。

だが、これでリロードの分ほんの少し時間ができた。

「前進! 一撃で離脱して、路地左折!……!」

敵車両を1両撃破しすぐさまその場を離れる。

これでまだ戦える。

1両ずつ減らして一騎打ちにさえすればまだ勝ち目はある。

ここまで来て、あんこう踊りは踊りたくない……！！

みほ達IV号を追い掛け回す。

本当はあの場で落としたかったんだが、

上手いこと38（t）の黒煙に紛れて逃げやがった。

しかもあいつら、ただ逃げるだけじゃなくこちらを落とすにきた。

路地から大通りに出ようとした車両を落とし、さらに反転して同じ地点でもう1台。

さらにチャール^{こち}を落とそうとするもその砲撃は失敗に終わった。

「さあ、どうするみほ。ここで決着をつけるか？」

それともケツ巻くって機を狙うか？」

遠くに離れていったIV号は勢いそのままに反転。

「いいぜ……ここで終いにしようか」

「このまま相手に突撃します」

「ええ!?! 無茶ですよ西住殿!」

「そうだよみほりん!」

そう、このまま突撃してもやられるだけ……。

「と、見せかけて合図で敵の右側部に回り込みます。

冷泉さん、いけそうですか？」

「……やる」

今、このメンバーで出来る最良の作戦。

きつと向こうも可能性としては頭にあるだろうけど、

いざ、自分が対応するとなると若干の焦りは生まれるはず……！！

これがこの試合最後のチャンス……決めてみせる！

「はいっ！」

私は冷泉さんにタイミングの合図を出した。

「守矢さん！」

ダージリンが声を上げる。

わかってるさ、この突撃はブラフ。

本命は側面に回りこむこと。

勢いよく回り込んでこちらの照準の合う前にほぼ零距离で砲撃する。

いい作戦だ。

これ以上なくいい判断だ。

だが……。

相・手・が・俺・で・な・け・り・や・あ・よ・か・つ・た・な・あ・。

その程度なら驚きはしねえよ。

俺もや・つ・て・る・か・ら・な。

そんな戦法日常茶飯事だ。

俺も戦力の劣る車両でやりあってるんだからな。

この撃ち方の利点は二つ。

相手の側面や後部のウィークポイントを狙えること。

それと予め照準をある程度定めておけることだ。

ただし後者は戦車を操縦している人間の技量も同時に問われる。

うちのチームの操縦手であればそのポイントに車両をきっちり寄せる。

だからゼロ距離でほぼタイムラグなしで砲弾を撃ち込める。

IV号を動かす冷泉の操縦は天才的といってもいい。

数日でここまで動かせるのであればとんでもない才能だろう。

だが今の段階では戦車を動かすと言う一点のみだ。

どれだけの速度でどれだけ曲げればどれだけ滑らせられるか、環境を含めた動かし方はまだ理解できていない。

あいつのことだから後数回も動かせれば

そのあたりまできっちり織り込めるはずだが。

あの位置と勢いだ途中で止まってしまつて

少し前進しなけりゃ側部に回り込めない。

ならそれも踏まえて砲手は照準を置くわけだが、

今の五十鈴にそこまでの技量はない。

なら前進に合わせて少し調整しなければいけない。

とは言え、少し照準を横にずらすだけ。

それこそ1秒にも満たない時間。

だが、それすらも敗因と成りえる事を教えてやろう。

俺は回・り・込・ん・で・来・る・前・に・砲・塔・を・右・へ・と・回・転・さ・せ・る・。

他者から見れば勝負を捨てたように見えるだろう。

IV号はその砲塔にまるで導かれるように回りこんできた。

こちらの砲身はまっすぐに相手の戦車を。

あちらは動いた影響で狙う位置と砲身がずれている。

もしこのまま撃ったとしてもチャーチルを抜くことは出来ないはずだ。
だが撃たれるのを待つわけもない。

「さあ、チャーチルお前に魂があるのなら……」

こういった勝負において勝つことで見えるものもあれば、
負けることで見えてくるものもある。

「応えろ!!」

トリガーを引き、放たれた砲弾は真っ直ぐにIV号へと放たれる。

IV号も遅れて砲弾を放つ。

砲撃で発生した煙が晴れ現れたのは、

多少の損傷はあるものの健在のチャーチル。

「まあ、今回は敗北から何かを掴み取ってくれや」

『大洗学園チーム全車両走行不能! よって、聖グロリアーナ女学院の勝利!』

そして砲身が無残に破壊され白旗の上がったIV号だった。

やっと聖グロが終わったのナ！

最後のほうはだいぶ駆け足なんだナ！

これくらいのテンポで書いたほうがいいのか、

割と戦闘中の心情とか状況も細かく書いたほうがいいのか、

これもうわかんないのナ！

29・お茶会です!

いつもながら初投稿です。

私はトラックで運ばれていく戦車を眺めていた。

負けた。

今ある手段を総動員してなおその上を行かれた。

戦車を側面に回りこませて砲撃する作戦は上手くいったと思う。

現状あれ以上の動きは難しい。

途中で止まってしまったのも、

ずれた照準の修正に時間がかかるのも仕方がない。

これ以上のパフォーマンズを出すのは無理だ。

相手はそれを全て読みきった上で、技量の違いを見せた。

私が砲撃の合図を出す瞬間にすでに相手はトリガーを引いていた。

砲弾はギリギリ放たれたが、

もしかすると砲撃することなく撃破されてしまったかもしれない。

あんな真似できる高校生は一人しか思い浮かばない。

けど、試合に出るわけないし……。

「あなたが隊長さんですわね？」

そう思い悩んでいると聖グロの隊長さんが話しかけてきた。

「あ、はい」

「あなた、お名前は？」

「えっと……西住みほです」

名乗るべきかどうか一瞬思い悩んだ。

名乗ればどうしても西住流がついてきてしまう。

でも、私は私の戦車道をする決めたんだ。

名前に負けてなんかいられない。

「もしかして西住流の？ ずいぶんとまほさんとは違うのね」

そう微笑む隊長さん。

「私はダージリン、それに後ろに控えているのが

アッサムとオレンジペコですわ」

呼ばれた二人がこちらにお辞儀をする。

……すごく優雅だ。

「前半は思い描いたとおりだったのですが、

市街地での戦闘では手痛くやられましたわ」

「いえ、山岳地帯で終わってもおかしくなかったですよ。

特に隊長車の砲撃は恐ろしかったです」

「そうですわね……味方ながら淡々と当てていく様は、

恐ろしく見えましたわ」

「黒森峰にも……いや、あんな選手どの高校にもいないですよ」

「……？ おかしな事いいますのね」

「その砲手さんは次の全国大会にも出場するんですよ？」

「出場できないことは……ああ、そういうことですか」

なぜか納得するダージリンさん。

「生徒会長さんも人が悪いわね、何も教えてないなんて」

「えっと……それはどういう……」

「すぐわかりますわ、もうすぐここに来ますので」

「ここに来る？」

「おー、今日はよく頑張ったと思うぜ。

ま、俺には届かなかったけどな」

そこに現れたのは試合に出ているはずのない守矢君だった。

「も、守矢君!？」

「あらあら、何で守矢さんが？」

「つまりそういうことだろう」

「ああ……荒谷殿ならなんか納得できますねえ……」

驚いている二人となく理解した二人。

「今日のチャールルの砲手は守矢君だったの？」

「いやあ、久々の試合はやっぱりいいな！」

特に最後の展開は俺好みだ」

「な、なんで聖グロの砲手をやってるの？」

「それは私が説明いたします」

その問いにダージリンが横から口を挟む。

「前々から守矢さんが大洗学園での学生生活を送っていることは掴んでいました。そこにそちらからの戦車道での練習試合の申し込みがありました」

「俺、行ってる学校については

ほとんど誰にも話してないんだけどなあ……」

「学校については守矢さんのお母様が教えてくれましたわ」

「よし、今度会った時ティーガー風パスタお見舞いしてやる」

俺の個人情報ガバガバじゃねえか。

せめて俺に一言聞いてから話せよ！

「その際の試合を受ける条件として、

荒谷さんを短期の転校で1日貸していただけるようお願いしましたの」

「なんでまた守矢君を……」

武部の疑問ももつともだな。

「対戦相手として戦ったのならわかるでしょう？」

この方がどれだけの技量を持っているか」

「それを間近で見る為に守矢君を砲手にしたんですか？」

間近で見て何かを得られる場合もあるからな。

「まったく参考にはなりませんでしたけど」

アッサムが肩をすくめる。

それはしょうがない部分もある。

「基礎を延々と反復した結果だからな。

何も特殊なこととしてるわけじゃないから

参考になるようなことはないさ」

実際そうだからな。

俺の場合それに加えられてるものが英霊のスキル。

だがこれは普通の人間にはどうしようもない。

「うちの母さんだって何も特別な事はしてないぞ。

『地味な練習こそ正念場で活きる』って、

今も停止射撃と行進間射撃の練習は欠かしてないぞ」

本当にすごいのは母さんだろう。

特別なものは何もないのに自らの能力と努力で砲手としての頂点にいる。

母さん相手だと未だに勝ち越すことが出来ない。

壁は高いなあ……。

しばらく取り留めない会話をしていたが、

みほ達は角谷の姐さんに呼ばれて行ってしまった。

姐さんたちと一緒に行く前になにやら話していたようだったが、

顔色がとてつもなく悪かった。

どうしたのかと聞いたが答えてくれなかったし、

何かするのであれば手伝おうかと言えば、

「絶対にこないで!」

と、角谷の姐さんを除く他全員から言われた。

なんかちよつと寂しいぞ。

「本当は皆さんをお茶会にご招待しようと思っていましたけど……」

「ああ……町の方には何故か行っちゃいけないらしいから、

そちらに参加させてもらえろと助かるんだが……」

お祭りの会場にいけないなら何もしようがないし……。

「ええ、歓迎いたしますわ」

「そういえば少し気になってることがあるんだ」

聖グロの紅茶の園で紅茶とお菓子を堪能していたんだが、ふと気付いたことがあった。

「守矢様の好みではありませんでしたか？」

アッサムが心配そうに尋ねてくる。

お菓子を作ったであろうオレンジペコも不安そうな顔をした。

「アッサムの入れたお茶もオレンジペコのお菓子も美味しいぞ」

ほっとする二人。

「でしたら何を気になされてるの？」

優雅にお茶を口にしながらダージリンが尋ねてきた。

……まあ、別になんてことないことなんだが。

「何でダージリンって試合以外じゃ『荒谷さん』なんだ？」

ピタッと手の止まるダージリン。

「いや、試合中はずっと『守矢さん』だったからな。

なんでだろうなー、ってな」

本当に何てことない単純な興味だ。

「そういえば、ダージリンは守矢様を名前で呼びしてませんね」

「別に理由があるわけではありませんわ」

「嫌いなやつならともかく、別に名前で呼んでもらっても構わんがな。

みほ達だって名前で呼んでるしな」

「詳しく聞かせて貰ってもいいかしら?」

キリッとこちらを見てくるダージリン。

いや、意味がわからんぞ。

「詳しくもって言われてもなあ……さっき会ったチームの

背の一番低いのとくせっ毛の子以外は俺のこと名前で呼んでるぞ」

「他にはいらっしやるのかしら?」

「そんなの聞いてどうすんだよ……」

「他にはいらっしやるのかしら？」

怖えよ。

「まほは呼び捨て、ちびっ子隊長は謎の愛称。

そうだ、千代美さんも俺のことは呼び捨てだな」

「これからは守矢さんと呼ぶことにしますわ」

「お、おう……別にかまわねえよ？」

くすくすと笑うアッサム。

あれか？まさか普段は恥ずかしかったとかそんなんか？

まっさかなあ……。

そう思案してると、ドタドタと足音が聞こえてきた。

「この感じ……！」

椅子から立ち上がりすごい勢いで開きそうな扉を見る。

「あーらーやーさーまー!」

やはり扉はとんでもない勢いで開かれた。

現れたのはピンクの髪にお嬢様らしくない行動をするお嬢様。

皆様ご存知ローズヒップ。

「とおー!」

そのまま一直線に俺にダイブしてくる。

そいつをキャッチし高々と抱え上げる。

絵面的には子供を高い高いしてる大人だ。

「どうだローズヒップ、ちゃんと勝ったぞ!」

「高いですわ!すっげえですわ!」

キャッキヤとはしゃぐローズヒップ。

本当お嬢様らしくねえなあ。

俺もテンションが上がってしまったって、ローズヒップを上を放り投げる。

「飛んでますわ!私飛んでますわ!」

結構高く放ったが喜んでるようで何よりだ。

「今日の試合本当にすごかったですの！」

テンション上がってしまったってダッシュできましたの！」

そのまましばらくローズヒップで遊んでいたが、

話が進んでないことに気付いて降ろしてやる。

「そうかそうか、テンション上がったんなら仕方ないな！」

ぐしぐしと頭を撫でてやる。

「廊下を走るなどあれば言っているのに……」

「淑女の欠片もありませんわね……」

「あはは……」

これにはアッサム・ダージリンも苦い顔。

オレンジペコは苦笑い。

「私にも戦い方を教えてほしいですわ！」

「教えてやってもいいんだがなあ……どう思うダージリン?」

「まともに作戦を遂行できるようになってはじめて考える、くらいですわね」

辛辣だなあ。

「なんだ、ローズヒップってそこまで荒くれてんの?」

「クルセイダー隊の隊長を任せられるくらいには優秀ですわ。」

1にスピード2にスピードのような考えに対しては言いたいことはありませんけど」

「ダージリン様に褒められましたわ!」

褒めてない褒めてない。

「で、ローズヒップは俺に何のようだ?」

俺への用事は別のことじゃないか?

「これですよ!」

ポケットからスマホを取り出す。

「写真を撮ってほしいですよ!」

お、そういえば試合前に約束してたな。

「構わんど、どんな風に撮るんだ？」

「こういうこともあるうかとこんなものを用意いたしましたわ！」

テッテレー、と言う効果音が鳴りそうな感じで

一本の棒を取り出す。

「自撮り棒と言う物らしいですわ！」

これがあれば誰かのお手を煩わせることもなく

写真を撮れるのですわ！」

うん、予想以上に普通でありふれたものだったな。

「で、どんな感じで撮るんだ？」

普通に撮ればいいのかね？」

「お嬢様っぽく撮ってほしいですわ！」

……は？」

「いや、ざっくりしすぎじゃねえか？」

「私も聖グロリアーナの一人として、

淑女らしい写真を撮りたいのですわ!」

なるほど……全然わからん!

「何だよ淑女らしい写真って……」

「ダージリン様やアッサム様はこんな写真をお撮りになつてゐるのですわ」

そう見せてくるスマホには紅茶を飲むダージリンとアッサムに、

微笑みつつ給仕するオレンジペコ。

「絵になつてんなあ」

確かに淑女と言うか……。

物語の貴族のお嬢様とか、お姫様のオフショットみたいな。

「こんな!写真が!私も!撮りたいのですわ!」

気合の入れ方が写真の人物とは真逆だなあローズヒップ。

お前の場合トレジャーハンターとかアクティブさ全開な方面だもんなあ。

「というか、それなら俺は必要ないんじゃないか?」

「お話にはお姫様と騎士が登場するのが当たり前でしょ?」

これまたすげえピンポイントな当たり前だなあ……。それに淑女からいつの間にかお姫様になっちゃってるし。まあ、特に考えてるわけじゃないんだろぅけど。

ローズヒップだし。

「お姫様なあ……」

ふーむ……。あ、一つだけ思い浮かんだぞ。

「それっぽく撮ればいいんだよね？」

「ですよ！」

「よっしゃ、じゃあこっちこい」

「はいですわ！」

とてとて近寄ってくるローズヒップ。

「俺が君を抱えたら首に手を回して落ちないようにしてくれ」

「了解いたしましたわ」

「では失礼」

ローズヒップを抱えて首に腕を回してもらう。

片方の腕は背中から回し、逆の腕は膝裏へ回ししっかりと固定する。

「よいしょっと……」

バランスを取りながら自撮り棒を伸ばすローズヒップ。

「撮りますわよー!」

笑顔でシャッターを切るローズヒップ。

うん、あれだ。

これはお姫様抱っここと言うやつだ。

「素晴らしい写真ですわ!」

ローズヒップが腕から飛び降りこちらに撮った写真を見せてくる。

「お、いい顔してんじゃねえか」

はじけるような笑顔で写るローズヒップ。

いい写真になってよかったな。

「ありがとうございますですわ！」

来たときのようにダッシュで立ち去っていった。

「さて、約束も終わったし俺もそろそろ……」

帰ろうか、と言おうとしたところで鋭い視線が突き刺さった。

「……なんだよダージリンその目は」

ダージリンがジトーっと音の聞こえてきそうな

視線をこちらに向けていた。

「いえ、いたくローズヒップがお気に入りのように」

「そうだなあ、聖グロには珍しい子だからなあ」

「……ローズヒップばかりずるいですわ」

「なんか言ったか？」

「いえ、何も？」

「ふーん……」

……いや、聞こえてたんだけどな。

何が不満なんだか。

あれか、ローズヒップだけ写真撮ってずるいつてか。

子供じゃないんだからさあ……。

「はあ……ダージリン、カメラ起動して俺に寄こせ」

「な、何をする気かしら？」

そういいながらも即カメラを起動するダージリン。

「いや、カメラ起動したんだから写真撮るだけだが」

「そ、そう。そうよね。それしかないわよね」

何で動揺すんだよ。

「ほれ、こっちこい」

遠慮がちに近寄ってくるダージリン。

「えっと……これくらいでいいかしら？」

「離れすぎだ、それじゃ写らねえだろ」

ダージリンに体を近づける。

「そ、それだと近すぎますわ！」

ええい！まどろっこしい！

「じゃあ撮るぞ……はい、チー……ズ！」

ズ、の言葉と同時に肩に腕を回して抱き寄せて、
なおかつ顔を近づける。

「ちょ、ちよっと！」

だがもう遅い。

無常にも切られるシャッター。

「どれどれ……まあ、思い出としてはいいんじゃないか？」

そこに写っていたのは満面の笑みの俺と

顔を真っ赤にしながら驚いた顔でこちらを見るダージリンだった。

「女性の扱い方を勉強してはどうですか!？」

顔を真っ赤にしてプリプリと怒るダージリン。

それを見て笑いをこらえるアッサムとぼかーんとするオレンジペコ。
「おっと、これ以上怒られる前に退散するとしますかね」

写真はちゃんと撮ったのに文句を言われるのは遺憾ではあるがな。

「守矢様」

クラブハウスを出て、聖グロ学園艦から船梯子で
港に降りようとしたとき背後から声をかけられた。

この呼び方と声で簡単にわかるな。

「どうした？アッサム」

「不機嫌のようでご機嫌なダージリンに代わってこれをお渡しに」

そう言ってバスケットを一つ手渡される。

「なんだそのよくわからん状態は」

中身は……まあ、なんとなく察しはつく。

「そちらは隊長さんへの贈り物ですわ」

「了解、ちゃんと渡しておく」

「それと……これはご存知かもしれませんが……」

そして俺はアッサムから予想外の話を聞かされたのだった。

「お、集まってるな」

陽も落ち学園艦に戻るとみほ達Aチームと生徒会の面々が集まっていた。

「守矢君、遅かったね」

「出港ギリギリですまんな、クラブハウスのお茶会に誘われてな」

アッサムから聞いた件を確認したかったが……ここじゃ不味いな。

今度、姐さんに時間作ってもらうか。

「そうだ、みほに渡すもんがある」

俺はダージンからの贈り物をみほに手渡す。

「聖グロの隊長からだ」

「ダージンさんから？」

みほがバスケットを開けると、予想通り紅茶が入っていた。

「すごいです！聖グロリアーナは好敵手と認めないと紅茶を送らないとか！」

「そうなんだあ」

戦車道に縁のなかった武部が知らないのも無理はないが、

この手の情報に詳しい秋山は知ってたか。

「公式戦では勝たないとね」

「はい！次は勝ちたいです！」

「公式戦って？」

「戦車道の大会でしようか？」

ああ、武部と五十鈴はそっからなのか。

「戦車道全国高校生大会です！」

一歩一歩、着実に歩みを進めていくとしよう……。。

歩く速度はとてつもなく遅いですけどネ！

30・抽選会場……の外です！

知ってるか？初投稿は3つに分けられる。

初投稿を求める奴、

初投稿に生きる奴、

初投稿を読める奴、

この3つだ。

歪んだパズルがリセットされたので初投稿です。

「男は抽選会場に入れない、と」

「申し訳ありませんがお引き取り下さい」

全国大会の抽選会場。

そこにみんなと一緒に意気揚々と来たのだが、

入り口で俺だけ係員の女性に止められてしまった。

ちなみに抽選に遅れてもいけないので

他の人達には先に会場内に入ってもらっている。

まあ、問題になってるのは俺だけだしな。

「ちゃんとした大洗学園戦車道の履修生なんですけど」

「ええ、そうですね」

ふむ……戦車道関係での男性への風当たりが強いのは重々承知している。

未だに男子禁制を謳っているところもあるくらいだ。

しかし抽選会場にすら入れないとはなあ……。

専用のチャンネルじゃライブ配信もしてるんだぞ？

「男子で戦車道を履修しているから入れないんですか？」

直球で聞いてみたが、その言葉に何かに気付いたような係員さん。

「ああ、何か勘違いなさっている様ですね」

あ、そうじゃないっぽい？

「何をしていようが関係なく男子だから入れないのです。」

中は女の子ばかりなのでその為ですよ」

そう微笑む係員。

「中にいるスタッフも女性しかいません。」

子供達に万が一にも何かあってはいけないと言う理事長の配慮です」

「理事長……しほさんがですか?」

「あら、理事長をご存知なのね」

「マジであの人自分の子供にだけ不器用發揮してんなあ……」

こんなにちゃんとした配慮が出来るのに……。

しほさんはなぜこんなにも局所的ポンコツなのか。

「そういう理由であればしょうがないですなあ」

「でも男子で戦車道を履修するなんて珍しいわね。」

公式試合には一切出られないと言うのに」

「戦車に乗ってるのが楽しいですから。」

では、時間まで外で時間を潰しておく事にします。

お仕事頑張って下さい」

俺はその場から立ち去った。

「とりあえず駄目だったことと終わったら連絡くれるように

みほにメールしておいて……と」

……その間にしようか。

「暇を潰せるようなことがあれば……あれ？」

会場の外、ちょっと外れたところに座る着物美人。

「菊代さん？」

「あら、荒谷様ではないですか」

西住家家政婦井手上菊代さんがそこにいた。

「えっと……どうしてここに？」

熊本からなんで態々こんなところに？

「理事長として参加される奥様の付き添いですよ」

「え、家のほうは……」

「ああ、家政婦としても働いておりますが、

奥様の秘書としての役割も担っていますので

今日はそちらのお仕事優先です」

なら納得だ。

「正直言えば、奥様の付き添いはついでで

お嬢様方の様子を見に来たのですけど」

しほさんはついなんですか……。

まあ、しほさんは大人だしなあ。

「先ほど、みほお嬢様をお見かけしましたが

元気でやっているみたいですね」

「ええ、仲間と戦車乗ってますよ」

「聖グロと試合をされたとか」

「情報はやいですね」

「ふふ、家政婦で秘書ですので」

家政婦で秘書ってのはヤバイんだな。

「冗談ですよ、練習試合とは言え戦車道連盟が必ず絡みますからね」
壊れた家屋の補償やらなんやらがあるからな。

認可の書類なんかで知ったってわけか。

「荒谷様、久しぶりの砲手としての試合はどうでしたか？」

あ、そこらへんも知ってるんだな。

「みほの化け物っぷりを再確認しましたね。」

それと思った以上に選手の戦闘に関してのセンスがいい。

実際、あの練習日数で聖グロを食らいついてるのは異常ですよ」

「それを阻んだのは荒谷様でしょう？」

「敗北を知って得られるものがありますから」

「本当のところはどうなんですか？」

くすくすと笑う菊代さん。

かなわねえなあ……。

「練習試合とは言え負けるのは嫌です」

これが正直な感想だ。

「男の子ですね」

そう微笑む菊代さんだった。

「……黒森峰を出ていい出会いをしたのですね、みほお嬢様は」

しばらく無言が続いた後、ぽつりと菊代さんが呟いた。

「黒森峰に居た時とは表情がぜんぜん違いました」

「あいつに足りなかったのは張ったものを緩められる場所ですからね」

黒森峰にもエリカと言う親友はいたが、

気の抜いていい場所はほとんどなかっただろうからな。

西住の名前を背負っている以上、

あの学校で求められるのは西住流としての立ち振る舞いだ。

あいつの性格や戦い方とは真逆だからな。

まほは隊長としての立場があるだろうし、

エリカがいくらフォローしても多分追いつかなかったろう。

みほの問題はあの一件でほぼ片付いた。

現状を見れば上手い事いい方向に動いたと思う。

「まほの方はどうなんですか？」

「まほお嬢様ですか？」

結構なシスk……妹思いなお姉ちゃんだからな。

あれからも結構な頻度で連絡が来てるから、
今も黒森峰で踏ん張ってるのは知ってるんだが……。

「まほお嬢様も黒森峰を立て直そうと必死になっておられますよ」

「……やっぱりみほの抜けた穴は大きいですか」

そりゃそうか。

今までみほが人知れずカバーしてた部分を

誰かが補わなきゃいけないんだから。

「逸見様がカバーはしていますか、

みほお嬢様ほど上手くはいかないようで」

エリカも頑張ってるんだな。

最近めっきり連絡くれなくなったから

どうしてるか知らなかったんだよな。

「焦りとプレッシャーですかね。」

余裕がない分周りが見れてない、か」

押しつぶされそうな不安とも戦ってるんだろうな。

前任者が有能だった分重たくのしかかってそうだな。

あいつも才能はすげえと思うんだけどな。

ちよーっと、視野が狭くなる部分があるんだよねあ。

まほほど固くはないが、みほほど柔らかくはない。

突出しているわけではない。

かと言って中途半端というわけではない。

かなり高い水準で今は収まっている。

正直なんかのきっかけで突き抜けたら、

島田流の愛里寿ちゃんを除いて、みほやまほの最大の脅威になると思うんだよ

なあ。

一番近いところで化け物二人を見てるんだからな。

そんな時、ポケットのスマホが鳴り出した。

「すみません……みほからだ」

画面に映された相手の名前はみほ。

「もしもし」

『あ、守矢君? 今抽選会が終わったんだけどどこにいるの?』

「会場近くにはいるぞ」

『今から沙織さん達と戦車喫茶? に行くんだけど守矢君もどうかなくて』

マイクを抑えてちらっと菊代さんのほうを見る。

「私も奥様のところへ向かいますので大丈夫ですよ」

抽選会が終わったみたいだしそうなるか。

「おっけー、会場の入り口に向かうから近くにいてくれ」

『うん、早めに来てくれると助かるかな』

「了解、んじゃ後で」

そう言って通話を切る。

「すみません、みほの所に行って来ます」

「みほお嬢様に宜しくお伝えください」

「わかりました、しほさんにも宜しく言っておいてください」

「承りました、それではまた」

綺麗にお辞儀をして菊代さんは行ってしまった。

「うし、俺も集合場所に急ぎますかね」

みほ達と合流し一同は戦車喫茶エクレールへ。

「やっぱ女の人が多いな……」

流石戦車道関連の施設、男の俺が完全に浮いてるじゃねえか。

6人で席に座りメニューを開く。
スイーツばっかだな……嫌いではないが。

90式戦車の形をしたボタンを押し、店員を呼ぶ。

ボタンを押すと結構な音がした。

……音が主砲になってんのか。

「ケーキセツでチョコレートケーキを二つ、イチゴタルト、
レモンパイにニューヨークチーズケーキを1つずつ」
五十鈴が慣れた感じで注文をする。

「守矢さんはどうされます?」

「俺はアイスコーヒーを」

「承りました!少々お待ちください」

メニューを回収し店員が立ち去る。

あちこちから主砲の音がするが1つ1つ違うんだな。

こういう細かいところちゃんとしてるのは嫌いじゃない。

しばらく待っているとドラゴンワゴンでケーキが運ばれてきた。

ケーキの形も戦車のようになっている。

マジか、こんなに凝ってるのか。

そりゃ、客も多いわけだ。

「ごめんね……1回戦から強いところに当たっちゃって」

「そういや1回戦どこと当たるんだ？」

その言い方から察するに強豪校っぽいが」

「……サンダース大付属」

「また、すごいところと当たるな」

「そんなに強いところなんですか？」

知らない人はわからねえか。

「強いと言うよりすごくりツチな学校ですね。」

戦車の保有台数が全国1位でチーム数も1軍から3軍まであります」

さすがのゆかペディアである。

簡潔にわかりやすく説明してくれるな。

「序盤で当たるのは逆にラッキーではあるがな」

「どういうこと?」

「公式戦の1回戦は車両が10両までって決まってるの。

砲弾の総数も決まってるし」

「でも10両ってうちの倍じゃん!

それって勝てないんじゃない?」

んん?」

「何で車両数でそんな心配になるんだ?」

「何でって倍だよ!倍!」

それはわかる。

だけど2倍だぞ?

「つまり1両でたった2両撃破出来ればいいんだろ?」

「え?」

何だその声は、その引き気味な表情は。

「も、守矢君。自分を基準にしちゃ駄目だよ……」

みほも引き気味じゃねえか。

「ちなみに荒谷殿なら出来るんですか？」

「どんな手を使ってもいいなら2両くらいなら多分撃破出来るぞ」

「さっすが荒谷殿です！」

うんうんと頷く秋山。

他の人間は呆れたような視線だ。

何故だ、10両とか無茶言われてるならわかるが、

2両ならどうにかできるかも！って思うだろ？

……え、違うのか？

「……まあ、2倍は初心者ばかりの大洗じゃつらいかもしれない」

話の流れを無理矢理変える。

「ただ、全国大会はフラッグ戦だ」

そう、殲滅戦ではなくフラッグ戦なのだ。

「それがどうしたのよ」

武部がプリプリ怒っている。

かわいくねえぞ。

「極端な話、こっちがフラッグ車1両に対して向こうが30両でこようが先にフラッグ車を落としちまえば関係ないだろ」

車両数が戦力の優劣に直結はするが

イコール結果とはならない。

そこは戦術と腕でカバーすればいい。

みほの言う『みんなで勝つ戦車道』がそれを見せてくれると俺は信じている。

「……」

武部、その非難するような視線はやめろ。

「……単位は」

ぼそりと呟く冷泉。

「我が道を行くなあ……少なくとも負けたらもらえんだろ」

「むう……」

冷泉がケーキをぱくつく。

意外と食うんだな……こいつ。

「それより、全国大会ってテレビ中継されるんでしょ？

ファンレターとか来たらどうしよう！」

「生中継は決勝だけですよ」

「まあ、専用のチャンネルならライブ配信があるし

勝ち進むにつれてギャラリーは増えていくからな。

準決勝くらいになると結構な数になるぞ」

実際戦車道のファンってのはかなりの数いるからな。

「よし、みんなに見てもらえるように頑張ろう！

……ん、美味しい！」

理由はどうあれ頑張ることはいいことだ。

「ほら、みほも食べて！」

「うん」

フォークを手に取りケーキを食べようとしたみほだったが、

「みほ？」

少しだけ懐かしい声にその動きが止まった。

「アンタ、こんなところで何やってんの？」

そこには黒森峰の制服を着たエリカとまほがいた。

もうすぐ年末なのナ！

後1本くらい上げたいのナ！

……多分無理だナ！

31・前チームメイトです!

年が明けて初投稿です。

今月末から引っ越して来月頭から働くので、この上なく更新が遅れてくると思います。

ユリゲタダ サイオシヤスナジゲ モビラセシケド

!

「エリカさん!それにお姉ちゃん!」

「……」

むすっとした顔してるように見えるけど、久しぶりに妹に会えてすごい喜んでる顔だ。

「げ、どこの男かと思ったら守矢じゃない」

「なんだその反応は、泣くぞ、大声で泣いてやるぞ」
「泣いてみなさいよ、恥かくのはアンタだけだから」

ぐう正論すぎて悲しい。

「みほ、ここで何をやっている？」

心なしそわそわしているまほ。

「えっと……全国大会の抽選会の帰りに寄り道してるだけだけど……」

「やっぱ大洗学園のくじ引いてたのアンタだったのね……」

「あはは……色々あって……」

「こちらの方々は？」

「あ、私の乗ってる戦車のメンバーだよ」

「みほの姉の西住まほだ、こっちは副隊長の逸見エリカ」

「ちなみにエリカの好きなものはハンバーグだワニ」

「はっ倒すわよ守矢ア……！」

すまんなエリカ、こっちの学校にはお前のように

弄り倒せるやつがおらんのだ、徹底的に遊ばせろ。

ケーキを食べている冷泉を対面の席に移動させてスペースを作り、

俺 まほ エリカ みほ

冷泉 五十鈴 武部 秋山

の順番で座る。

立ったまんま話すのはあれだしな。

……ちょっと狭いが仕方なからう。

「けどアンタ復帰が早すぎるんじゃないの？」

追加でオーダーしたケーキをつつくエリカ。

おーおー、心配してくれちゃってまあ。

「うん、今は戦車に乗るのが少し楽しくなってきたよ」

「去年の一件があるのに図太いわねえ」

もぐもぐとケーキを食べるエリカ。

ほっぺ膨らませてハムスターみたいだなこいつ。

「あ、あの！」

びしっ！と手を上げる秋山。

「去年の大会、西住殿……みほ殿の判断は間違っていないかったです！」

黒森峰であるまほとエリカの前でよく言えるもんだ。

いい根性してるぜ。

「秋山さん……」

いい友達だなあ、みほ。

「君は？」

「秋山優花里と申します……」

「秋山さん、君はそう思っているんだな？あの試合のみほの事を」

「は、はい……」

俯く秋山。

まあ、真顔でまほそんな事言われたら萎縮するよなあ。

でも安心しろ秋山。

「妹をちゃんとみてくれて見てくれてありがとう」

頭を下げるまほ。

「黒森峰内は言わずがな、どうしてもみほをみほとしてではなく

西住家の娘と見る人間が多くてな。だから、ありがとう」

こいつは妹大好きなお姉ちゃんだぜ？

妹のことをよく言われてそれを否定するようなやつじゃねえよ。

「それに、去年の一件は全国大会の事じゃないわよ」

「ええ？ では一体……」

「お母親に対して西住流を否定し、

黒森峰から転校すると面と向かって言っただ」

「えっと、みほさんのお母様は確か……」

「西住流の師範だっけ？」

「そ、島田と並び2大流派といわれる西住流の師範。

もう時期、家元になるって話もあるみたいだけどね」

あー、なんかメールで言ってたなあ。

師範をしてたときよりもさらに時間が取れなくなるから

家族と会える時間が少なくなるって嘆いてたな。

「いきなり守矢^{コイツ}がやってきて、散々かき乱していったのよ」

「いい方向に転がったんだから許せ、でなければティーガー風をお見舞いするぞ」

「アレを思い出させないで……今でもパスタ見るとこみ上げるものがあるんだから……」

まあ、確かにお腹は一杯になるよな。お腹は。

「あはは……でもあのおかげでお母さんの気持ちを

知ることが出来たし良かったなって思うんだ」

すれ違いに少しだけお節介を焼いただけなんだけどな。

「そういや、みほの抜けた黒森峰はどうよ？」

さっき菊代さんからちよっとだけ聞いたんだけどな。

「なかなか難しいな。エリカが頑張ってはくれているんだが」
チラッとエリカを見るまほ。

「……どう頑張っても私じゃこの子の代わりにはなれないのよ」
そりゃそうだろ。

みほはみほ、エリカはエリカだからな。

「悔しいけど壁の高さを実感してるわ……」

「壁は高いほうがやりがいはあるだろ？」

「高すぎるのよ、本当……憎たらしいくらいよ」

ふんつと鼻を鳴らすエリカ。

ああ、予想したほど思い詰めてはいないみたいだ。

ただ時間の問題ではあるな。

まほが上手いことやってくればいいんだがな。

「それより、初戦の相手サンダースなんでしょ？」

勝つ見込みあるの？」

「難しいけど……絶対に勝てないってことはないと思う」

「黒森峰^{うち}ほどではないにしろ強豪よ？」

お、ちゃっかり格上宣言してんな。

しかしエリカも心配性だよなあ。

「開始数分でフラッグだけ撃破すれば問題ないだろ、いけるいける」

「アンタを基準で考えるな！」

辛辣だ。

「あ、あのお……」

おずおずと手を上げる武部。

「む、君は……」

「武部沙織さんだよ、うちの無線手」

みほのアシストが光る。

「うむ、何かな? 武部さん」

「戦車道始めてからずっと気になってたんですけど……、
守矢君ってそんなにすごいんですか?」

「私も、練習試合で相對してすごいと言うのはわかるのですが……」

「あ、彼女は五十鈴華さん。私の車両の砲手だよ」

みほの連続アシストが冴え渡る。

「で、五十鈴さん。相對と言うのは?」

「この間、聖グロリアーナと練習試合をしたんだけど、

その時の隊長車チャールルの砲手が……」

「俺だったんだなあ、これが」

「はあ!? アンタ試合したの!?!」

「驚くことかよ。非公式なら俺が参加できる場合だってあるんだぜ」

「……いくら車体を振っても避けなかった」

「彼女が冷泉麻子さん、IV号の操縦手で、

さっきの優花里さんが装填手でこれが私のチームだよ」

淀みのないアシストだあ。

「ふむ……じゃあここに居る全員が守矢の砲撃を受けたわけだから
なんとなくわかっていとは思う」

キラリと目の光るまほ。

「守矢はどんな状況であろうが確実に狙ったところに当ててくる。

これがどういふことかわかるか？」

「……どんどん味方が撃破される？」

「武部さんの答えも正解だ。だがそれ以上のものがある」

うーん、と考える武部。

「沙織さん、試合中にチャールから狙われてるとわかってどう思ったかな？」

みほが少しばかりヒントを与える。

ヒントと言うよりはあの時の事を思い出させてるだけだが。

「えっと……レベルが違いすぎてパニックになって……」

「勝てる気がしなくなりましたよねえ。」

あの時、西s……みほ殿がいなければどうなっていたことか……」

「……ああ、心を折りに来るのか」

大当たりだ冷泉、砲撃手の仕事は撃つだけで終わりじゃない。

「そうだ、的確な砲撃は相手の動揺を誘える。」

逆に乗っている隊長は自信を持って指示を出せる。

自分の思い描いたものを完遂できる確率が上がるからな」

絶対じゃないのがミソだな。

状況は刻々と変わるし、狙える位置に居なきゃ撃ちようがないしな。

「後はそうだな……守矢が居ると言う安心感があるか」

「安心感……ですか？」

「五十鈴さん、例えば勝負の行方を左右する場面で

自分の砲撃が鍵になっている状況だと思うだろう」

「そうですね……緊張して普段の力が出せるかどうか……」

「自分が失敗したとしても絶対にフォローがあるとしたら？」

「それならさっきよりは肩の力も抜けますしそちらのほうが……あ」

「安心感と言うのはそういうことだ」

俺の場合は俺がしくじっても母さんが居るって安心感だな。

「技量もそうだが精神的な支柱としての役割が大きいな」

べた褒めじゃねえか。

「はあ、守矢君すごかったんだねえ」

「……理不尽の塊」

「今度、砲撃を教えてほしいです」

「やっぱり聞けば聞くほどおかしいですよ、荒谷殿」

反応微妙だあ。

「隊長、そろそろ時間ですよ」

「まだ語り足りないのだが……」

「これ以上居ると帰れなくなりますよ」

「そうになったら守矢の家に泊まればいいだろう？」

「泊めねえよ、泊められるわけないだろうが」

何言われるかわかったもんじゃない。

「それに明日は練習です」

「むう……仕方がない……」

うわあ、すっげえ不服そう。

ぶつぶつ文句を言いながら立ち上がるまほと呆れるエリカ。

これじゃどっちが隊長かわかんねえなあ？

「名残惜しい、ほんとに名残惜しいがこれでお暇させてもらう」

「本気で悔しがらないでくださいよ……これ、私達の分」

自分達が食べた分のお金を出そうとする。

「さっきエリカ弄って遊べたし俺が出しといてやるさ」

「……弄って遊んだってのが引っかかるけど素直にご馳走になっておくわ」

「すまないな、守矢」

「なに、久しぶりに会えて嬉しかったからな」

「うん、私も守矢に会えて嬉しかったよ」

にこりと微笑むまほ。

こういうところは可愛いんだけどな。

そして二人はみほを見て、

「みほ、決勝で待ってる」

「負けんじゃないわよ、アンタを倒すのは

私達黒森峰なんだから」

それだけ伝えて二人は帰っていった。

「かっこいいですね！西住殿のお姉さん！」

「なんか出来る女？ってカンジ！」

「みほさんとは真逆な感じがします」

「……生真面目そうだ」

さすが黒森峰で最もバレンタインチョコをもらう女傑、

みんなの反応は上々だ。

これでポンコツやらかさなきゃ最強だな！

「さて、俺らも戻ろうぜ。

明日から練習やらで忙しくなるだろうしな」

「……もう二つケーキを追加で頼んでもいいか？」

まだ食う気かよ……。

学園艦に戻る連絡船で外の空気を吸おうと甲板に出たら
なにやら生徒会とみほ・秋山が何かを話していた。

微妙に遠くて全部は聞けなかったが、絶対に勝てだとか勝たなければとか桃ちゃんがプレッシャーをガンガンかけていた。なんかみほを居れば勝てる

軍神かなんかと勘違いしてないか？

確かにみほは強い。

追い込まれてからの粘りなんかは特にすごいしな。

が、それは試合の最中の話だ。

勝つ為の情報収集や事前の準備習は怠らないし

その積み上げが勝利になる。

みほだって普通の女の子だ。

過度にプレッシャーを与えられれば

精神的に参る事だってある。

今一番やるべきことは、

周りもその目標に向かって一緒に動くことだ。

誰かが割を食うような環境じゃあ駄目だ。

誰もが適度な緊張感を持ちつつのびのびとやれる環境にしないと。

しかしチームの編成がわかれば戦い様があるときたか。

ふむ……そのお願い叶えてやろうかな。

だが、その前に角谷の姐さんにはぜひとも
聞いておかなきゃな。

「大洗が廃校……か」

穏やかじゃないことこの上ねえよなあ。

時間がかかった割には中身がねえよなあ。

まあ、準備が忙しいし多少はね？

32・大事な告白です!

就職……完了です。

これは更新速度が……さらに倍々タイムで遅くなるな……。

営業の仕事がつらいのでどれだけ期間がかかっても初投稿です。

「角谷の姐さん、ちょっと話があるんだけどな」

連絡船が学園艦に到着した後、荒谷ちゃんからそう声をかけられた。

「ええ、もう遅いんだよ? 明日じゃ駄目なの?」

夜も遅いのに一体なんだろう。

「出来るだけ早いほうがいいんだがね」

「なになに? 生徒会に入ってくれるの? だったら来年も安泰だねえ」

言って悲しくなってくる。

来年度などあるかもわからないのに。

「その来年に関してなんだよな、これが」

「来年に関して？ 一体何かな？」

少し手が汗ばむ。

まさか、そんなはずはない。

知られているはずがない。

きっと、来年の行事についてに違いない。

そう自分を納得させる。

「俺らに話してない大事なことがあるだろ？」

「大事なこと？ なんにもないんだけどなあ？」

動揺を必死に押し殺す。

なんで、どうして知っている？

小山が話すなんてことはないだろうし、

かーしまも抑えてあるから問題ない……。

「前はあれで引き下がったがそうも言ってられないみたいだからな」
「なにがなんだかわからん」

「戦車道の復活は大洗学園の廃校に起因するものなんだろう？」

時間が止まった。

私は確かにそう感じた。

知られてしまった。

最も知られてはいけないことを
知られてはいけない人に知られた。

「……どうやって知ったのかな？」

「マジで偶然知り合いから聞いたんだよ。」

まさか自分の通ってる高校がそんなことになってるなんてな」

この間の様におどけた様子はなくこちらを見つめてくる。

「他に知ってる人は？」

「いや、生徒会を除けば俺だけだろう。

ここにはそういった情報を取り扱う人間は少ないからな」

その言葉で少し安心する。

「……荒谷ちゃんの言う通り、今年度一杯での廃校を通告されたんだ」

「は？今年度？普通廃校って言ったら3年くらいは

期間があるだろう？在校生どうすんだよ？」

「今いる在校生に関しては文科省で転校先を割り振るんだって」

「完全ランダム？」

「みたいだよ」

「んなバカな話があるかよ……」

「それがあるんだよねえ、私も耳を疑ったよ」

両手を広げて呆れる荒谷ちゃん。

そんな荒谷ちゃんを見て少しだけ気持ちが悪くなった。

「……今年の戦車道全国大会で優勝すれば廃校が撤回されるんだ」

私は3月に文科省から来た役人とした話の内容を伝えた。

学園艦を運用する為には多額の資金が必要となり

現在文科省では全体数の見直しをし成果のない学園艦から

統廃合していくことを進めている。

なのでこれといった実績がなく男女共学としてからも

生徒数の減少が止まらない大洗学園を廃校とし学園艦を解体する。

そう文科省の役人から言われた事。

その役人が口走った「昔は戦車道が盛んだった」という言葉から

ならばこちらはその実績を作る、

まさか優勝校を廃校には出来ないでしょう? そう役人に言った事。

それを荒谷ちゃんは黙って聞いていた。

「これが私が隠していたこと全部だよ」

全部、荒谷ちゃんに話してしまった。

必死に隠していたこと全部。

「ねえ、荒谷ちゃん……お願いがあるんだ」

「まあ、俺が出来る範囲でなら叶えてやるが」

優しいねえ、荒谷ちゃんは。

「この事をみんなには黙って欲しいんだ」

「いや、これは言った方が良いやつだろ」

「言わないでお願いしてくれるなら何でも言うこと聞いたげるよ」

この学校の会長の権限ってすごいんだよねえ。

学園艦自体が生徒主導での運営だから、

大体のことであれば叶えてあげられちゃうんだよねえ。

「ん？今なんでもするって言ったよね」

真顔になる荒谷ちゃん。

「単位とか出席日数とか改竄してあげるし、食券も好きなだけあげられるよ」
その程度ならくしょーだし。

「別にいらねえかなあ、それくらいなら」

「いらないうて……じゃあ何が欲しいのさ」

あんまり資金の要らないものだったらしいなあ。

「角谷の姐さんでも貰おうかね」

……へ？

「一応、風紀委員からも模範生の太鼓判貰ってんだぜ？

冷泉が絡まなきや無遅刻無欠席だからな。それに食券にもさほど困ってねえよ。

いろんな部活の助っ人の報酬がたいてい食券だからな」

「えっと……私ってのはどういふことかナー？」

「言わせんな恥ずかしい」

「そ、それは私のセリフじゃない？」

「まあ、冗談だが」

……それはそれでなんか傷付くなあ。

「なあ、姐さん。何でそこまでして自分で背負い込もうとするんだ？

こいつは大洗の生徒……いや、この学園艦に住む住人の問題だろう？

個人でどうこう出来る問題じゃない」

この学園艦全体の問題だ、学園艦の運営を担っているとはいえ、1学生にこれは重すぎる。

「でも、みんなには余計な期待と責任を背負わせたくないんだよ」

「期待と責任か……」

「例え負けても私が黙ってそんな賭けをしていたと知られば、

非難は私だけに向かうだろうからね」

「それじゃあ、姐さんだけが悪者じゃないか」

「それに私のキャラだったならそんなことしても不思議じゃないでしょ？」

「……」

「だからそれでいいんだよ、最後の最後に責任を取るために

私みたいなのが居るんだからさ」

それじゃあいくら姐さんでも潰れちまう。

「姉さん、もうちょっと俺らを頼っても良いんだぜ」

「そういうわけにもいかないよ……これに関しては、ね」

「戦車だって一人じゃ動かせねえんだよ。人一人で行えることには限界ってもんがある」

どんだけ姐さんが有能でもな。

「だけど……」

何でもかんでも一人でやりすぎなんだよ。

出来るからって一人でやることはねえんだ。

「小山先輩と桃ちゃんには聞けない事もあるだろ。

学園艦の運営はさっぱりだが戦車道に関しては二人よりは上だ」

「……うん」

「だから頼れ、事情を知っちゃってる俺を」

頼られた結果、最終的にどう転がるかはわからんがな。
だけど俺ができることはやってやる。

「んじゃ、俺は野暮用を片付けなきゃならんから行くわ」
ちゃんと考えとけよ、そう言って生徒会室を後にした。

「さてと……これで角谷の姐さんも多少は考えてくれるだろうし、
後は当日までに出来ることをしないとな」

みほが編成がわかれば戦い様があるって言ってたしな。

「ならその編成を聞きに行くとするかね」

久しぶりに行ってみるかあ……あそこに。

「これでどこから見てもサンダース生徒です」

私は手に持ったカメラで撮影を始める。

昨日、みほ殿が編成がわかれば戦えると言っていました。

車両も経験も足りてない私達が勝つには情報戦で優位に立つしかないのです。

学校によっては専門部署もあります。

有名などころで聖グロリアーナの情報処^G理学^I部第6⁶課。

それだけ情報というものは重要というわけです。

しかしながら、そんな諜報員がうちの学校にいるわけもなく……。

ならばと！不肖、秋山優花里が敵地へと潜入し情報を得てこようと！
コンビニの定期便に乗り込んでサンダース学園艦に潜り込みました。

……スパイみたいでちょっとかっこいいと思ったのは内緒です。

いや、みたいではなく立派なスパイなのですが。

「すごいです、シャーマンがずらり！あれはM4A1型！あっちはM4無印！

ああ！わずか76両両しか作られなかったA6があります！

一回戦！頑張ってくださいあい……！」

……思わず興奮して激励をしてしまいました。

でも、しょうがないですね（ニツコリ）

しばらく歩いていると大きな部屋を見つけました。

大量のパイプ椅子が並んでおりそこには生徒がちらほらと……。

どうやらここでミーティングを行うようです!

「では私も目立たないようにここでm……」

私は固まりました。

「(´ω´)ヤア……」

パイプ椅子を3つ並べて爆睡する見知った男性がいたのです。

なぜ……なぜ彼がここに……!?

「(´ω´)……このオウムはお亡くなりになっている……このオウムはイッてる……

息をひきとった……息絶え創造主のもとに戻った……This is a l a t

e p a r r o t」

そこにいたのは同じ戦車道メンバーである荒谷守矢殿でした。

しかしなぜ最後だけ急に英語だったんでしょう……。

はじめてのひとりぐらし、はじめてのえいぎょう、だれかたすけてください

俺の第2の人生は戦車道と言う競技のある世界でした

著者 ふみみん

発行日 2021年8月29日

ハーメルン-SS・小説投稿サイト-

<https://syosetu.org/novel/172953/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。